
学園黙示録 HIGHSCHOOL OF THE DEAD if ~イレギュラーの少年~

狂犬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

学園默示録 HIGH SCHOOL OF THE DEAD

if ソイレギュラーの少年～

【Zコード】

N1002V

【作者名】

狂犬

【あらすじ】

幼い頃に家族を殺人鬼によって殺された過去を持つ主人公　上坂京也はある日、自分が通う藤美学園で、動く死体によるパニックに巻き込まれてしまう。

生き残るためにクラスメイト　高城　沙耶をはじめとする仲間たちと戦い続ける中で、彼は自らが「奴ら」と同じ存在である事を知る。立ちふさがる異形の姿を持ったソイレギュラーな「奴ら」たち。

己に宿った化物の力と仲間の協力で困難を切り抜けながら、彼は戦

い続ける。

学園默示録の2次創作になります。オリジナルのキャラクター、敵キャラが登場します。

第一話「日常の終わつ」（修正版）（前書き）

学園默示録 HIGH SCHOOL OF THE DEAD の
次創作となります。

大まかな流れは原作と同じですが、オリジナルの展開もあります。
オリジナルの男性キャラが主人公になります。ヒロインは高城沙耶
です。

他にもオリジナルの設定・キャラクターがいくつか登場しますので、
ご了承ください。

文章は下手ですが、楽しんでいただけたと幸いです。

読みづらかったり指摘をいたきましたので、改行や文章などを
一部変更してみました。
7/26日に修正。

第1話「日常の終わつ」（修正版）

俺が目を覚ましたのは、日の出にはまだ少し早い時間帯だった。当然ながら部屋の中は真っ暗である。

視線を窓の外にやると、まだ暗くて星すら見ることができぬくらいいだつた。汗を大量に吸つた寝巻きが肌に張りついて気持ちが悪い。俺は枕元に置いてある携帯電話をあさつた。表示は『AM 3:00』となつている。

寝起きの気分は最悪に近かつた。眠つている時に悪夢を見て夜中に目を覚ますのは、別にこれが初めてというワケじやない。

悪夢とは言つても過去の映像を延々と見るだけのものだ。だがそれが、自分にとつて忘れないほど苦い思い出だつたら？

「また、あの時の夢か……」

呴いた言葉は、真っ暗な部屋の中に落ちていぐ。
今から7年前に起こつた連續殺人事件。当時の床主市に住んでいた人間で知らない奴はいなはずだ。

『床主市無差別連續殺人事件』といつ名前で、テレビや雑誌でも大々的に取り上げられていた。俺にとつてはつい昨日の出来事のように思い出せる。被害者の共通点も何もない。男女を問わず、場所も時間も……その全てが無差別で、規則性などが全くなかつたのだ。被害者は近所で遊んでいた小学生、路地裏で仲間とたむろつていた若い男たち、夜道を歩いていた老人、そして俺の家族だ。

俺は唯一、犯人の姿を見て生き残つた生存者である。事件が起つた日は……妹の誕生日で、家族みんなで集まつて楽しくパーティーを過ごしていたところに、あの女は現れた。紅くて長い髪の女は、でかいナタのような凶器で父さんの頭を力ち割り、母さんを殺し……

…俺のそばで泣いていた妹まで殺した。

怖かつた、ただひたすらに怖かつた。それでも俺は、父さんたちを殺した犯人が許せなくて、犯人に立ち向かつた……そこから先のことはよく覚えていない。子供の力じゃ勝てなかつたのは間違いないはずだ。

目が覚めたら病院にいて、ベッドに横たわっていたのだ。

俺の家族を殺害してから犯行が止まつたらしい。結局犯人は捕まらず、事件は迷宮入りとなつた。

俺の家族を殺した殺人犯……あの紅い髪の女は今もどこかで生きているんだろう。あの女は狂つていた。楽しそうに……本当に楽しそうな顔で笑いながら父さんたちの頭をかち割つていた。アイツがびぐびく怯えながら警察から逃げている所など想像もつかない。今も……俺の知らないどこかで、人を殺しているかもしれない。

あの狂気に満ちた女の顔を、俺は一生忘れるることはできないだろう。

太平洋に面した人口100万人クラスの地方都市である床主市。そのほぼ中心に位置する私立高校藤美学園。生徒のほぼ全員が『寄宿舎』と呼ばれる寮に住んでおり、寝食を共にしている。生徒数は多く、敷地の面積もそれに見合つた広さだ。ちょっとした村くらいは大きい。

俺 上坂 京也（かみさか きょうや）は、藤美学園に通う高校2年生だ。剣道部に所属しているが、特に大会で結果を残したわけでもない。運動は得意なほうだが、成績はあまりよろしくないし、授業もたまにサボるのでどちらかと言えば問題児な部類に入るだろう。

人と違うところを挙げるなら……寄宿舎じゃなくて、学園から少し離れたあるマンションの一室で暮らしていることだ。もちろんただの高校生がこんな高級そうなところで暮らせるはずもない。正確には、俺の義姉さんが借りているマンションだ。

一度目が覚めてしまつたせいで眠れなくなつた俺は、2度寝をあきらめてずっと筋トレをしていた。そういうしているうちに空が明るくなつていて、シャワーを浴びて汗を流したあと、制服に着替えて朝食を作るために台所へと向かう。

うちのリビングは台所とつながつていて、いわゆるシステムキッチンである。今日の献立は、シーザーサラダと食パンだ。ジャムは各種取り揃えてある。盛り付けはすぐに終わり、テーブルに置いたトースターが軽快な音を立ててパンを吐き出す。小麦の焼ける香ばしい匂いがリビングに漂う。

俺は「コーヒー」マークを作り置きしてあつた「コーヒー」を飲んでいると、ドアが開いて金色の髪をしたワイシャツ姿の女性が姿を見せた。

「ふああ……京君、おはよ~」

リビングに眠い目を擦りながら入ってきた女性は、鞠川 静香（まりかわ しづか）。

家族を失つた俺を引き取つてくれた親戚のおじさんとおばさんの一人娘で……俺の義理の姉にあたる。俺は「静香姉え」と呼び、静香姉えは俺を本当の弟のように可愛がつてくれている。今の俺にとって唯一の家族だ。

「おはよう、静香姉え。頭すげえことになつてじゃん。先にシャワーでも浴びてきたらどうよ?」

静香姉えの長い金色の髪はボリュームのせいもあってか、いたるところがはねている。静香姉えがぼややんとしてるのはいつもことだが、寝ぼけているせいでいつも以上にのんびりしているように見えた。

「……うーん、食べてからにするー。コーヒーちゅうだい」「りょーかい。ちょっと待っててくれ」

微妙にふらふらした足取りで着席する静香姉えは、ずいぶん眠そうだ。マグカップにコーヒーを注ぎながら静香姉えに聞いてみる

「ずいぶん眠そうじゃん、仕事忙しかったのか?」

「そうなの、お医者さんは色々忙しいものなのよ~」

静香姉えの職業は医者である。前は大学病院に勤めていたんだが、今は臨時でうちの校医として派遣されている。天然でどことなく頼りないイメージの静香姉えだが、医師としてはかなり優秀らしい。うちではそんな感じは全くしないけど。

「ほい、コーヒー。熱いから気をつけろよ」

「ありがと~」

席に戻つてテーブル越しに静香姉えを見ながら思つ。相変わらず大きな胸だ、と。柔らかな双丘が薄手のシャツを窮屈そうに大きく押し上げて自己主張している。静香姉えはスタイルが良い事で学校でも有名だ。前にccaカップとかいう日本人離れしたサイズを聞いたことがある。

これで顔も整つているんだから、現在彼氏がいないのが不思議でしうがないが……まあ、妙な男に引っかかったら俺が責任持つて潰そう。義弟的に考えて

「どうかしたの?」

「いや、静香姉えと一緒に暮らしてもつづいぶん経つな一つで

「そうねえ」

砂糖をたっぷり入れたコーヒーを飲みながら、俺は昔の事を思い出していた。

犯人に立ち向かった俺が目を覚ますとそこは白い天井だった。病院で目覚めた俺は医者に家族の事を聞いたが……俺以外は助からなかつたと聞かされた。悲しくて……その日は声が枯れるまで泣き続けた。

どうして自分が生き残れたのか、理由は結局分からずじまいだつた。凶悪極まりない殺人犯に襲われたにも関わらず、奇跡的に俺のケガは腕が片方折れていただけで済んでいた。普通なら治るのに結構な時間がかかるはずだったが、尋常じやないスピードで治つたことですぐに退院できた。医者がやけに驚いていたのを覚えている。

俺は人より自然治癒が早いらしく、ケガしても血はすぐに止まるし、痛みも長い時間は続かない。原因はやっぱり分かつてないが、便利なので深くは考えてない。

病院から退院した後は、親戚のおじさんとおばさんにあたる静香姉えの両親に引き取られた。俺を実の子供のように可愛がってくれたおじさんとおばさんも、俺を引き取つてしまふして事故で亡くなってしまった。それから俺はこのマンションに静香姉えと2人で暮らしている。

「つっこないだまではちっちゃくて可愛かったのに、今は私より大きくなっちゃつてるし」

「成長期つすからねー」

「最近は頭を撫でさせてくれないし……反抗期？」

「さすがに男が17歳にもなつてそれは恥ずかしいだろ……常識的に考えて」

「そうよねえ）。Hなゲームや本もいっぱい持つてるし、君も大人になつたのね」

微笑みながら言った静香姉えの言葉に、俺の背中に嫌な汗が流れるのを感じた。どうなってるんだ……ブツの偽装工作は万全だったはずだ。

「……は、ははは。な、なんのことでしょうか姉上様」

「うーん、弟の将来が心配だな。彼女でもいればお姉ちゃんとしては安心できるんだけど。ねえ京君、好きな子とかいないの？」

「……いませんよ？」

彼女、と言われて一瞬、1人のクラスメイト……高城の顔が浮かんだ。いやいや……ないない。頭によぎつた考えを首を振つて否定する。静香姉えがじーつとこつちを見ている。

「悪いけど今はそんな余裕ないぞ。俺が家事をサボリ出すと若干心配な人間がいるしな。特に料理面で」

「ちや、ちやんとできるわよ……」

「と、いこいつが泳いでいる静香姉えであった

「もうー！」

そんなやりとりをしながら朝食の時間は過ぎていった。大切な家族との、他愛ないが楽しい会話のやり取り。普通だからこそ愛おしいもの。俺にとつてはかけがえのないものだ。

「んじゃ、そろそろ行くから。洗い物はいつも通り水につけといて

ー

「今日も早いのね、また朝練？」

「ああ

俺は食器を水の張つたシンクにつけながら返事をする。リビングに置いてあるカバンを持って、それとは別に紺色の竹刀袋を肩に担

ぐ。これには素振り用の木刀が2本入っており、長い間使っている。

「もうちょっと待つてくれたら、車で送つていいくのに

「いいつて。んじゃ、いってきまーす

「はーい、いってらっしゃい~」

藤美学園の校舎は小高い場所に立つてゐる。坂の途中には桜並木があつて、今なら満開になつた桜を楽しむことができるだろう。まだ時間が早いせいか、ほとんど誰とも会わずに校舎まで到着した。俺は軽く走りながらいつものよつと武道場へと向かう。

「ういっすー。つで、誰もいねえよな

扉を開けたが中には誰もいなかつた。人がいないのは当然で、剣道部に朝練の習慣はない。俺が許可取つて勝手に練習してるだけだ。剣道部で使つてゐる武道場は、そこまで大きくなはない。板張りの床に朝日が差し込んでおり、どことなく埃っぽい空気が漂つてゐる。俺は軽く一礼してから中に入ると、カバンを置いて、いくつかある窓を開け終えてから鍛錬を始めた。

基礎である腕立てや腹筋などの体作りの運動は、自分の部屋で済ませてある。

俺は担いできた竹刀袋の中に入つてゐる木刀を取り出した。良質の木で作られた木太刀とも呼ぶこれは、重量約5?くらいで、普通の木刀からすると3倍以上は重い。俺はこいつを好んで素振りに使つてゐる。

木刀を両手で構えて、振り下ろしの動作を繰り返す。最初の頃こそ振り続けるのに苦労したが、今では1時間振り続けてもまだ余裕がある。人間、慣れるものだと思つ。

どうでもいい話だが、こいつを買った店の店長曰く、この木刀なら『真剣とも戦える』そうだ。どこまで本当なのかは知らない。

ぶんつ、ぶんつ、ぶんつ！

一定のリズムで木刀が空を切る。俺はひたすらに、それを繰り返す……一振り一振りに意志を込めて。

「今日も朝から熱心だね、上坂君」

ちょうど額に汗が滲んできたくらいのところで、聞き覚えのある声がかけられた。人が来ないとは言つたが、何事にも例外はある。俺は素振りを止めて、声のしたほうを振りかえつた。

凛とした雰囲気を湛えた黒髪の女生徒が立っていた。

毒島 泋子（ぶすじま さえこ）は、3年生で、俺の先輩にあたる女子剣道部の主将だ。物腰も丁寧で、いまや日本じゃ絶滅寸前だと思われる大和撫子つて言葉がよく似合う人である。綺麗な長い黒髪と相まって和服とかすゞく似合ひそうだ。

「どもっす、毒島先輩」

「毎朝欠かさず……努力家だな、君は。一見すると軽薄そうに見えて、その実すこく真面目だ」

「先輩だって十分すぎるくらいに早いじゃないですか」

「私にとつては当たり前のことだからな」

俺と1歳しか違わないのに、こんなに大人びている……。俺はたまに先輩が本当に高校生なのか疑わしくなる時がある。

以前、そのことを俺は口に出してしまったことがある。その時の先輩は……。

『そりが……私が老けて見える、といいたいんだな、君は。た、確かに君よりは年上だが……』

なんか知らんがショックを受けてものすごいショウンとしていた。

先輩には悪いと思つが、普段の凜とした態度の先輩とはギャップがあつてすゞく可愛かつた。あの時は土下座する勢いで謝つたつける。
あ……。

「しかし……よくそんな重い木刀を軽々振れるものだな。私では持て余しそうだ」

「んー、なんか重いほうが馴染むんすよね。竹刀が軽過ぎて困るくらいなんだ」

「去年の大会に君が出ていれば……いいところまで行つただろうに」

本当に残念そうな顔で言つ先輩を見ていると、申し訳ない気持ちでいっぱいになつてくる。

俺は試合の日の朝に風邪をひいたんでどうしようもなかつたのである。40 近い熱で試合どころじゃなかつた。ちなみに先輩は去年の全国大会で優勝している。男子でも勝てる奴はないほどで、正直とんでもない強さだ。

「一度、本気で仕合つてみる気はないか？」

「朝から先輩と試合とか勘弁してください……授業中に起きてられる自信がねーっす」

「ふふつ……では、また今度にしようか。それでは失礼するよ」

先輩は背を向けて武道場を出て行つた。俺もそろそろ教室に行くが、今日はもう十分身体を動かしたし。

俺は武道場の戸締まりをしてから教室へとむかつた。

「うーーーっす。おはよー」

「ああ、おはよう上坂」

教室に着いた俺は、後ろの方の席で楽しそうに話していた友人た

ちに声をかけた。真っ先に返事を返してくれたのは、井豪 永（いじつ ひさし）という。爽やかな感じのするイケメン君である。

井豪をひとことで表現するなら、『完璧超人』だ。顔だけじゃなく、運動も勉強もかなりの高レベル。なのに性格もいい。戦略ゲームだったら軍事と内政の両方で活躍してくれそうなタイプだな。

「おはよ、上坂君。今日もギリギリね」

井豪の隣にいる女子が明るい声でいさつを返してくれる。

彼女は、富本 麗（みやもと れい）といつ。ロングの髪から2本だけ触覚みたいな寝癖が飛び出しているのが特徴だ。電波でも受信してんだろうか。明るくて話しやすいタイプの女の子だが、いつも見えて槍術部所属の武闘派である。そこらの男よりよほど強い。制服を押し上げる2つの膨らみは、うちの姉君に比べれば控えめだが、十分に大きく育つておりバランスがいい。そもそも静香姉妹と比べるのが間違っている。あれは規格外だ。

「ありや、うちの問題児はどうしたよ、遅刻か？」

「上坂君も割と孝の事を言えないでしょ？」

「ひでえなあ……俺は小室よりは授業に出てるだろ？」

「うーん……五十歩百歩くらいだな、俺に言わせると

「そんな馬鹿な！ 嘘だと言つてくれよ、井豪！？」

井豪と富本とは、いつやつて軽口をたたく位には親しい関係だ。休みの日には今はいないもう一人……小室を加えてみんなで遊びにいつたりもしてる。

そういうえば……最近、小室の奴が富本に振られたって話を聞いたが……。

井豪と富本が付き合い始めたというのは知っていたが、どうにも腑に落ちない所がある。てっきり俺は、富本は小室のことを好きな

のだと思っていた。

まあ、俺に特に何がしてやれるワケでもないけど、最近元気のない小室の愚痴に付き合つてやるくらいはできるだろ。

キーンコーンカーンコーン。

1時限目の授業が終わってから、俺は後ろの席に座っているダチに話しかける。

「よう平野。こないだ貸した新作はどうだった?」

「あ、うん。やっとクリアし終わったよ」

この小太りな眼鏡をかけた少年は、平野 コータ（ひらの こーた）。大人しそうな外見に違わず、性格も大人しいやつである。ただ、軍隊、銃、兵器。そういうものに関してこいつはプロ並みの知識を持っているいわゆる「軍オタ」という分類の人間である。

平野の話じゃ外国で本物を撃つこともあるというのだから筋金が入っていると思う。その分野については誰にも負けない。俺はそういう信念を持っているこいつを友人として尊敬している。

ちなみに新作ってのは、18歳未満購入不可なゲーム、俗に言うエロゲーだ。どうして俺が買えるのかは企業秘密ということだ。

俺と平野は互いにゲームの感想を語り合う。こんな風に趣味に関しては誰よりも熱く語りあえる。ちなみに平野を18禁ゲーすすめたのは俺だ。最初に一本やらせてみたら、思いのほか食い付きがよかつたのを覚えてる。

「あれ……平野、次の時間つて数学だっけ?」

「うん、そうだよ」

「やべえ……今日俺が指名される番じゃんか……」

「うちの数学教師は、日付にあわせて答えさせる生徒を指名するのだ。そして……今日は俺の番なのであるがすっかり忘れていた。宿題をやつていな俺は平野に頼む。」

「平野つ、宿題を見せて……」

「あ、ごめん。今日は僕もやつてない……」

「神は死んだ……いや、まだだ！」

神がダメなら女神に頼めばいいじゃないか、と思った俺は隣の席に座っている人物を見る。

ツインテールの少女、高城 沙耶（たかぎ やや）だ。雰囲気がちょっと高飛車なお嬢様っぽいんで、俺はこいつのことを「お嬢」と呼んでいる。見た目はキツそうだが可愛らしく、背もちんまいけど出るところは出ているから、男子の人気は高い……のだが、父親が右翼の会長という噂があり怖がられている。俺はまったく気にしてないけどな。

「お嬢、見せてくれー！」

「イヤよ」

「まだ何も言つてないじゃないか……」

面倒くさそうに拒否されてしまった。ツンデレで言つとシンの時期だな……それにしてもなんといつ早い反応だ、誠意が足りなかつたのだろうか。

「宿題なら見せないわよ？」

「女神にも見捨てられたか……いや、ただとは言わねえよ、飲み物を一本おごるうじやないか！」

「そういうことじやなくて……」

「何がいい？ ハーヒーか、紅茶か？ 次の時間になつたら走つて

お嬢は呆れたようにこめかみを押さえながら、ため息をついた。
机に置いてあつたノートを俺に差し出す。

「……はあ、今回だけだからね。次は自分でやつてきなさいよ、脳筋」

「さんきゅー！」

俺はノートを受け取つて早速写し始めた。お嬢の言葉は相変わらずシンシンしてるが、まあ慣れた。ノートにシャーペンをガリガリと高速で走らせていくと、平野が小声で俺に話しかけてきた。

「やういえば……上坂君は高城さんに普通に接してるよね、怖くないの？」

「怖くない……ああ、お嬢の家の事か。確かに右翼の会長の娘さんってのはすごいと思うが……俺にとつてはあの紅い髪の女のほうがよっぽど怖かった。トラウマとして刻まれて、今でも夢に見るほどに。

「怖くはないな。会つたこともない相手をやたら怖がつてもしようがないだろ。親は親でお嬢はお嬢だ……普通に良いヤツだと思つてしま

よ

「……やつぱりす」いね……上坂君は

「そうかあ？ よし、[写し終わつたぜお嬢、ありがとう助かつた！]

「……ミルクティー、1本ね

「了解ー」

お嬢にノートを返却したところでちょうど教師が入ってきた。ノート返した時に、お嬢が一瞬笑つたように見えたのは気のせいか。

お嬢にノートを返却したところでちょうど教師が入ってきた。ノート返した時に、お嬢が一瞬笑つたように見えたのは気のせいか。

「お嬢、今笑つたか?」

「べつに——」

やつぱりシンしかないよなあ……そんなことを思いながら授業が始まつた。

いつも通りの日常、さわやかで樂しい日々がこれからもずっと続していく……俺はやう思つていた。

平穏な日々が崩れ始めたのは、毎下がりのことだった。

第一話「日常の終わつ」（修正版）（後書き）

お読みいただきあつがとうございます。

文章や改行などを少し変えてみましたが、いかがでしたでしょうか。
よければご感想をくださいると嬉しいです。

第2話「生き残る為の決意」（7／28修正版）（前書き）

前回の続きになります。

読みづらいという指摘をいたしましたので、改行や文章などを一部変更してみたところ、結構文章量が増えましたので新しくあげなおすしました。

7／28に修正

第2話「生き残る為の決意」（7／28修正版）

毎を過ぎた時間は、眠気を誘う魔力があると思つ。暖かな春の陽気がまぶたを重くして、ほどよく満たされた食欲がそれに拍車をかけるからだ。現に俺の他にも眠そうなのが何人かいる。

隣の席に座つているお嬢は退屈そうにしているものの、わりと眞面目に授業を受けているようだ。綺麗な文字でノートをとつてゐる。さすがは優等生だ。

今日は悪夢に起されたせいで微妙に寝不足だったのも手伝つてか、俺の意識が早くもなくなり始める。

これなら小室と一緒にサボればよかつたな……。つとじしながら授業を聞いても意味がないので、俺は睡魔に抗うことをやめ、机に身体を突つ伏して眠り始めた。

どれくらい、時間が経つたのだろうか。5分くらいだった氣もするし、30分くらい寝ていた氣もする。

俺は不意に訪れた……奇妙な違和感で目を覚ました。背中を手で触つてみると、何か悪戯されたような形跡があるわけでもなかつた。背中に氷を入れられたようにぞくつ、としたのだが……後ろにいる平野はそういうことをする性格じゃない。

隣の席に座つていたお嬢が呆れたような顔で俺を見ている。

「なんだ、やつと起きたの？　いいご身分ね～」

「なあお嬢……なにかあつたか？」

「な、なによ……急に真面目な顔して。特に何もないわよ。アンタがぐつすり寝てゐるやつでしょ」

「氣のせい……だつたのだろうか。背筋を走つた嫌な予感　直感とも呼ぶべきものは。」

眠気は完全に飛んでしまつていって、俺は寝直す氣にもなれず教室をぼんやり眺めていた……ちょうどその時だった。俺の友人である小室 孝（こむろ たかし）が、勢いよく教室のドアを開けて飛び込んできた。

「何だ小室、授業をサボるだけじゃ足りずに授業の妨害まで！？」

教師が注意するが、小室は構わずにまっすぐ富本のほうへむかう。その顔に浮かぶ表情は、明らかに焦っていた。

小室はどちらかと言えば、『不良』にカテゴリーされる生徒だ。授業もよくサボつてゐるし、教師には反抗的な態度をとることもしばしば。斜に構えたような態度も、教師たちにそういう印象を与えてしまつている。

それでも俺は、小室は良いヤツだと思つてゐる。友達を大切にしているし、売られた喧嘩は買うが、むやみやたらに喧嘩を吹つ掛けてるわけでもない。最初は若干とつつきびらかと思つたが……俺も人のことは言えないしな。

「来いよ、逃げるぞ！」

「いつたい何よ、授業中……」

「いいから来いつ！」

富本の腕を引っ張りながら、語氣も荒く言つ小室を見て、周りのクラスメイトたちがざわめき始めた。退屈極まりなかつた授業中に突然暇つぶしの種が降つてきたのだから、食い付かない人間のほうが珍しい。井豪と富本が付き合つてゐる、という噂はみんなよく知つてゐるので、それ関係だと勘ぐつてゐるんだね。

「な、何してんのよおつ、小室ーー？」

「落ち着けつて、お嬢」

幼なじみである小室の奇行に、お嬢は驚いて立ち上がりっている。

俺はお嬢をなだめながら、少し様子を見ることにした。

俺は小室がやけに焦つているように見えることが気になつていて。だいたい、授業中にこんな風に悪目立ちしてまで富本を連れ出す理由が思いつかない。小室はそういう馬鹿じやないんだ。『何か』あつた……そう考えるべきだらうな。

井豪が、無理に富本を連れ出そうとする小室に詰め寄つた。

「どういうことだ、孝？」

「校門で人が殺された……ヤバいぞ」

「本当なのか……？」

「こんなウソついて何の得がある？」

小室は嘘偽りのない真剣そのものの表情で井豪に言つた。それは小室の言つたことが限りなく真実に近いことを示している。井豪は小室の言葉を聞いて驚いていた。

「ちょっと、なんなのよ……もつ！」

興奮したように富本が小室の手を振り払つた。富本からすれば、いきなり幼なじみが授業中にやつてきて「逃げるぞ」だからな。納得できなくて混乱するのも仕方ない。

パンッ！

やけに渴いた音が教室に響いた。

小室が富本の頬を叩いたのだ。小室は加減する余裕もなかつたのか、結構力が入つていたらしく若干富本の頬が赤く腫れてい。富本は叩かれた頬を押えて呆然としていた。

「な、何……？」

「いいから、言ひひととを聞け！」

必死。小室の様子を表現するならその言葉が相応しいだろ。どうやら、事件が起こってるらしいのは間違いなさそうだ。小室はそれを知つて、富本たちだけでも逃がそうとしているらしい。井豪は少し考えていたようだが、小室の様子を見て本気だと察したようだ。井豪は教師に簡単な言い訳を残すと、小室と富本を連れて教室から出て行つた。

「……さて、どうすつかねー」

「ね、ねえ……上坂君。どうなつてゐの？」

平野が俺に不安そうな顔で聞いてくる。平野なりに小室の様子が普通じやないことを感じたのだろう。俺は知つた情報を簡単に伝えることにした。

「小室を信じるなら、校門で殺人があつたらしいな……本当ならやばい」

「そんな馬鹿な……」

平野の驚きは当然のものだ。いきなり教室でこんな話を聞かされても、荒唐無稽が過ぎるつてもんだ。小室の性格を知つていなれば、笑い話にしかならない。

「小室のやつ、嘘をついてゐるようにな……見えなかつたわね」「あいつがわざわざ嘘をつく理由がねーしな。だったら巻き込まれる前に逃げるか、ガセならガセで構やしねえ……どうせ欠席がひとつ増えるだけだ」

「まあ、さうね……危険があるなら早めに動いたほうがいいわ
「あ……ぜ、ぼくも行きます」

「じゃあ決まりだな」

俺は適当な言い訳を教師に告げると、教室の後ろに置いてある竹刀袋を肩に担いでさっさと教室をあとにした。小室の話が真実ならいざという時、武器があつたほうが心強いだろう。

その後、俺の他に動きを見せたのは平野とお嬢だけだった。俺からやや遅れて、2人は教室から廊下に出てくる。俺は廊下を見回してみるが、近くに小室たちの姿はなかった。もう遠くへ行ってしまったのだろうか。

「小室たちはもうびっか行っちまつたか」

「小室つたら……なんで……宮本だけ……」

「お嬢、どーしたよ?」

「……なんでも、ないわよ」

お嬢が呟いた言葉には嫉妬の色が混じっていた。小室は井豪と宮本だけを連れて逃げたのである。お嬢としては小室に置いて行かれたのがショックだったんだろう。

お嬢は小室の幼なじみで、おそらくだが……小室に好意を持つている。好きな相手に置いて行かれたらそりや怒る……。

そこまで考えて、俺の心が一瞬だけざわめいた。

……はつ。らしくねーな上坂京也、お前も嫉妬かよ? いやいや、ガラじやねーだろ、俺のキャラを考えろよ常識的に。

俺は胸に降つてわいた黒い気持ちを振り払つよう、頭を振つた

……今は余計な事は考えないほうがいい。今の俺に必要なのは冷静な判断力だ。

「……はあ、あたしの他が脳筋とデブオタだけなんて」

「あ、あの……これからどうします?」

「とつあえず移動しよう」ゼー。考えるのはそれからでもいいだろ」

を二ねどにあくまで近くて空いてそこなど」IN採用されよ

俺たちは、空き教室を探して駆け出した。それからいくつかの教室を調べて、ようやく空き教室を見つけて教室の中に入る。校内放送のアナウンスが流れ始めたのはちょうどその時であった。

『全校生徒・職員に連絡します！ 現在、校内で暴力事件が発生中です。生徒は職員の誘導に従つて直ちに避難してください！ 繰り返します！ 現在、校内で暴力……』

放送する声には、焦りと恐れが混じっていた。情報を伝えようと
する早さを優先するあまり、聞き取りづらい箇所があるほどだった。
突如、放送にノイズが入る。

「うわ……最悪」

「小室の話は本当だつたな……全然嬉しくねーけどよ」

男の断末魔とともに、放送は終わった。

学校の全てに今の放送が伝わったことで、静寂が訪れている。昼間の人がいる学校ではあまりにも不自然な静かさ……嵐の前の静けさ、とはよく言ったものだ。

一斉に上がったのは絶叫だった。耳が痛くなるほど叫び。教室の外から大量の生徒たちが走る足音が聞こえる。あまりにも人数が多いすぎるせいで、足下が揺れて地震が起こっているんじゃないかと錯覚しそうになる。

恐怖に支配された人間が、我先にと逃げ出そうとしているのだ。悲鳴が上がり、怒号によつてかき消される。ドアを開ければ見るも無残な惨状が広がつているだろう。

「あんな人の波に巻き込まれたら、無事でいる保証はないわ……」
「一種の恐慌状態つてやつか。焦つてもしゃーないし、ここでしばらくやり過ごしてから逃げるか」
「アンタと同じ考えつてのが癪にさわるけど……同感ね。落ち着いてから移動しましょう」
「な、なんとか、逃げ込めてよかつた……」

人の群れが起こす地響きのよつた音は、波がひくよつてゆつくりと遠ざかつていつた。

まだ、悲鳴や絶叫が聞こえるが……いつまでもここに引きこもつているわけにもいかない。俺たちは逃げるために意を決して空き教室から廊下に出た。目の前に広がつていた光景は、想像の遙か上をいくものだった。

「おいおい……B級のホラー映画かよ……」
「人が人を食つてる……?!」
「悪い冗談もいいとこ……」

俺たちは、二者二様に反応する。ケガした生徒が転がつているくらいなら想像の内だつたが、まさか死体まで転がつてゐるなんて思わないだろ?。しかも……身体の部位が獣に食われたように欠損して

いる状態で。

廊下は、血で濡れていた。真っ赤なペンキを無造作にまき散らしたかのように広がっている。オブジェのように死体が打ち捨てられている様は悪夢以外の何物でもない。そして、極めつけに異常なのは……。

「あ、ああ、やめて……」しないでっ！」

男子に首筋を噛みつかれて血を流しながら、女子生徒が絶命する。顔を恐怖でひきつらせ、ジクビクと身体を震わせながら泡を吹いて倒れる。

「……アー」

噛みついていた男子生徒は口の端から血を流している……正気の沙汰じゃない。顔色は悪く、瞳に光はない……死んでいるようにしか見えず、それはまさに動く死体だった。こいつもこいつで足や腕の一部が虫食いのように欠けているのだが、痛みを感じているそぶりは全くない。

惨劇を目の当たりにした生徒たちが、パニックを起こして逃げだしていく。中にはどこから持ってきたのか金属バットで死体と戦っているやつもいるが……慣れない武器を振り回しても意味がない。すぐに死体に食われて悲鳴を上げる。

そして、死んで倒れていたはずの人間が……動き出した。さつき見た奴と同じく目に光はなく、低いうめき声を上げながら、周囲にいた人間に襲いかかっていく……。

お嬢と平野の顔色が悪い。当然だ、こんな状況で落ち着いてられるワケがない。

呆けてる場合じゃない……生き残りたいなら冷静になれ。どうするべきだ、考えろ、考えろ、考えろ……。

俺は爪が手のひらに食いこむほどに強く拳を握りしめた。大きく深呼吸をして、頭をクリアにする。

いつも通りでいい。俺はそばで固まつたまま動かないお嬢と平野の肩をぽんと叩く。

「……おいおい、2人ともいつまで石化食らつてんだ。ほら、さつさと逃げようぜ、今なら通り抜けられる」

「そうね……」

「う、うん……」

我に返つた2人を連れて、俺は不気味な動く死体であるゝ奴らから逃げるために廊下を走る。俺、お嬢、平野の順に走りながら言葉を交わす。

「ど、どこに逃げます？」

「アンタ達はどうするつもりだったの？」

「ま、まずは職員室に知らせ行つて……寄宿舎」

「論外ね。学校の教師風情がどうにかできると思つの？」

「で、でも……こんな……」

平野の意見はごく当然のものだ。今も異常な状況に怯えているのが手に取るよう分かる。

ああ……平野の反応が一般的なんだろう。この状況で普通でいうとする俺こそ……異常なのかもしれない。

教室棟から出た俺たちは、渡り廊下に着いた。建物と建物を繋ぐ橋のような場所である。ここは道が2つあり、右に行けば職員室に行ける。

「ほら、平野。アンタと同じ考え方の連中が、職員室のほうに行つたわ

お嬢が右の道の先に視線をやる。そこには助けを求めて、職員室のドアを叩く男女たちがいた。何度も何度も……必死でドアを叩き続けてようやくドアが開いた。彼らの顔が安心で満たされ……だがそれも次の瞬間かき消された。

中から出でたのは 奴ら と化した教師たちだった。助けを求めた生徒たちは驚いて固まっている。無防備なまま、頭を掴まれて首筋から食われ始めた。声にならない悲鳴を上げながら死に絶える。

「ひッ……！」

「ありや 突っ込むのは自殺行為だな……教師も死んでるぞ」「アンタはどうするつもり、上坂？」

問い合わせるお嬢を見ると、ほんのわずかだが足が震えている……やはり怖いのだ。

「俺は身内がいるから、保健室に行きたいんだが……」「保健室？ だつたらこのまままつすぐ行つて下まで降りれば……」「……いいのか、お嬢？ 俺のわがままぞこれは」「……家族を失うのは、辛いじゃない」

考えたくもないが……こんな状況だ。ただの寄り道になってしまふ可能性は十分にある。それでもお嬢は、俺の家族のために行こうとそう言つてくれたのだ。恐怖に支配された状況で、俺は胸の中に初めて温かい気持ちが生まれたのを感じた。

「……ははっ、お嬢つていいヤツだつたんだな」「な、ななな何言つちゃつてくれるのよ！？ アタシは天才だから唯一戦力になりそうなアンタがいなくなる危険性を考えて……」

「よーしよしよし。いい子いい子～

「気安く頭を撫でんなつ！」

お嬢は真っ赤な顔で、頭を撫でていた俺の腕をはたき落とした。恥ずかしさに頬を赤く染めたまま、お嬢がびしつ、と俺を指差す。

「あたしは生きたいわけ！だからアンタについていくの！ よくつて！？」

「おう、分かったよ。平野、悪いけどお前も付き合ってくれるか？

「うん。ひとりでいるのは怖いし……」

「それじゃ決まりだな。さっさと進もう」

俺たちは渡り廊下をまっすぐに進んで、となりの棟へと移った。ドアを閉め、外の奴らが入って来ないようにする。

こちらの棟には、家庭科室など実習系の授業で使う教室を中心に配置されている。保健室などもこの棟にあるので、静香姉妹は多分そこにいるはずだ。

「あの……高城さん。校則違反ですけど、携帯電話を持つてないですか？」

「アタシは優等生よ。持つてたとして……どこにかけんつもつ？」

「け、警察に……」

「やっぱりバカねあんた。これだけの騒ぎよ、誰も電話してないはずないじゃない」「

誰もが真っ先にとる行動だ。誰だってヤバい時は警察に電話する

普通ならすぐにもパートカーが来ているはずだが、その気配は全くない。つまり……警察が来られないほどどの異常事態ってことだ。

「サイレンの音ひとつ聞こえねーってことは……

「町中で、こんな騒ぎが……」

「多分ね……ねえ、上坂。アンタは持つてないの、ケータイ?」「俺はどちらかってーと不良だからな、持つてるぞ」

「行く前に、アンタの身内に電話かけてみたら? 繋がらないかもしれないけど……」

「おお、その手があつたか!」

やはり俺もたいぶ混乱してたらしい、一番基本的なことを忘れていた。校則違反万歳。俺はポケットから携帯を取り出して静香姉えの番号にかける。

トウルルルルル。

機械的なコール音がやけに長く感じる。今は一秒だつて惜しいのだ。焦りで手に汗が浮かんでくる。数秒経つて俺のよく知った声が聞こえた。

『は、はい鞠川ですー』

『もしもし……静香姉え今どこだ、無事か!?』

『あつ京君、よかつた。無事だったのね。今は保健室にいるんだけど……』

『わかった。すぐに行くから、そこで待つて……』

何の前触れもなく、突然に通話が切れてしまった。

画面が真っ暗になつていて……どうやらバッテリーがなくなつたらしい。そういうや最近充電した記憶がなかつたこと思い出して、俺はがつくりとうなだれた。

「いつも使わないからつて油断してた……」

「でも、とりあえず……無事みたいね。ていうかアンタの身内つて

……鞠川先生だったの? しかも静香姉えつて……」

焦つてていつもの調子で名前を呼んでしまったことを思い出した。普段学校では鞠川先生、上坂君、で呼ぶようにしている。余計な誤解を招かないようにするためだ。お嬢と平野が、今にも笑い出しそうな顔で俺を見ている。

「上坂君って、見た目怖そうだけど意外と中身はギャップあるよね」「意外ね~、上坂ってシスコン?」「う~うつせえ黙つてろお前ら。わつわつと行くぞ」「そういうえばここのは2階は……」「どーしたお嬢?」

お嬢は何か思いついたようで、2階の通路を指差した。この先は実習系の教室が並んでいるはずだが……。

「先に寄るところがあるわ。あそこなら武器になりそうなものがあるはずよ」「やっぱ俺一人じゃ頼りねーか? 木刀は2本あるから、いざとなつたら平野にも戦つて……」「……アンタ一人に無茶されられないでしょ……バカ」「あ、悪いお嬢。よく聞こえなかつた」

お嬢の声は弦くよくな小ささだったので、上手く聞き取れなかつた。俺はもう一度聞こうとするが、はぐらかされてしまつ。

「何でもないつ。脳みそまで筋肉なあんたはまだしも、でぶちんに木刀持たせたつてしようがないでしょ」「た、確かに僕は……運動苦手ですけど……」「だつたら文明の利器を使わせてもらひのよ」

お嬢の狙いは工具なんかがある「技術工作室」だったようだ。

俺は、ドアをゆっくり開けて中を確認する……誰もいない。人間もゝ奴らくもどちらの姿も見えない。使われていないイスが無造作に長いタイプの机に置かれており、天井からは電源ケーブルが伸びている。

「よし、大丈夫そうだ。入つてもいいぞ……平野、鍵閉めておいてくれ」

「うん、わかつたよ」

お嬢と平野が入るのを待つて、俺は平野にドアのカギを閉めさせた。これで少しあゝ奴らくが入つてくるまで少しあは時間を稼げるはずだ。

お嬢は棚にあつた工具や機械なんかを急いで集めると、手近な机の上にそれを置いた。電動ドリル、ドライバー、ペンチやレンチ……技術工作室だけあつて工具の類は多いようだ。

俺はその中で見慣れないものを見つけた。小型のサブマシンガンみたいな形をした……銃のようなものがある。床主市にはガンショップがあつたりするが、それでも学校に置いてあるはずはない。どこで見た記憶はあるんだが……どこだつけ。

「何だそのサブマシンガンみたいなの？」

「釘打機……ガス式か！」

「ああ……昔映画で見たことあるな。でも、映画とかだともつと『トイのがついてなかつたつ』」

「映画みたいなコンプレッサー式なんて、重くて持ち歩けないでしょ。が。バカじゃないのー」

「こんふ……？ まあいいや。平野、使えそつか？」

「ちょっと待つてて。今調べてみる」

「……できるだけ急ぎで頼むぜ」

廊下のせりに見える血まみれの姿。動く死体の「奴ら」は不気味につめきながら歩き回っている。ドアに付いている窓からは複数いるのが確認できた。

「ちよ、ちよっと……もつそこまで来てる…?」

俺は肩に担いでいた竹刀袋から、一本だけ木刀を取り出した。手に伝わる木刀の確かに重みが、今は何よりも心強い。残りが入った竹刀袋をお嬢に手渡す。

「お嬢、それ持つてて」

「なんでアタシがつ……つて、重ッ! ただの木刀でしょこれ……なんでこんなに重いの! ?」

「下がつてくれ……俺が何とかするから」

「な、なによ上坂のクセに……わかったわよ」

お嬢はぶつぶつ文句を言いつつも、素直に従つてくれた……よし、これで思い切り暴れても巻き込まずに済む。俺は木刀を前に突き出すようにして構える。

「ドンッ、ドンッ!」

扉は力ギをかけてあるが……ギシギシと軋み、今にもはじけ飛んでしまいそうだった。窓にヒビが入っているのが見える。俺たちがいることに気が付いた>奴ら^くが力任せにドアを破ろうとしているのだ。このままではドアは壊れ……すぐに>奴ら^くが中へ入ってくるだろう。

「ドクン、ドクンッ!」

心臓の鼓動が跳ね上がる。内臓が今にも口から飛び出してしまいそうだ。逃げる、と脳内で警報が鳴り響く。相手は動く死体……真正銘の化物だ。勝てるはずが……。

よく見ると、木刀を持つ俺の手が震えていた。武者震いなんて格好いいものじゃない……ただの純粋な恐怖からくる震えだ。

「か、上坂……？」

不安そうなお嬢の声が聞こえた。高城 沙耶……頭は良いけどプライドが高くて、ちょっと生意気なクラスメイト。俺が……ほんの少しだけ気になつてている存在。俺よりも小さくてか弱い少女が後ろにいる。

目を閉じて……俺は自分へと問いかける。

家族を失ったあの日、俺だけが1人生き残つてしまつたことを知り、もう2度と失いなくないと思つた。だから、強くなろうとした。がむしゃらに身体を鍛えて、剣道を始めた。

なのに……今の俺はどうだ？ 何の為に今まで鍛えてきた？ 俺はこの子を守りたいし、失いたくない。

好きな女すら守れずにガタガタ震えている俺は、必要無い。今、ここで死ねばいい。震えるよりも剣を振れ。戦わなければ……失うだけだ。

己を叱咤激励し、カツ、と閉じていた瞳を開ける。手の震えは止まつていた。後ろにいるお嬢に大丈夫だと示すようにジェスチャーをする。

動く死体……元は人間だ。ついさっきまで……俺と同じ人間だったはずだ。

死にたくないがつただろうな。そうだよな……でも、俺だつて死にたくない。死なせたくない。だから俺は、これからお前たちを殺す。謝りはしない。いくらでも恨め……それでも俺は……！

「失いたくねえんだよ……」

だから戦おう。動く死体がどうした、あの赤い髪の女のほうが……よほど怖かつた。動かなくなるまで、コイツで殴つて、もう一度動かないようにしてやりやあいいだけの話だ。

ガシャアアアンッ！

「い、いやあああつー！？」

ドアが壊れて、廊下にいた 奴ら が教室へとなだれ込んできた。お嬢の悲鳴が上がるのと同時、俺は勢いよく前に踏み込んだ。

「奴らくはゆっくりと無防備に前進してくる。動きそのものはひどく遅い。顔や身体にガラスが刺さった奴もいるが……やはり気にしてた様子はない。痛覚がないのだろうか。

まずは、先頭で入ってきた奴に目がけて木刀を振り下ろす。真上から全力で振り下ろした木刀が「奴らくの頭にぶち当たり、生々しい音を立てて 奴ら の頭が碎ける。血を噴き出しながら「奴らくの身体が地面に倒れた。

「次ツ……！」

近くにいたヤツの脇腹に向かつて全力で叩き込む。ミシミシと骨を碎く感触と共に「奴らくの身体が転がつていく。普通ならこれで立ち上がるのも無理なはず。それでもしばらくすると……また起き上がってきた。

頭を潰したヤツは動かなくなっている……それなら、まだやれる。俺は木刀を構えなおした。

「ちっ、肋骨折れたはずなんだが……やつぱ普通じゃねーな
「つ、強つ……あんた、ただの雑魚じゃなかつたの?」

お嬢は驚いていた。剣道部所属とはいえ、俺がまともに戦えるとは思つてなかつたんだろう。実際……わざわざまでそつだつた。それでも俺は減らず口を叩く。

「いーや、雑魚だよ。うちの先輩には一度も勝つたことがない。
まあ……それ以外の奴と試合して負けたこともねーけどな!」

俺が戦つている間に、平野は釘打ち機を使おうと後ろでガチャガチャとやつている。自分の友達を信じろ、あいつなら必ずやつてくれるはずだ。俺は頭を潰すことを決めて 奴ら に木刀を叩き込んでいく だがいかんせん…… 数が多い。このままだと、ジリ貧だ。

「ひ、ひらのあ……まだなの?」 このままじや上坂が……
「 できた」

俺に噛みつこうとした 奴ら が、いきなり血を噴いて倒れた。頭に刺さつてるのは、釘である。俺が後ろを振り向くと、平野が改造した釘打ち機を構えていた。

「ははっ! すげえぞ平野。この短時間でよくもまあ!」
「即席だけど十分イケるよ
「よつしや、このままコイツいらづけるやー」
「ア解ー!」

平野の釘打ち機が、釘を吐き出す度に奴らの頭に風穴が空く。撃ち漏らした>奴らくは俺が片つ端から頭を潰してとどめを刺す。

「お嬢、使えそうなモン適当な袋に詰めておいてくれ！」

「だ、だからアタシに命令しないでよつ！」

「じゃあ約束だ、俺はお前を守るからー。」

「はあつ！？」

協力するんだよ。生き残る為に！」お互い足りない部分を補う。

お嬢は頭で俺らは力 それでどうよ！」

ああもう……わかったわよ！
勝手に死んだら許さないからね

「此後は一ヶ月に一回、

死不復生

釘と木刀の乱舞するなかで、奴らの数は減っていき、動いているのは俺たちだけになつた。あとは移動するだけである。

警報が鳴り響く音を聞きながら、俺は木刀についた返り血を振り払う。

「か、火事？」

「一人が死にまくつてんだから今更だけどな……誰か戦つてんのかね」「ほら、何してんの平野、バッグ持つて！」

警報に驚いている平野にむかって、お嬢が工具や釘などを詰めた
バッグを渡す。

「あ、あの……高城さん、ひとつ聞いてもいいですか？」

「なにが？」

「どうして……僕も……上坂君と違つて……僕は完全に足手まとい

「……別に。大した理由なんてないわ」

「まあ、お嬢はソンデレだからなー。素直に見殺しにするのが嫌だつた、つて言えばいいものを。優しいねえまったく」

「べ、べつにそんなんじや……」

お嬢は優しいと言われたのが恥ずかしいのか、ちょっとだけ顔を赤くしてそっぽを向いている。可愛い反応だと俺は思った。

「平野、お前は足手まといなんかじゃねーよ。自分で危険だつて判断して教室からここまで来たし、今だつてお嬢や俺を守る為に戦つてくれただろ」

「それは……武器があつたからで……」

「武器持つたつてダメなヤツはダメなんだよ。映画でもあるだろ？武器持つても開始3秒で殺されるヤツ。お前は十分強いんだから自信持てよ」

「上坂君……」

平野は驚いたよつたな……でもどこか嬉しそうな顔で俺を見ている。なんでだらう、俺はすげ恥ずかしいことを言つてゐるよつた気がしてきた。

「時間食つちまつたな。急ぐぞ……静香姉えが心配だ」

「やつね……急ぎましょ」

ひつして新たな武器を手に入れた俺たちは、生き残る為にお互いの力を合わせることにしたのである。たつた1人の家族の無事を願いながら、俺は技術工作室をあとにしたのだった。

第2話「生き残る為の決意」（7／28修正版）（後書き）

お読みいただきありがとうございます。

以後、このよつな形で今まで上げた分は修正版を書いていく予定です。

続きを読みたいの方には申し訳ありません。

第3話「イレギュラー登場」（修正版）

技術工作室を出た俺たちは廊下を走って保健室へと向かっていた。
「奴らくに出会うたびに頭を潰すのは骨が折れるので、倒すのは最低限に留めている。階段の前にいた」奴らくがこちらを向く。

俺はすかさず「奴らくを木刀で押して転ばせると、階段の下まで派手に転がつていた。壁にぶつかったまま動かなくなつたので、起き上がる前に脇を走つて降りていく。

なんでこんな面倒な事をしているのか、というのは足を止めたくないからだ。今は急いでいるし、この先どれだけの数の「奴らく」と戦うことになるのかわからない。平野の釘打ち機だつて弾が無限にあるわけじゃないからな。

1階に降りたところで、お嬢が提案する。

「ちょっと待つて。試しておきたいことがあるの」

言いながらお嬢は、近くにあつた水道の流しの影に身を隠した。
俺と平野も同じようにする。水道の向こうには「奴らくがいた。どうやら」いつには気づいていないのか、棒立ちの状態だった。

「どーするんですか？」

「じつ、黙つて……」

水道には、水の入つたバケツと雑巾があつた。お嬢は濡れた雑巾を「奴ら」にむかつて投げつける……後頭部に当たつたが、何の反応もない。相変わらず、不気味にうめいでいるだけだ。

「ふーむ……」

今度は近くにあつたロッカーに向かつて雑巾を投げる。

ガシャン！

雑巾がぶつかると 奴ら は音の聞こえた方向に向かつて直進し始めた。そのままバカみたいにロッカーにぶつかり続けていた。

「なるほどな……あいつら音にしか反応しないのか」

「そう、自分の身体に物がぶつかっても反応しない……つまり痛覚とかないのよ。おそれく視覚とかもないわ」

目が見えないと分かつたのは大きいな。要するに、でかい音さえ立てなければやり過ごせるということだ。こんな状況でも生き残る為に、奴らの特性を調べるお嬢はやはり頭が良いのだろう。

「熱とかは……どうなんでしょう?」

「生き残つてりや嫌つてほど試す機会はあるだ、さつさと抜けちまおひつ」

俺たちは音を立てないよひつて奴らの脇を抜けて廊下を進んでいく。ほどなくして『保健室』と書かれたプレートが目に入った。周りに、奴らの姿はない。開きっぱなしになつていた保健室のドアから中へ入つた。

保健室の中には……誰もいなかつた。飛び散つた血痕と倒れされた奴らがいるだけである。お嬢が悲しそうな表情で謝る。

「……ごめん上坂。アタシが途中で寄り道させたから……」

「……いや、まだそうだと決まつたワケじゃない。言い方が悪いが、とりあえず静……鞠川先生が食われたような後はない」

でも、知り合いはいた。石井……静香姉えの手伝いをよくやつてたメガネの男子生徒は俺の友人だつた。薬品棚に背を預けて、頭を割られて息絶えている。首のあたりに噛まれたような跡はあつたが、>奴らくのような不気味な姿になつていてない。こんな状況なのに……どことなく、笑みを浮かべているように見えた。

「奴らになる前に……誰かがやつたのか？」

静香姉えにそんな技術はない……といつより、戦えるような人じやない。おそらく武器すら持つてないはずだ。つまり、こいつにじができる人物がここへ来た、ということだろう。

「……誰かが、鞠川先生と一緒にここから逃げたってことかな？」

俺は平野の考えにうなづいた。逃げるとすれば……外に行くしかない。どこかに立てこもつたとしても、数で押されれば普通のドアなんか簡単にぶち破られてしまつからだ。

「や、やつぱり外に逃げるんだよね？」

「何がいいたいのよ？」

「あ、あの……歩くの苦手で……」

平野の情けないセリフを聞いて、お嬢が呆れている。

「これだからデブオタは……贅沢は免許取れる歳になつてから言つてよ」

「車なら確かに移動は楽だけど俺は運転できねーし……車？」

俺は静香姉えが車を持っていることを思い出した。コペンだがコパンだつたか……名前は忘れたが小さい車だ。ちなみに運転は上手

い。歩きが絶望的なこの状況で脱出するなら……まあ間違いなく、車を使うだろ？。

「カギは確か……職員室にあるはずよ」

「よし、それじゃさつさと……」

「……だ、誰かいるの……？」

「きなりの声に、俺は驚いて思わず木刀を構えた。

「待つて、上坂。」奴らくじゃないわ

「そういうやうだった……」

「奴らくは会話できないからな。」うして話せるってことは人間である何よりの証拠だ。

「周りには僕たちしかいないから大丈夫ですよ」

平野の声に反応して、のそのそとベッドの下に隠れていた人物が姿を現す。気の弱そうな普通の男子生徒だった。

「き、君たちは……？」

「俺は2年の上坂だ。」うちはクラスメイトの平野と高城

「ぼ、僕は……室田（むろた）」

「よし、室田。俺たちはこれから脱出するけど、一緒に来るか？」

あんまり人数増えると動けなくなるが……目の前で生きてる奴を見捨てるのも後味が悪い。

「な、何も……いないんだよね？」

「ああ、ここには俺たちしかいない……周りにいた」奴らくは倒し

てあるから今のうちだ

「それなら……い、一緒に行くよ……」

俺たちは室田を加えて、保健室を出ていく。室田はびくびくと周りを警戒している……武器も持っていないし、戦闘はできそうなタイプじゃないな。俺を戦闘に、お嬢、平野、室田の順番で行くことにした。

「室田、お前保健室にいたなら鞠川先生見てないか？」

「ぼ、僕が来た時は誰も……」

「……そうか」

俺は少しだけ気落ちする……いや、落ち込んでる場合じゃない。今は少しでも早く職員室に確かめに行こう。そう思つて歩きだした時のことだった。

外のほうから何か近づいてくる音が聞こえた。ひたひたと……奴らの足音にしては異質なものだった。窓の外を確かめようとした瞬間。

ガシャアーン！

派手な音を立てて窓が割れる。窓をぶち割ってきたのは、正真正銘の怪物だった。そいつを見た瞬間、全員が言葉を失った。

地面上に四肢を這わせ、全身が赤黒い皮膚で覆われていた。例えるなら、イモリやヤモリのような爬虫類だ。それが人くらいのサイズになつたと思つてくれればいい。トカゲのような姿をした怪物は、窓をぶち破つて近くにいた室田に喰らい付いた。室田は飛びかかってきたトカゲじみた姿の化物に押し倒され、一瞬のうちに首筋に牙を突きたてられる。

「が、ヒ……た、たすけえ……」

首筋を噛みつかれて、涙と大量の血を流しながら……室田はやがて動かなくなつた。

潰す。頭で考えるより先に身体が動いていた。俺は一瞬のうちに走りだし、トカゲの化物のもとへ走る。俺は問答無用で室田に噛みついたままのトカゲに木刀を振り下ろす。全力で振るつた木刀はすんでのところでかわされてしまう。

「くつ……」

「シャアアアア！」

殺せなかつた……マズい。奇襲が失敗したらどうしようもない。俺は即座に後ろに飛び退いた。すぐにでも飛びかかってくると思ったが、トカゲは俺と向き合つたまま襲つてこない。まるで、様子を見ているようだつた。

パシュン！

平野が釘打ち機でトカゲの化物を撃つ。

「ギヒィィイ……！？」

釘はトカゲの化物に命中するが……身体に釘が刺さつてゐるのに動いてやがる。>奴らくと同じく、頭を潰さないとダメらしい。

トカゲの化物は、動かなくなつた室田の身体を咥えて勢いよく投げつけてきた。

「……ぐあつ！？」

俺は猛スピードで飛んできた死体を避けるが、後ろにいた平野がぶつけられてバランスを崩す。

「平野！」

「だ、大丈夫……なんとか……」

「なによこいつ……今までのとまるで違ひじゃない」

お嬢も動搖している……無理もない。見た目も動きも……今までに戦ってきた奴らくとはまるで別物だった。

「シャアアア……！」

唸り声を上げるトカゲの化物の赤黒い舌が怪しくうねる……次の瞬間、トカゲの化物の舌が恐ろしく伸びてきた。いきなりの想定外の攻撃に反応する暇もなく俺は首を絞め上げられてしまつ。

「グ、あ……！？」

硬くなつた舌が巻き付き、鎖のようになに首に食いこんでくる……閉まりきる直前に左腕を差し込んだおかげで即死は免れた。

「上坂あつ！」

「……ずいぶん味な真似するじゃねえか、ぐあッ！」

軽口を叩いているが実際はかなり痛い。ギチギチと食いこんでくる舌に腕の骨ごと折られそうだ。引き剥がそうともがくが……力が恐ろしく強く、不可能に近い。

平野の釘打ち機じや倒し切れない。俺はこの通り腕を塞がれて死なないようにするのが精一杯だ。意識を飛ばさないようにするのではギリギリである。廊下の反対側から走つてくる足音が聞こえたのは

…………うつむきその時だった。

「離れろッ！」

トカゲの化物に背後から飛びかかってきた男子は小室だった。金属バットがトカゲの化物の身体にめり込み、トカゲが苦悶のうめきと共に舌を解放する。

「はあああッ！」

トカゲの化物が怯んだ隙を逃さず、富本が槍のようモップの柄を突き出した。勢いよく突き立てられた金属が頭を貫いた。

「グシャアアア……！？」

トカゲの化物が苦しみにつめぐ。これ以上のチャンスはない。俺はすかさず化物との距離を詰める。

「くたばれッ……！」

木刀を頭にむかって振り下ろした。断末魔の叫びを上げながら……トカゲの化物は息絶えた。

廊下のむこうから来てくれたのは、小室と富本だった。それぞれ手に武器を持ち、制服が返り血でとこうどこう赤く染まっている。俺たちと同じように奴らくと戦いながらここまで来たんだろう。

「上坂君、よかつた……間に合つて」

「うつむきのほうから声がしたんで来てみたら……驚いたよ、あんな化物と戦つてゐるなんてさ」

小室たちは俺が生きているのを見て安心してくれたようだ。俺も笑つて返す。

「ありがとな、小室に宮本……無事だつたんだな」

「ああ、何とか。平野と高城も無事でよかつた」

「……アンタ達がさつさと逃げたからアタシ達を

十五

お嬢の言葉には棘がある……まあ、幼なじみに置いて行かれたんだし無理もないか。

「暮れ黙々として、ムニムニの心地がいい」

「高城さん……」

「いや……高城の意見は当然だよ。焦つてたとはいえ、クラスの誰にも知らせず俺たちだけさつさと逃げただから」

小室のやつ……浮かない顔してんな。やつぱ気にはしてたのか。

「こらお嬢、命の恩人に喧嘩売るなつて。こんな状況だ、お互い生きてんだからそれでよしとしようや」

「そう書いてもらえると助かる……でも、一体なんなんだ、このアーティストか？」

「全然形が違うけど…………奴らくよね？」
「だと思うが…………俺らを襲つてきたし」

3人で出たはずだが、井豪の姿はない。ということは……いや、聞かないほうがいいだろう。今はみんなで逃げることが重要だ。

悲鳴が聞こえた……俺のよく知っている声だ。この先には職員室がある。

「……急いで!」

「ああ!」

俺を先頭に廊下を走り抜ける。職員室の前まで来た俺たちが目にしたのは大量の>奴ら^くに囲まれた毒島先輩と静香姉えだつた。先輩は静香姉えをかばうように前に立つて戦つている。職員室の前はトロフィーの棚や来客用の下駄箱があり、比較的開けた造りになつていた。

小室が素早く全員に指示を飛ばす。

「僕と上坂で周りの>奴ら^くを倒して道を開く。平野と麗は先輩たちと合流したら静香先生と高城を守つてやつてくれ!」

「わかったわ」

「了解」

小室の指示が飛んだ次の瞬間に、俺たちは行動を起こしていた。背後から強襲する俺と小室に気づいた複数の>奴ら^くの頭をバットと木刀で潰す。俺はすかさず蹴りを入れて近くの>奴ら^くを転ばせ、小室がバットでどめを刺す。

俺たちを隙間を縫うように、平野の釘打ち機から釘が発射される。囲んでいた>奴ら^くの陣形に空白が生まれる。先輩たちのところへ合流することができた。

「助かったよ、数が多くて困っていたところだ」「だったら今度は、こっちから反撃しましょう」

小室の提案にうなづく俺と先輩。

「僕が左の半分をやる」

「右は任せろ」

「じゃあ俺は職員室の前のほうだな、後ろは頼んだ」

それぞれの得物を手に>奴らへと切り込む。俺は職員室の前にいる>奴らへを片付ける為に木刀を振るう。木刀を叩きつけて頭蓋を壊す。返り血を振り払う暇もなく次の>奴らの頭を横殴りにする。これで残りは妙に全身が赤い>奴らだけだ。

残った1体は、他の>奴らとは少し違っていた。髪を除き、皮膚の全てが血のようすに真っ赤に染まっており、手にはバットを持っている。

赤い>奴らは、まっすぐに俺にむかって直進してきた。>奴らへではありえないはずの、走る動きだ。こいつもこいつで他の>奴らへとは違うようである。赤い>奴らは、力任せにバットを振り回す。

間一髪のところで避けたバットが地面を叩く。床にヒビが入ったのを見た。驚異的な腕力である。

『オマエ、オレト……オナジ……?』

呟くような小ささだったので聞き取りづらかったが……赤い>奴らへは確かに人間の言葉を話した。いや、それよりも内容だ。こいつは俺が>奴らへと同じだと言つたのだ。『冗談じゃない……』。

「化物が……人の言葉を話すなッ」

俺は怒りを露わに木刀を振るう、頭を狙つたが異様に硬い……。木刀でわずかにバランスを崩しただけに終わる。

「なんて硬さだよ……」「

『クル、ナ……』

人間を越えた力で振り回される金属バットが風を切る。俺は狙いを変更し、首を狙う。木刀じゃ首を刎ねるとはいかないまでも、骨をへシ折ることはできるはずだ。

大きく振り回したバットを避けた後の隙を狙つて、首筋を一閃し、木刀を叩きつける。首の骨を粉碎する鈍い音が聞こえた。

「ア、ア……」

赤いゝ奴らゝは首を折られて、床に倒れた。そのままピクリとも動かなくなつた。どうやら、うまくいったみたいだ。小室たちもそれぞれ集まつていたゝ奴らゝの群れを倒していく。周りのゝ奴らゝはもう片付いていた。

電動ドリルを持ったお嬢が、こっちに駆け寄ってきた。俺が妙な奴と戦つていたから気になつたのだろう。

「だ、大丈夫なんでしょうね、アンタ……その、ケガとかしてない？」

「うわーお嬢、ドリル似合わねえな……」

「心配してあげた第一声がそれ！？ しうがないじゃない、これしかなかつたの！」

「そう怒るなつて……ケガもねえよ」

「そう、ならいいけど」

お嬢がふんと鼻を鳴らしてそっぽを向く。恥ずかしがつてんのか

……そんな事を思った時だつた。

『ウア……』

どこからか、声がした。倒したはずの赤い>奴ら^{くが}が、再び動いているのに気がついた。狙いは……お嬢だつた。俺は反射的にお嬢を突き飛ばす。

「か、上坂……？」

赤い>奴らくが振り回したバットが俺の左腕に直撃している。左腕がミシミシと嫌な音を立てる。腕の感覚が痺れたようになくなっている。激昂した赤い>奴らくが噛みついてこよつとするのを、木刀で無理やり防ぐ。

「お……お嬢……ドリルで、頭を……！」

お嬢が赤い>奴らの頭に目がけて電動ドリルを突き刺した。回転する金属が硬い皮膚を裂き、中身をかき混ぜる。頭をグラグラとさせながら悶絶して今度こそピクリともしなくなつた。

「はあ……はあ……」

「助かつた……ありがとなお嬢……」

返り血で真っ赤になつたお嬢は、両目から大粒の涙を溢れさせた。

「ああ、怖かつたよな。でも大丈夫だ」

「うわああああん！」

お嬢は子供のように声を上げて泣いた。俺は痛む左腕と胸に抱い

たお嬢の温かさを感じていたのだった。

第3話「イレギュラー登場」（修正版）（後書き）

読んで頂いてありがとうございます。

今回はオリジナルの「奴ら」を登場させてみました。
いかがでしたでしょうか。

今後もこんな感じでオリジナルの「奴ら」が登場する予定です。
8／2に描画を追加して、修正させていただきました。おかげで
展開が多少変わっています。

第4話「脱出」（修正版）

ひとしきり泣いたお嬢が落ち着いてから、俺たちは職員室へ入った。中は荒れ放題で、奴らの姿こそなかつたが書類や血が辺りに散乱している。

俺は小室たちと協力して、内側から出入り口を「スクや椅子などでふさいでバリケードを作つた。これでしばらくは、奴らの襲撃にも耐えることができるだろう。

みんな疲れをとるために、それぞれ適当な椅子に座つたり壁にもたれかかつたりして体を休めていた。

「ちゃんと動く……か」

俺は左手を虚空にかざして拳を握つたり、肩をまわしたりしてみるが痛みを感じることはなかつた。

左腕は赤い、奴らにバットで殴られて折れたかと思つたが、しばらく放置していると感覚も戻り、今ではこつして動かせるところまで回復している。

傷の治りは早いほうだったが、ここまで驚異的だと軽く恐怖すら感じた……考へても仕方ないか、ケガがないのは素直に助かる。

俺は職員室を探索することにした。職員室に他に武器にならそうなものはなかつたが、今あるもので十分だから特に問題はない。デスクの引き出しの中に教師が備蓄しておいたのであらう携帯食料を見つけることができた。これで今日明日くらいは何とかなりそうだ。あとは飲み物があればいいだろう。職員室の中には簡素な給湯室があり、そこに確かに冷蔵庫があつたはずだ。

「ん……？」

水道で顔を洗っていたお嬢が、タオルで顔をふきながら俺のほうを見る。僅かに水滴のついた顔に見慣れないモノが付属している。お嬢は薄いフレームのメガネをかけていた。

「なんだお嬢、メガネだつたのか？」

「だからなに？ コンタクトがやたらとズレるのよ…」

いつも通りのお嬢だつた。これなら大丈夫そうだな、と判断した俺はいつもの調子で話しかける。

「いー や、可愛いと思つただけだ」

「か、可愛いって……あ、アンタの好みなんてビリでもいいのよつ！」

怒りながら通り抜けよつとしたお嬢だつたが、俺のそばに来ると急に足を止めた。

「……身体、本当に大丈夫？」

驚きを顔に出なかつたのは俺の人生で一番のファインプレーだつたと思う。俺は、笑いながら腕をブラブラ振つてやる。

「はつはつは。ケガしたヤツがこんな軽快に動けるワケねーだろ？」「そう……あのさ、さつきはありがとね、かばつてくれて」

「……お嬢……頭でも打つたか？」

「あんたつて……ホント……バカツ！」

お嬢から持つてたタオルを投げつけられた。そのままお嬢は俺を通り過ぎていく。投げつけられたタオルは、奴らの血の匂いに混じつて僅かにお嬢の甘い香りがしたように感じた。

普段ツンツンしてるお嬢に素直にお礼を言われたら照れるだろうが……俺もさつさと顔を洗うか。俺はバシャバシャと水を顔にぶつかけて少しだけ火照った顔を冷やすのだった。

「あ、やつと来た」

俺がみんなの所に戻ると、職員室の中心あたりにみんなが集まっていた。お嬢が会議みたいに仕切つて話を進めている……まあ、こういうの得意そうだしな。

いやという時に名前が分からないと困る、というお嬢の助言を受けて俺たちはお互いの自己紹介をすることになった。所属と名前、あとは得意なことなどを簡単に伝える。ここにいる連中はほとんどが2・B所属で、俺にとつては全員が知り合いだった。

「じゃあ、あとはあの動く死体の特性ね……」
「僕たちは、奴らって呼んでる……漫画やゲームじゃないから、な」

それは奇しくも、俺が頭の中で決めていたあいつらの呼称と同じものだった。小室は辛そうに表情を曇らせ、宮本は視線を逸らしてしま、ギュッと唇を噛みしめて悔しそうにしている。まるで『今はいない誰か』を思い出しているように見えた。

「奴ら」という呼称を作ったのは、永井だろうか。3人で出て行つたはずの小室たちが今は2人しかいないことを合わせて考えれば……永井に何があつたのか想像するのは難しくない。

「よし、それじゃ呼び方は、奴らでいい。いいよな、お嬢？」

「わかったわ。それで、奴らの特性だけど……」

- 1、力が異常に強い。
- 2、音に敏感で、聴覚のみしかない。
- 3、頭を潰さないと死ない。
- 4、>奴らくに噛まれると100%の確率で>奴らくになつて甦る。発症には多少の個人差あり。

みんなから聞いた意見を大雑把にまとめると、こんなところだろうか。あとは、通常の>奴らく以外にトカゲの化物や赤い>奴らくといったイレギュラー的な存在が混じっていることだが……それについて詳しい情報はない。

静香姉えが自分のバッグから車のキーを探している。車さえあればあとは比較的安全に学校から脱出することができるからな。

「鞠川校医の車は、全員を乗せられるのか？」

「うう、そういえば……無理です……」

まあ、無理だらうな。静香姉えの手持ちの車は小さすぎる。乗つてもせいぜい2~3人だ。今ここにいるだけでも……俺、お嬢、静香姉え、平野、毒島先輩、小室、富本がいる。

「バイクのキイはあつたけど……やつぱり大人數は無理だよな」「部活遠征用のマイクロバスはどうだ、壁のカギ掛けにキイがある

が？」

いい考えだと思った。でかい方が少しくらい奴らに囲まれても突破しやすいし、何より全員が乗ることができる。俺は窓の外から駐車場を眺める。教師の乗ってきたであろう車やサイドカー付きのバイクの他に、マイクロバスが確認できた。

「それはいいけど……どこへ？」

「家族の無事を確かめます。近い順にみんなの家を回るとかして、必要なら家族も助けて、それから安全な場所を探して……」

俺と静香姉えは他に家族がいないから問題ないが、家族と離れている小室たちは不安でしうがないだろう。助けることは全面的に賛成だつた。俺はそれを無駄な寄り道だとは思わないし、力を貸すのも惜しくない。

「……そんな、なんなのよ、これ……」

宮本が職員室にあつたテレビを見つめたまま、固まつている。何かショックキングな報道でもあつたんだろうか。信じられないものを見たような顔をしている。様子を見た先輩が、置いてあつたリモコンでテレビの音量を最大にした。

事件を報道するリポーターの後ろで、奴らくに噛まれた連中が救急車に運びこまれようとしている。

『……です。各地で頻発するこの暴動に対し、政府は緊急対策の検討に入りました。しかし、自衛隊の治安出動については、野党ともに慎重論が強く……』

「暴動つてなんだよ、暴動つて！」

「小室、ちょっと黙れ。聞き逃すぞ」

「あ、悪い……」

『……ません。すでに住民の被害は1000名を超えたとの見方もあります。知事により非常事態宣言と災害出動要請は……』

パンツ！

渴いた音が聞こえた。警官が、奴らくにむかつて発砲したようだ。

『発砲です！ついに警察が発砲を開始しました！状況はわかりませんが……きやあああー…』

テレビの中では、救護されていた人間が動き出したのだ。>奴らくになつて、人間を襲い始める。報道していたリポーター達にも魔の手が伸びる。カメラマンは逃げ出したのか、カメラが横倒しになる。『いや、なにつ……うわっ、た、助けつ……うあっ、ああああつー!』

映像が乱れる……お決まりの『しばらくおまちください』のテロップが流れた後に中継が終わり、スタジオに戻った。

『な、何か問題が起きたようです。』、『これからはスタジオよりお送りします』

「それだけかよ……どうしてそれだけなんだよー！」

「パニックを恐れてるのよ」

怒りながら机を叩く小室とは対象的に、お嬢はひどく冷静に状況を分析している。

「いまさら…」

「いまさらだからこそ、よ。混乱は恐怖をうみだし、混乱は秩序の崩壊を招くわ。そして秩序が崩壊したら……どうやって『動く死体』に立ち向かえるといつの？』

とはいってのはそう簡単に団結できるものじゃない。国のトップのほとんどは、危機であつても主導権を争い、混乱が収まつた後の事を考へるかもしれない……そこまで愚かではないと信じたいが。

「まあ、最悪の場合……核ミサイルでも落とすかもな」「やうなつたらおしまじよ……」

その後に続く「コースもろくでもない事ばかりだった。『暴動』から身を守る為の住民に対する警告と、世界各国で同じような状況になつている、ってことがわかつただけだ。下手をすれば、国の中核である人物すら死んでるらしい。どうやら事態は、俺が想像していたよりずっと重く、壊滅的なようだった。事実は小説より奇なり、とはよく言つたものだ。

「たつた数時間で世界中がこんなになるなんて……で、でもきっとすぐいつもどおりに……」

宮本はぎゅっと小室の服の袖を掴んでいる……不安で、どうしようもないのだ。だから希望が欲しいのは分かる。だが、これだけの騒ぎだ……事態が収束するのは、無理だろう。

「なるわけないしー」

現実的なお嬢は宮本の甘い考えを否定した。お嬢の歯にもの着せぬ言い方に小室が食つてかかる。

「そんな言い方することないだろ」「パンデミックなのよ？ 仕方ないじゃない！」「ぱんでみつぐ、ってなんだお嬢？」「感染爆発の事よ！ 世界中で同じ病気が大流行してるって事！ そのくらい知つてなさいバカ！」

♪奴らくは病気のようなものだ。通常なら人が死に過ぎれば感染

すべき人間がいなくなるので物理的に収束するが、今回の場合はそれがない。『感染』したら、奴らくになり、動き回つて人を襲うからだ。結果的に感染は拡大し続けるので、止まる要素がない。通常の死体ならそのうち肉が腐つて動けなくなるだろうが、……あれはもはや人間じやないし、現代医学の常識は当てはまらない可能性が高い。トカゲの化物やさつきの赤い、奴らくみたいなのもいる。

「……まさに『化物』ってことか」

「へ奴らくに關してはこのくらいでいいだろ？。じゃあ、これからどうするか決めようか」

まずは、家族の安否を確認するという事でみんな合意した。それが勝手に動き回つていては意味がないので、チームを組むことになった。

「できる限り、生き残りも拾つていい」

「はい！」

すでに扉をふさいでいたバリケードは片付けた。あとはドアを開けて外に出るだけだ。

「どこから外へ？」

「駐車場は正面玄関からが一番近いわ」

「……行くぞ！」

時刻はそろそろ夕方にならうとしていた。青かった空が少しづつオレンジ色に染まり始めている。

職員室を出た俺たちは、正面玄関へ向かうために最低限の、奴らくを蹴散らしながら廊下を進んでいく。階段の途中で、5人の男女が、奴らくに襲われているところに出くわした。

「アー……」

「きやあああつー?」

悲鳴はゝ奴らゝを呼び寄せる格好の餌だ。本人がそれを知つていいかどうかは定かではないが。

「た、卓造……」

「くそつ……下がつてろー」

女子をかばいながら、タオルを首にかけた男子　卓造が持つている金属バットで応戦しようとしている。もう1人のさすまたを持つた男子もいるが……腰が引けており、とても戦えるような状態ではない。でかい荷物を持っている奴は動けそうにないな。このままで、すぐにでもゝ奴らゝの仲間入りだらう。

噛みつこうとしていたゝ奴らゝの頭に釘が飛んだ。平野の射撃で数が減つたところへ俺たちが切り込む。少しは体力が回復したおかげなのか、体がいつも以上によく動いているのを感じる。木刀が、まるで小枝でも振つてるみたいに軽いのだ。ゝ奴らゝの頭をトマトのよう潰し、倒していった。みんなの奮戦によつて、救出戦はすぐ終わつた。

「あ、ありがとうございます!」

「でけー声はナシな?　アイツらが寄つてくるからよ

よつほど安心したのだろう。嬉しそうに頭を下げる女子の気持ちも分からぬではない。ゝ奴らゝに噛まれていなかと質問すると5人の男女は揃つて首を横に振つた。見たところ本当に噛まれた奴はいないようだ。俺は少し気になつたことを聞くことにした。

「なあ、ちょっと聞きたいんだが……それ、何が入ってるんだ？」

背中に大きなバッグを背負った男子が答える。

「あ、これですか……途中で倉庫に寄ったのでチヨーンソーとか、カッターとか武器に使えそうなモノを……」

「音が出るのはやめときなさい。>奴らくが集まつてくるでしょ」「はは、そりやそつだな」

「い」から脱出する、一緒に来るか？」

「え、ええ！」

小室の提案に、生き残っていた男女たちは同意した。同行者を増やして、俺たちはさらに階段を下りていく。みんなどこか表情が明るくなつたように見えたのは、自分たち以外にも生き残りがいたのが嬉しかつたのかもしれない。

正面玄関へ辿りついた俺たちは、下駄箱の前で立ち往生していた。下駄箱に隠れながら正面玄関の様子をうかがうと結構な数の>奴らくがいるのが見えた。

「さすがにあの数全部相手にすんのは面倒だな……体力持たねーぞ」「>奴らくは音にだけ反応してるんだから隠れることなんてないのに……」

「じゃあ、高城が証明してくれよ」「ぐ、むう……」

お嬢が言葉に詰まつた。実験したとはいえ、絶対に安心というワケでもない。運動神経のあまりないお嬢がやるのは酷つてもんだろう。

「しかし……」のまま校舎の中を進み��けても、襲われたら身動き

が取れない」

「玄関を突き抜けるしか、ないのね……」

本当に視覚にしか反応しないところとを、誰かが確かめるしかない。誰も行こうとはしないのを見て、俺は手を上げて立候補する。

「それじゃ、俺が行く」

「あんた……怖くないの……？」

「お嬢の推理が正しいのは身を持つて知ってるからな。突っ込んでも大して怖くねえよ」

「だからって……」

何か言いたそうな小室だが、ここで時間を無駄に消費しても意味がない。

「……こいつのは俺に任せとけ。何かあつた時もお前と先輩がいれば何とかなるだろ？」

「……わかった。無茶はしないでくれよ」

「上坂……」

お嬢を見ると何か心配そうな顔をしていたので、安心させようと笑つてやつた。

「んじゃ、行つてくる」

俺はゆっくり歩いて、下駄箱から出て正面玄関のドアへとむかう。余計な音を立てないように、ゆっくりと歩を進めていく。肩が当たるそうな距離を奴らくがうめき声を上げながら通つて行く。やはり、目は見えない……のか。

「ア一、ウ一……」

うめきながら歩いている>奴らくが周りに腐るほどいるが、俺を襲つてくる様子はない。目は見えてない……お嬢の推理が大当たりだ。小室たちに大丈夫だと合図する。

さて……どうやって>奴らくを引きつけるかな。足下に転がっている血に濡れたスニーカーを見つけた。ちょうどいい、こいつを使わせてもらう。俺は足下のスニーカーを拾つて、近くのロッカーにむかつて放り投げる。

ガツンッ！

「ア一……」

>奴らくの群れがロッカーに向かっていく。その間に、俺は正面玄関のドアを開けた。先輩を先頭にみんなが移動を開始する。ゆつくりひとりずつ、玄関をくぐつていいく。

俺の他に、あと残つているのは……さつき助けた男子が2人か。よし、このままなら>奴らくをやり過ごせる。誰も欠けることなく脱出することができる……そう思った時だ。廊下の向こうから、見たこともない>奴らくが近づいてきた。

それは>奴らくの中でも異様だった、何より目を引くのは、その右腕。歪に肥大化した右腕はは黒々とした毛に覆われており、先に鋭く長いカギ爪が生えている。右腕だけが獣になつたようだつた。あんなものでやられたら肉を裂かれあつと言つ間にズタズタにされるだろう。

「ひいつ！？」

右腕が獣なカギ爪の>奴らくに恐怖した男子が驚きのあまり、持

つていたさすまたを扉にぶつけてしまった。

カーンツ！

音は、静まり返っていた校舎によく響いた。周りの>奴ら^ノが一斉にこちらを振り向く。小室と俺が叫んだのは、ほぼ同時だった。

「走れッ！！！」

こうして、命をかけた鬼ごっこが始まった。

途中で噉まれた奴が多いってことか。

「……かに駄車場までにはそこ遠くなし……全力で走り抜ければまだ、望みはあるはずだ。俺たちがバスにたどり着くのが先か。それとも……全滅か。

「……邪魔あつ！」

木刀を横に一閃するたびに、奴らが地面を転がっていく。走りながら立ち塞がる奴らへ、俺たちはひたすらにぎ倒していく。返り血で真っ赤に染まつた木刀で、ただ敵を刈り続ける。

先頭を走る小室と先輩が道を開く。さらにそこから富本、平野、お嬢、俺が続く。

後ろから力ギ爪を持つたゝ奴らゝが吼えるのが聞こえる。力ギ爪のゝ奴らゝは、俺たちの後ろから追いかけている。ゝ奴らゝのくせに結構な速度で走つてくるのが厄介極まりない。途中で転んで逃げ遅れた女子の一人が、奴の力ギ爪で背中を引き裂かれてしまった。

「ひツ、ギャアアアアアアーーー？」

大量の血が飛び散つて……絶命する。このままバスに行つて逃げ切れるか……いや無理だ。このままじゃ間違いなく追い付かれる。誰かが足止めしねえと……。

「あんなのに暴れられたら脱出するど」「いやないわ……」「だが木刀じゃいくらなんでも……待てよ」

お嬢と相談していく、閃いたことがある。俺の少し前を走る大きな荷物を持った男子に命令した。

「おい、荷物をよこせー！」
「は、はい！」
「ど……どうするつもり？」

近くにいた男子から重い荷物を受け取つた俺は、大急ぎでバッグから目当てのものを探す……あつた。

赤い塗装を施された無骨なチーンソー。刺々しい見た目のそれは結構な重量のはずだが、今の俺にとっては大した重さではない。片手で持つてスターターを勢い良く引っ張り、エンジンを始動させる。

ギュイイイイイー！

燃料の焼ける匂いとともに、刃が勢いよく回転し始めた。派手な音が出るが……この状況ならもう関係ないだろう。

「コイツならあの化物でもぶつた切れるだろ」

「何やつてんのアンタ……！ それじゃ周りの奴らも集まつて……
きやあつ！」

お嬢に近づいづとしていた奴らへを回転する刃で一刀両断する。血しぶきとともに、切つた箇所がじつそりとえぐられてなくなつた。大した威力である。

「……平野、お嬢を頼む！」
「わかつたよ」

平野は一瞬表情を曇らせたが、すぐに力強くうなづいてくれた。

「つ……し、死んだら……許さないから……」

何か言いたそなお嬢だつたが……どうにか平野と一緒にバスへ向かつてくれた。さて、頑張りますか。

「ぐ、来るなッ……くそつー！？」

後ろのほうで戦つていたのは俺だけではなかつた。奴らへに囲まれながらもバットで奮戦していた卓造という男子は、首にかけていたタオルを奴らへに掴まれてバランスを崩す。首筋に食いつこうとした奴らへを俺がチエーンソーで一刀のもとに切り伏せる。返す刃で周りの奴らへも切り払つた。

威力はすげえけど……血しぶきがひでえなこれ……。

「た、助かりました……」
「いいから走れ……ほら、彼女が待つてんだろ」

お嬢たちと一緒に走つていた女子生徒がこちらに向かつていて

る。」いつが心配だつたんだろつ。

「……ありがとうございました！」

短くお礼を言つと卓造は女子生徒のほうへ走つて行つた……これで後続にいるのは俺だけになつたか。いや、1人のほうがよっぽどやりやすい。これ以上仲間が食われるところなんて、見たくもない。

「アー……」

周りにいるゝ奴らゝはチョーンソーのエンジン音につられて俺のほうへと集まつてきていた。

俺はチョーンソーを振り回し、ゝ奴らゝを排除していく。ゝ奴らゝは例外なく顔や足などの身体のパーツを切り飛ばされながら倒れていく。

血まみれになりながら戦つてゐる俺の心に恐怖はなかつた。戦うことを愉しいと感じ始めてさえいた……。

力ギ爪のゝ奴らゝが目前まで迫る。俺はチョーンソーの回転する刃を立てるように構えて、力ギ爪のゝ奴らゝに切りかかつた。

『オオオオッ！』

血肉を裂きながら、回転する刃がゝ奴らゝを削る……だが、浅い。腕を掠つただけだ。反撃に飛んできた爪を横に飛んで避けた。

こつちは一撃でももつたらアウトだ。力ギ爪を持つたゝ奴らゝの身体はあちこちがズタズタになつてゐるが、それでもまるで効いた感じがしない。

「……みなさん急いでつ！」

教師らしい男の叫び声が聞こえた……俺たちに遅れて、向こうから走つてきたりしい生き残り組がまだいたようだ。

大声につられて、カギ爪のゝ奴らの注意が一瞬逸れたのを、俺は見逃さなかつた。一気に距離を詰めてチヨーンソーを振り下ろす。高速で回転する刃が筋肉を引き裂きながら、肩口から左腕を断ち切つた。

『グオオオオオオ！』

「……つぐア！？」

『ドスつ！

腕を切り落とされ、血をまき散らしながら怒り狂つたように叫ぶカギ爪のゝ奴らの振り回した腕が、俺の脇腹にぶち当たつた。俺はボールのように軽く吹つ飛ばされる。

何とか立ち上がつた俺は、赤いモノが混じつた唾を吐き捨てた。

「チツ……そう簡単には死んでくれねえか……」

チヨーンソーの吐き出すエンジン音に引き寄せられて、他のゝ奴らも続々とこちらに向かつてきている。さつきの生き残りたちは、俺が引きつけていた間にバスへ向かつたようだ。

遠く、エンジンの音が聞こえた。

バスのエンジン……にしては何か違うような気がする。だんだんと排氣音が近づいてくるのが分かる。チヨーンソーのエンジンよりもっと大きな音。これは……より速く走る為に出す音だ。

「上坂——つ！」

俺を呼ぶ声に振りかえる。小室がサイドカー付きのバイクに乗つてこつちへ突っ込んでくる。俺を囮もつとしていた奴らくを何体かひき殺しながら、目の前で止まつた。

「小室っ？！ お前なんで……」

「いいから、早く乗れ！」

驚く暇もなく、俺はサイドカーに飛び乗つた。バイクはすぐにジャーンしその場から離脱する。

「まつたく……無茶するよお前は」

「悪いがもうちょい付き合つてもらひひだ。アイツにトドメを刺す「どうするつもりだ？」

「アイツの横をすり抜けざまに俺がこいつでぶつた切る、単純だろ？」

チヨーンソーを構えながら、作戦とも言えない作戦に小室は賛成した。

「よし、やろう！」

「おう、運転は頼んだぜ！」

俺はチヨーンソーの刃を真横に立てる。離れないよつに、がつちり構える。派手な排気音を噴かせながら、バイクは再びカギ爪の奴らくへと突っ込んでいく。途中にいた奴らくは例外なくチヨーンソーの餌食になつて散つた。

『アアアアアアアツ！』

「くたばりやがれ！」

猛スピードで走るバイクがカギ爪のゝ奴らゝと交差する。チエー
ンソーの回転する刃が、カギ爪のゝ奴らゝの脇腹に食いこむ。その
まま、紙を裂くように一気に身体をぶつた切った。

『ゲオオオオオオオオオオ！？』

苦悶の叫びを上げながら、血の海と化した駐車場の地面に倒れる。上半身と下半身はほぼ分かたれた状態で、もつ立ち上がることもできなくなる。

「ね、君のやまみんなのところへ。」

小室と俺が乗ったバイクはバスに近づこうとしていた。奴らを切り飛ばしながらさらに進む。バスの前では毒島先輩が「奴らを近づかせない」と木刀を振り、平野が窓から援護射撃を繰り返していた。俺たちのバイクが到着した時には、無理な使い方をしたチーンソーは動かなくなっていた。バイクと一緒にその場に捨てた。

「何とかなったようで何よりだ……バイクに乗った小室君を見た時は驚いたよ」

「いや、おかげで勇敢な仲間の命が助かつたのだから安いものだ」

先輩が微笑む。生き残っていた者は全員乗つたらしい。あとは小室、俺、先輩の3人だけだ。俺たちは急いでバスに乗り込んだ。

「行きます！」

バスが勢いよく発進する。静香姉えは 奴ら を避けながら器用にバスを運転する。すげえ……やつぱ運転上手かつたんだな。

校門の前には 奴ら が大量に群れていた。さすがにバスが通れるだけのスペースはない。 奴ら を避けながら進むのは、無理だろひ。

「人間じゃない……もう、人間じゃない！」

静香姉えが自分に言い聞かせるように呟く。覚悟を決めた静香姉えは校門の前にいたゝ奴らくをひき殺しながら、バスは進ませる。

ガアアアアアン！

閉じていた校門をぶち壊して、バスは勢いよく外に飛び出した。数々の困難を乗り越えて俺たちはようやく、学園を脱出したのだった。

後から乗った連中は3・Aの紫藤とその生徒たちだつたらしい。紫藤は笑顔で礼を言いながら、話しかけてくる。

「助かりました……リーダーは毒島さんですか？」
「そんなものはいない……生きる為に協力し合つただけだ」
「それはいけませんねえ……生き残る為には『リーダーが絶対に必要』です。全てを担うリーダーが」

何かを含んだような紫藤の台詞が引っかかる。どさくさで助けたことになつちまつたけど……宮本が今にも殺しそうな顔で紫藤を見てんだよなあ。

「……なんで、あいつがツ……！」

「麗……」

宮本の怒り様に、小室は困惑した表情をしている。

「だったら宮本、なにかあつたら最悪お前がソレでやつちまえぱい一だろ？ 武器があるんだから上手く使え」

宮本が驚いた表情で俺を見る。俺は知らないが、あいつと何かあつたんだろう。俺は止める気はない。

「……上坂君がそういう風に言つなんて意外だつた……そりよね、そりするわ」

すぐにでも紫藤に殴りかかりそうだった宮本は、とりあえず席に座つてくれた。少しばか頭も冷えたかな……俺はお嬢の隣に腰を下ろした。

「……お疲れ様。アンタが足止めしてくれたおかげで、残りの連中も無事よ」

お嬢がねぎらいの言葉をかけてくれるが……その表情がどこか怒つてらつしゃるように見えるのは気のせいだろうか？ 普通は好感度アップするところじゃないの？

「お、お嬢……なんか怒つてる？」

「あたし、今回のことでの分かったことがあるの……あんたはバカじやないわ。大馬鹿よ」

ちくしょつ、ツンしかねえ！ いきなりどつと疲れがわいてきた……瞼が急速に重くなつていいく。

「で、でも……ちゃんと追いついてきたから許してあげ……」

「悪い……やすがに、暴れすぎた……5分でいいから寝かせて……」

「ちょ、ちょっと上坂……もうー……」

俺は高城の横でぶつ倒れたように眠りについた。急激に暗闇に落ちていく。

「これで全てが終わつたワケじゃない。これはほんの始まりに過ぎなかつたのだ。」

これからさらに過酷な現実と戦わなくてはならない。そのことを俺は……今はまだ知らなかつたのだ。

第4話「脱出」（修正版）（後編）

今回で無事に学園を脱出できました。これまで学園編は終了となります。

読んでいただきありがとうございます。

感想や意見などありましたらいつでもお待ちしております。

8／9に修正致しました。展開が多少変わっています。

第5話「対立」

第5話「対立」

俺たちは、生き残るためにいくつもの修羅場をくぐり抜けてきた。そして、ようやく地獄と化した学園を脱出した。

バスで学園を出てからすぐに、新たな問題に直面している。どうも、上坂です。本当に5分くらいしか眠れませんでした。起きたら最悪の空氣です……寝覚めが悪い……。

原因は、紫藤の連れてきた連中だ。

短い髪を金髪に染めたチンピラみたいな奴がでかい声で騒いでいる。「ちっ、だからよお、このまま進んだって危険なだけだつてば！ だいたいよお……なんで俺らまで小室たちに付き合わけりやいけないんだ？」

お前ら勝手に街に戻るつて決めただろ？

学校の中で安全な場所を探せばよかつたんじゃねえのか？」

金髪野郎に便乗して、気の弱そうな男子生徒がさらに続く。

「そうだよ！」

どこかで立てこもったほうが……わっかのコンビニとか……」

「だつたらなんでバスに乗つたよ？」

引きこもりで一なら、学校にいりやよかつただるうが。後から乗ってきたのはそつちだ

「そ、それは……」

やれやれ……。

助けられたのに感謝の気持ちすらねーみたいだな。最低だなこいつ。

「……馬鹿か、あいつら」

「アンタ以上のバカがいるとは思わなかつたでしょ？」

「それひでーよ、お嬢。まあ確かに俺はバカだけどさ」「少なくとも……アンタは良いバカよ、安心しなさい」
キキイツ！

バスに急ブレーキがかかり、道路の端っこにバスが急停車する。
「いい加減にしてよ！」

「こんなんじや運転なんてできない！」
めずらしいな……静香姉えが怒っている。まあ、怒るのもしゃーないわな。

「な……なんだよつ！」

「ならば君はどうしたいのだ？」

毒島先輩のセリフに言葉を詰まらせた金髪野郎は、小室を指差した。

「……気に入らねえんだよ、こいつが！」

こいつが……気に入らねえんだつ！

大事なことなので2回言いました、つてか？

「くだらねーな」

平野が銃で金髪を狙おうとして、毒島先輩が無言で止めていた。

「上坂……手を出しちゃダメよ」

「分かつてるつて。『手』は出さねーよ、『手』は

小室が金髪に食つてかかる。

「何が気に入らねえんだ？

俺がいつお前になんか言つたよ？」

「てめえ……！」

手を出そうとした瞬間、俺が割つて入る。

「おい金髪……名前なんだ？」

「あア！？ 角田だよ……なんだてめえ？

いきなりしゃしゃり出てきて……ぐはああアつ！？」

ガスツ！

俺は無言で角田の腹に蹴りをぶち込んだ。

「奴らくにぶち込むよりちょっとマシ、程度にだ。」

「あはは……『手は出さない』ね、なるほど」

「つむ。嘘は言つていないな」

さすが先輩。話のわかる良い女だ。

俺はうつめきながら腹を押えている角田をにらみつける。

「角田君さあ、人が寝てんのにピーチクパーチクつむをこよへ……潰すぞ。ここで足一本折つてみる？」

「いらねーだろ引きこもるなら?」

「ゴホッ……や、やめ……つ！」

「ねえ、平野……アイツつてこんなキャラだつけ?」

「いえ……いつもどだいぶ違う気がします……」

「京君つて寝起きが悪いのよね……」

寝てるところをこんなクソみてーな理由で起こされたんだからそりや気分も悪い。

「上坂君がやらなくとも……私がやつたのに……」

俺はモップの柄を構えている宮本に言つ。

「俺の安眠妨害は大罪だ……つてのは半分冗談だが。

動物と同じで力関係ははつきりさせといったほうが後々楽に……」

パチパチパチ！

紫藤が拍手しながら近づいてくる。

「実にお見事……素晴らしいチームワークですね。

しかし……いつも争いが起こるのは私の意見の証明にもなっていますねえ。

やはり、リーダーが必要なのですよ、我々には

「ああ、そつちが本題……」

……みづやく寝起きの頭が回ってきた。

「で……候補者はアンタ一人きりつてわけ？」

「私は教師です高城さん。そしてみなさんは学生です。それだけでも資格の有無ははつきりしてます。」

私なら、問題が起きないように手を打てますよー！」

「はい待つたー」

「なんですか、上坂君…………？」

話の腰を折られて、紫藤は微妙な顔をしている。

「教師が生徒より上、って定義がそもそも間違いつすよね。実際に対応できる能力のほうが問題だ。年功序列の会社じゃねーんだからさ」

「た、確かにそうですが…………」

「紫藤先生は、外にいる奴らくに突っ込む勇氣があります？ リーダーには勇氣も必要つすよねえ。ああ、武器なら貸しますよ俺の木刀を。

あと、具体的な案を示してくださこよ。今こいで、具体的にどうするのか」

「そ、それはですね…………」

「驚いたわ…………あんたも理論的ないと聞えるのね…………」

おーい、聞こえてんぞお嬢。

「それが示せねーなら、誰がやうづが同じだ。というわけで俺は反対する」

「アタシも上坂と同じよ」

「僕もです」

「私も上坂君を支持しよう」

「俺もだ」

「私も」

「お嬢、平野、毒島先輩、小室、富本…………」

小室たちは全員俺と同じ反対側になつてくれた。やつぱり信頼できるのは、こいつらだけらしい。

「…………くつ、で、では多数決を取りましょうか」

うわあ…………数の力は面倒だな。民主主義最悪。

俺たち以外の連中が全員紫藤を指示しやがった。俺の論破は無駄になつたと…………へこむわあ。

せつかくめずらしく戦い以外で頭使つたのに…………。

「という」ことで……多数決で私がリーダーということになりました

紫藤の無駄に芝居ががつたボーズがすげー腹立つ。

二二

「麗 ！ 宮本が怒りで身体を震わせながら、バスを飛び出した。

「兼六園、そこはアント麗村一堵」――ソノハコハ二〇二二

宮本はそのままトンネルのほうへ歩いて行く。

「行動を共にできないのであれば……仕方ありませんね」

「何言つてんだ……あんた!? くつ！」

「小室つ！？」

小室が宮本を追つてバスを降りる。トンネルのそばで宮本を説得し始める。

「街まで我慢するだけじゃなしけど歩きじゃ危険」「だから後悔するつて言つたのよ!!」

「八月雪」集

響くクラクションの音。

迫ってくるモノを見て、俺はバスから身を乗り出して叫んだ。

卷之三

ナニカ

道跡をすこいスピードで突き込んでくる大型バスが見えた

大型バスが他の車ごとつかつてバラ

横転しながら道を滑つてくる。

「マジかみつ.....!?」

小室がどうせに宮本を抱いてトンネルの中に飛び込んだのが見えた。

大型バスはトンネル前でようやく止まつたが……道をふさぐように

横倒しで炎上している。

隙間がほとんどねえ……。

「ちっ、これじゃ小室たちが戻れねーじゃねーか！」

俺はバスから降りて小室たちを呼ぶ。

「小室っ、大丈夫か！？」

ガシャアアン！

バスから出てきた 奴ら が燃え上がったまま、俺のほうへむかってくる。

「おいおい……火にずいぶん強えんだな」

俺は近くにいたゝ奴らへ蹴り飛ばす。

「熱ツ……面倒な連中だ……！」

「上坂つ！」

わずかにある隙間から小室が顔を出す。

「警察で……東署で落ちあおつー！」

「時間はどうすんだ！」

「午後7時に！ 今日が無理なら、明日のその時間でー！」

「わかつた！ くたばるんじゃねーぞ、小室ー！」

「お前もなー！」

そこまで言つて、道が完全にふさがつてしまつた。

俺は急いでバスに戻る。

「鞠川校医……ここはもう進めない」

「分かつたわ……戻つて他の道をー！」

バスはJターンして、走り始めた。

こうして俺たちは、一時的に仲間と離れ離れになってしまった。

だけど、きっと再会できるはずだ。

今はそれだけを信じる。

第5話「対立」（後書き）

読んでくださいましてありがとうございます。

今回は短めですが、次回でガンガン進む予定です。

お気に入り登録してくださった方、ありがとうございます。
こんな話でも楽しみにしてくれてる方がいるんだなあ、と励みにな
っています。

それでは、近いうちにまた。

第6話「再会」（前書き）

前回の続きになります。

評価してくださった方、ありがとうございます！

これからもできるだけ定期的に更新できるように頑張っていきたい
と思います。

不幸なアクシデントによって、小室たちと別行動をとることになってしまった。俺たちの乗ったバスはすぐに道を引き返して街の中を走行する。

街中を通る道路は、車がすし詰め状態となっているせいと長い渋滞が続いていた。あまりの多さにうんざりする反面、あれだけの騒ぎがあったのに、まだこれだけ人間がいるのを見て俺は少しだけ心の中を安心していた。

「いりや、歩いたほうがよっぽど早いな」

「いの調子じや、朝までに橋を越えられるかどうか……」

残った俺、お嬢、毒島先輩、平野はバスの運転席の近くに集まっていた。紫藤たちからは十分に距離をとっている。一緒にいたくないのだ。正直絡まれても面倒なだけだし、本音を言えばすぐにでもぶつ飛ばして追い出してやりたい気分だった。

ぐうう～～～。

間の抜けた音が車内に響いた。平野の腹の虫が盛大に鳴くのを聞いて俺と先輩が苦笑する。

「つるさいわね、黙りなさいよー」

「黙れって言われて……お腹すいたなあ……」

平野の咳きは当然だらう、俺たちは腹から何も食べてないのだから。職員室に寄った時に水を少し補給したくらいである。お嬢が若干イライラしているのも仕方ない。

「よし。お嬢、カバンに入れておいたもん出すから貸して」

俺はガサゴソとお嬢が持っていたカバンをあわる。中からは携帯系の食糧を中心に、水や缶コーヒーなどが出てきた。工具が入っていたのであまり大量とはいえないが、それでも俺たちで分けるには十分な量だった。

「うわっ、食べ物と飲み物がこんなに……いつの間に？」

「職員室を探したら結構あつたから詰めておいたんだよ」

「どうりでカバンがえらくパンパンだと思つたら……意外と抜け目ないわねアンタ」

「はつはつは。もつとほめてくれたまえ」

「調子のんない！」

俺たちは夕食をとることにした。比較的匂いのしないゼリー状の食品なんかを選んでみんなに配る。

「上坂、アンタは食べないの？」

「ああ、俺はあとで食うよ」

俺はバスの後方を警戒していた。紫藤たちに食料の存在を知られると面倒だからだ。絶対に分けると言つてくるだらうが、少なくとも紫藤たちに数少ない食料を分ける気は欠片もない。

簡素な食事だったが、それでも食欲が満たされたことで落ち着いたのか、平野はすぐに寝息を立て始めた。

「よつほど疲れていたんだな……」

「疲れない方がおかしいわよ……こんな状況だもの」

「お嬢、先輩、休んでいいぞ。紫藤の言うとおり『ここは安全

だ。とりあえずはだけど

「私は大丈夫だ。君こそ休んでおいたほうがいいんじゃないかな？」

学校からここまで、ずいぶん無理をしてきただろ？

「うちの女性陣は強いな……じゃあ、お言葉に甘えて

俺は席に座ると、あつという間に意識が落ちていった。やはり、疲れていたのだと自覚した。

世界は変わってしまった。まだ……たつた半日しか経っていないのに、俺は自分が少しずつ変化し始めていることを感じていた。>奴らと戦うことを恐れず、むしろ嬌々として最前線に赴き木刀を振るう……まるで戦闘狂のよう。

これから、どうなつてしまひのだろう。俺達はどう変わっていくのだろうか。それは誰にもわからない。

それから数時間が経つた。ぼんやりとした視界のなか、紫藤の演説が聞こえてくる。

「それぞれが勝手に行動するより、どこか安全な場所を得た後行動するべきです。例えば家族の安否も、規律のある集団としての準備ができてから……」

周りに田を向けると、平野はまだ寝ているようだった。先輩は木刀を磨いており、お嬢は何か考えているのか難しい顔をしている。

「あ、起きたの？」
「おつ、今度はばっちり快眠だ、さんさゆ。しかしそま……平野はよく眠ってるな」

「眠れる時に寝ていられるといつのも、いい戦士の条件だよ。まあ……そろそろ起きてもいいとこよつ」

先輩が平野をゆさぶつて起こすと、平野は寝ぼけた顔で目を覚ました。

「あ……先輩……おあよついざひこまふ……」

「あんたもよく寝てられるわねえ……」

「だつて、これじゃあ……」

「無理もねーよなあ。ろくに進まないし」

バスの窓から外を眺めると、車と人でごつた返していた。警官が住宅街を移動する市民を誘導しながら、やかましく警笛を吹いている。道路は相変わらず車で渋滞しており、ろくに進んでいる気がしない。

「街の外に逃げたほうがいいのに……」

「車だけが脱出の手段じゃないわ」

床主市には洋上に建設された大型の空港がある。空を飛んでいる飛行機の大半はそこから飛び立つたものだろう。人の多い都市部は危険だと判断して、どこかの島や孤立した地域を目指している人間が大勢いる、ということをお嬢は語った。

「沖縄とかか?」

「適切な対処が行われているなら……北海道や九州でも大丈夫なはず。飛行機がむかっているのは大抵そのあたりよ」

「僕らもそういうとこ行きますか?」

「遅すぎるわ。自衛隊やアメリカ軍が多い地域は、例え>奴ら<を制圧できいていても、受け入れに厳しい方針をとり始めているはずよ

>奴ら<に食われた人間は>奴ら<になつて周りの人間を襲い始めるんだ。そう簡単に受け入れられないだろう。

「いざれ世界のあらゆる場所がそうなる。他者との接触が、>奴らへの侵入を意味しかねないとしたら、アンタどうする?」「引きこもります」

「世界中の人間がそう考えたらどうなるかしら?」

疑心暗鬼になり、他者が全て>奴ら>に見えるようになってしまつたら……それはつまり、誰とも関わり合ひをもたなくなることを意味する。生き延びるために必要な最小限のコモニティを維持するだけだ。

「今更だが……お嬢つて本当に頭がよかつたんだな」「なに言つてんのよ……あいつ、もうそういうノリになつてゐるじゃない」

後部座席で生徒たちにむかって演説を続けている紫藤を示すお嬢に、俺は納得した。紫藤は出て行つた小室や宮本を追いかけようともしなかつた。あいつは自分に従わない人間には容赦しない。おそらく、これからも同じように見捨てるだろ。」

「ああ……納得。すげー分かりやすい例だな」「自分で氣づいてるかどうかはわからないけど……こい、たつた一晩でそつなの?」「……追い出しまじょうか?」「よし、やるか」

平野と俺がヤル気まんまんで紫藤に喧嘩を吹つ掛けようとするのを、お嬢が止める。

「やめときなさい。それより、あたしたちがどう生き残るか考えた

ほうがいいわ。信用できる相手と……」

「俺は少なくとも、紫藤より『こっち側』にいる人間は信用できると思うがな。それ以外は論外だ」

つまり お嬢、平野、先輩、静香姉えだ。プラス、小室と宮本だな。学校でもチームを組んで、互いに背中を預け合つて戦つたんだ。

「そ、そうね……あんたにしては上出来よ」

「……仲がいいですねー、上坂君と高城さん」

「な、なに言つてんのよ……」

「お嬢がめずらしく俺をほめてくれた……や、槍でも降るのか？」

「あんたってヤツは……ホントバカね！」

バスは渋滞の中をゆっくりと進んでいき、ようやく住宅街を抜けた。橋へと続く川沿いの道を走り始める。ここをもう少し進むと床主城があり、その先に御別橋がある。橋を越えることができれば、小室たちと約束した東署に行くことができるのだ。

リーダーとなつた紫藤の演説は、まだ続いていた。それは別に構わない。耳障りではあるが、無視していればいいだけの話だ。

「こついう時だからこそ、私たちは藤美学園の者としての誇りを忘れてはならないのです……その意味で、バスを飛び出していった小室君と宮本さんは、みなさんの仲間にふさわしくなかつたのです！」

生き残るため、団結しましょー！」

それでも、今の言葉は力チンときた。仲間のこと悪く言われて、頭にこないワケがない。

「皆で力を合わせ、この難局を切り抜けるのです！」

紫藤の言葉に熱が入り、バスの車内は異様な空気に包まれていく。紫藤の言葉を聞く連中は、紫藤から片時も目を離さず、もはや紫藤のことしか見えていないようだ。

「……マジ、ヤバイわよ

「確かに。あれではまるで新興宗教の勧誘だ」

「まるで、じやなくてまんまその通りよ。話を聞いてる連中を見てみなさい」

後ろにいる生徒たちは、全員が紫藤の言葉に聞き入っていた。それだけならまだしも、その瞳には狂信の色が宿っている。紫藤を絶対のリーダーと崇め、信頼しているといつ何よりの証だつた。

「ありや、洗脳もいいところだ」

「宗教カルト……『紫藤教』の始まりを始まりを目にしてるの、あたしたちは

「道がこの有様では、バスを捨てて逃げるしかないな」

「なんとか御別橋を渡つて東署に向かわねーと……小室と約束したし

例えバスから降りたとしても、橋さえ渡ればひとつでもなる。小室と約束した時間は7時だから、今日は急いでギリギリつとこりだろ。

「あんた、自分の家族は心配じやないの？」

「……俺の家族は大丈夫だ。静香姉えしかいないからよ」

「……あつ、ごめん」

「ははつ、気にすんなお嬢」

「毒島先輩は、『ご家族のほう大丈夫なんですか？』

平野が先輩に聞く。やういえは先輩のお父さんは、有名な剣術家だと言うのを聞いたことがあった。

「心配だが……家族は父一人だし国外の道場にいるよ」

「あ、そうなんですか……」

「それに、私たちはチームだろ？ 仲間のした約束は、私の約束も当然だ。そして父からは、一度した約束は命に代えても守れと教えられた」

一切の迷いなく、そう答える毒島先輩はとても凛々しく見えた。

「みなさん、おうちはどうなの？」

「小室とかと同じ、御別橋の向こうよ」

「ほ、僕も両親は近所にいないんで……あの、みんなと一緒に暮らすでも……」

平野の両親は仕事の関係でずっと海外にいるらしい。親父さんが宝石商を営んでいて……お母さんはファッショニ・デザイナーだったか。俺も初めて聞いた時は驚いた。ヒロゲの主人公かと思つたもんである。

「いつの時代のキャラ設定よそれ！」

「王道だよなー」

「ふふつ……マンガだとパパは外国航路の密船で船長さんとかでしょ

「お祖父ちゃんがそうでした。お祖母ちゃんはヴァイオリニストだったし……あははは」

「か、完璧じゃない……」

何でもないことのように笑う平野を見て、お嬢が打ちのめされたように頭を抱えている。あまりにも道が渋滞して動かないの、静香姉えは運転を止めている。

「で、どうするの？ 私も一緒に行きたいから」「いいの？」「いいの？」

「だつて京君は高城さんたちと行つちゃうだろ？」「……そういうえば、鞠川校医と上坂君はどういう関係なんだ？」「そういうや、先輩には説明してなかつたつすね」

俺は先輩に俺と静香姉えが義理の姉弟であることを教える。先輩は事情を聞いて少し驚いたようだつた。

「そうだつたのか……」

「意外よね～、上坂がこの顔で……あははつ」「人は見かけによらない、といつことかな」

前にも同じようにからかわれた記憶があつたような気がする。お嬢と先輩は笑つていた。

「先輩まで……笑わないでくださいよ

「ふふつ、すまない」

「あと、こんなこと言つちゃいけないんだけど……紫藤先生あんまり好きじゃないの」

真顔で言つ静香姉えの言葉に、みんなで一齊に噴き出した。とにかく、これで方針は定まつた。あとは俺たちでバスを降りて小室たちと合流するだけだ。

運転席のほうで集まつてゐる俺たちを不審に思つた紫藤が話しかけてきた。

「どうしたのですか、皆さん？」一いつ致し協力して……」

「」遠慮するわ、紫藤先生。あしたちにはあしたちの目的がある。修学旅行じゃあるまいし、あんたに付き合う義理なんてないわ！」

「ははは、よく言つたお嬢！」

「ほつ……」

お嬢が紫藤を否定した瞬間に、後部座席にいる連中の口つきが変わつた。殺氣だつたような視線で俺たちを見ている。特に、さつき俺が蹴り飛ばした角田というヤツは今にも殴りかかってきたうな面をしていた。いかにも紫藤教の信者らしい反応だ。

さつきはお嬢に止められたが、あつちから来るなら話は別だ。俺は木刀をいつでも抜けるように構えておく。

「あなたたちが決めたのならどうぞ」。なにせ日本は自由の国ですからね……

「自由の国つて、アメリカじゃなかつたつけ？」

「上坂君、本当に君は……人の話の腰を折るのが好きですね！」

口の端を引きつらせながら、額に青筋を浮かべる紫藤を煽るように俺は減らす口を叩いて返す。

「しょうがないでしょ？ 俺、紫藤先生が嫌いなんで」

「口の減らない生徒だ……とにかく、あなたは困りますね鞠川先生。現状で医師を失うのはマイナスが大きすぎます。どうです、残つてもらえませんか？」ちらにも貴女を頼りにする生徒たちが……

紫藤が嫌な微笑みを浮かべながら運転席のほうへゆっくり歩みよつてくる。

パシュン！

紫藤の頬を掠めて釘が飛ぶ。外れた釘は後部座席へと突き刺さり、紫藤の頬から血が一筋流れ出した。

「ひ、平野君……？」

紫藤は傷ついた頬を押さえながら、平野を見ている。この距離で紫藤の頭に風穴が開いていないのはむしろ不自然だった。おそらくは平野が威嚇として撃つたのだ。

「外れたわけじゃない……外したんだ」

「き、君はそんな乱暴な生徒では……」

「俺が学校で何人片づけたと思ってるんです？　だいたい……お前は前から俺のことバカにしてやがったじゃねーか！　我慢してきた……俺はずつと我慢してきた。普通に生きていたかったから、ずっと我慢してきたんだ！」

平野は、胸の内に秘めていたものを吐き出すように吼える。

俺が平野と出会う前のことだ。平野はいつもひとりだった。まわりにいるのは、こいつをイジメる肩ばかりで……当然、仲良くなつた俺にも矛先が向いたが、全員まとめて返り討ちにした。反逆の姿勢を見せたことで、表立つて平野をイジめる連中はいなくなつた。

「救つてくれた友達がいたから……俺は耐えていたんだ！　でも、もう耐える必要はない！　普通なんて何の意味もない！　だから……俺は殺せる。生きている奴だつて殺せる……！」

「ひ、平野君……そ、そんなことは……」

俺はその瞬間、平野が何か覚悟を決めたように感じた。こいつになら、背中を預けられる……そう思った。平野の迫力に気圧され、紫藤が後ずさつしていく。

「毒島先輩、先に降りてください。ぼくらが後衛をつとめます！」

「男子だな……平野君！」

先輩が得物を手にバスを降りていった。先輩に続いてお嬢と静香姉えが荷物を持ってバスを降りていく。

これで、車内に残っている仲間は、俺と平野だけになった。平野は釘打ち機を構えたまま、紫藤をにらみ続けている。紫藤は死ぬかもしれないという恐怖で震えていた。これ以上邪魔する気はないようだ。

「上坂……どうする？」

「一発くらい殴るつもりだつたんだが、気が変わった。コイツにや殴る価値もねーよ

「……そうだね」

「よーし、決まりだ。さつさと行こうぜ、コーダー！」

「ああ！」

「じゃあな、紫藤先生」

俺は吐き捨てながら外に出ると、思い切りドアを閉めてバスから降りた。

バスから降りた俺たちは、ここから近い御別橋へとむかうことになった。歩いてもそれほど距離はないから、遅くとも日が暮れるまでには橋を越えられるだろう。

「それにしても平野、さつきのは痺れたぜー

「あはは……頭に血が上っちゃって……」

「はははっ、俺なんていつもそつだから気にすんなよ…」

「アンタはもうちょっと頭使いなさい……」

「細けえこたあいいんだよ…」

そんなやり取りをしている間に、俺たちは御別橋の前に到着した。道は相変わらず渋滞している……どうやら普通の渋滞ではなく、警察の手によつて向こうへ渡る道が完全に封鎖されてしまつてゐるようだ。別の橋を探すなら、ここから川沿いに歩いて、城の脇を通りていけば床主大橋のほうへ抜けられるが……。

「……つて、あれ……？」

どうしたものかと思案している最中、道の向こうからこっちに来る男女には見覚えがあつた。あの特徴的な2本の触覚は、宮本か。小室のほうはどこで手に入れたのか、大型のバイクを押して歩いていゝ。

「先生っ！」

「あらあら、宮本さん。小室君も…」

先に気付いた宮本がこつちに走つてきて、笑顔で静香姉えの胸に飛び込んだ。静香姉えは宮本の頭を撫でながら、嬉しそうにしている。

小室も宮本も、学校で使つていた武器は失つてゐるもの、ケガなどはしていないようだつた。

「無事でなりよりだ、小室君」

「毒島先輩も無事でなによりです。上坂たちも来ててくれたのか」

「約束したからな……そういうや、どうしたんだよそのバイク？」

「ああ、途中で拾つたんだ」

「……小室つて、免許持つてたっけ？」

「無免許運転は、高校生の特権！」

「同感だな！」

はつはつは、と小室と俺は笑つた。お嬢がそんな俺たちを呆れた
よつた表情で見ている。

「つたく……あんただち少しほは緊張感を持ちなさい。このままじや
向こう岸に渡れないんだから」

「他の橋はどうだつたんだ？」

「どにもダメだつたよ、ここと同じよつに封鎖されてる」

護岸工事をしていない上流から渡ろつこも、服を着たまま川を泳
いで渡る……とこつワケにもいがず、俺たちはどう進むべきか悩む
ことになつた。小室たちと上手く合流できたまではよかつたが、手
詰まりである。そんな空氣の中で、静香姉えが提案した。

「あの……今日はもうお休みにしたほうがいいと思つた。もうすぐ
暗くなるし……暗くなつて出くわしたら、さすがに京君たちでも大
変でしょ」

「夜に戦闘は確かに勘弁だな……」

「それはそうだけど……どこで朝までの時間を潰すの？」

「あのね、使えるお部屋があるの。歩いてすぐの所
「カレシの部屋？」

「し、静香姉え……いつの間に?...」

突然に降つてきた身に覚えのない彼氏疑惑に、静香姉えが恥ずか
しそうに手を振つて否定する。

「ち、ちがうわよー 女の子のお友達の部屋だけど……つて、京君

は知ってるでしょ！

「南さんのところ？ そりいえばこの近くだつたつけな

南 リカ（みなみ りか）さんは静香姉えの友達だ。俺も何度か会つたことがある。小麦色の肌が特徴的な美女で、県警のS A T（警察特殊部隊）に所属しており、射撃の腕は全国でもトップクラスの凄腕だそうだ。毒島先輩といい、どうしてこう俺の知り合いの女性はやたらとハイスペックなのが多いのか。

ここに川沿いに建つてある豪華なマンションの一室に部屋を持っているのだが、仕事の忙しさから家を留守にすることが多いので静香姉えが力ギを預かっているのだ。時々メンテに行く関係で俺も場所は知つている。

「知り合いなの、上坂？」

「ああ、S A T所属の人だ。仕事が忙しいから静香姉えが力ギを預かってんだよ。ここに川沿いに建つてある豪華なマンションだから見晴らしもいい。休むには十分な場所だと思つぜ」

「へえ、なんだ」

「たしかに、今日はもうくたくた……電気が通つてゐるうちにシャワーを浴びたいわ」

みんな学校からはずつと戦い続けているから疲れも溜まつていた。
>奴らの返り血で少なからず服も汚れている。男連中はまだ大丈夫だろうが、女性陣としては身体を清めておきたいところだろう。
髪をかきあげながらいつお嬢を見て、風呂に入る姿を想像した俺の視線は自然とお嬢の制服を窮屈そうに押し上げる胸にいつてしまふ。お嬢は着やせするタイプだ。俺は笑顔で親指をグツと立てる。

「風呂、いいね！ 風呂は人類の生み出した文化の極みだろ！」

「だったらまづはエロい目で見るのをやめなさい、このスケベッ！」

俺の視線に気づいたお嬢が怒りのキックを放つ。脇腹にクリーンヒットだ。

「い、いい蹴りだぜお嬢……」

「うつせじH口脳筋！」

「今日見た中で一番、上坂がダメージを受けてこらみつて見えるよ

……」

げしげしどお嬢に足蹴にされる俺を見て、小室が苦笑している。俺は話題を変えることにした。

「いてて……あ、コータは喜ぶかもな、武器もあつたぞ。俺は使えねーからすっかり忘れてたが……」「まじで！？」

「あ、おひ……目が輝いてんなお前

「早くこいひつ！」

バイクを持つてる小室に、静香姉えを乗せてもらつて先にマンションの様子を見に行つてもひりひりとした。俺は残りのみんなを連れて後から合流する。

少し歩いて、南さん家のマンションの前に到着した。建築からそれほど経っていないメゾネットタイプのマンションは、白を基調とした綺麗な外観をしている。

マンションのまわりはわりと高い塀で囲まれていた。他の住民の姿はなく、窓が空きっぱなしの部屋もあるくらいだ。マンションのそばにある駐車場には、戦車の装甲車が止まっている。

「ハンヴィーだ！ それも軍用モデルだよこれー！」

「ね、戦車みたいでしょ？」

「へ奴らへは塀を越えられないだらうから、安心して眠ることまで
あそぶね」

富本の言葉を聞いて、俺はびとなく不安を感じていた。イヤな
方面には異常な中率を発揮してしまつ直感が反応している。

「……だといけじな」

「なあ上坂、何か武器ないか？ 拳銃は手に入れたけど当たる伝信
がないんだ」

「だよな、慣れてない武器じゃ たすがに……」

そう言つて小室は、制服のベルトに差していた黒光りする拳銃を
見せる。俺たちと別行動している間にも色々あつたんだろうな。何
があつたのか詳しく聞く気はないが。

「え、銃！？」

「落ち着け、コータ

「あとで弄らせてやるよ、ともかく今は……」

『おおおおおおおおおおおお』

へ奴らの低いつめき声がこだまする。マンションの塀の中にも多
数のへ奴らがいるのが見えた。俺たちの声に反応して出てきやが
つたのか。

「……ああ、休む前に『掃除』しなきやな。小室、これ使え」

俺は持つてた木刀を一本、小室に手渡した。小室は受け取つた木
刀の重さに少し驚いているようだつた。

「結構重いんだなコレ……」

「お互いにカバーし合いつゝを許されるな」

『はい』

先輩の言葉に返事をしながら、俺たちはそれぞれの武器を構える。槍をなくした宮本は途中で拾つたらしい警棒を構えている。平野の釘も残り少ない。近接戦のできる俺たちが奮戦するべきだろ。

「無茶はするなよ……行くぞー。」

「おひよー。」

俺と小室を先頭に、マンションの門を開けて中へと踏み込んだ。庭、階段、通路。至るところにいる奴らを潰しながら進む。俺たちは攻めに出ていた。奴らから逃げる為ではなく、一時の居場所を得る為に奴らと戦っている。

階段の上にいる奴らの前まで踏み込んで、俺は木刀を下から掬い上げるように跳ね上げた。木刀は顎を打ち抜き、奴らを沈黙させる。

奴らを倒すこと、俺は喜びを感じていた。最初に戦つた時は、恐怖すら感じていたというのに……。

お互いをカバーしながら進む俺たちは、何もなかつた。最上階まで制圧し、奴らの気配がなくなつたのを確認する。

俺たちはマンションにいた奴らを片付けた。オレンジ色だった空は、ほとんど紺色に染まつてしまつてゐる。

「よし……外にいるのはこれで全部だな。僕たちは先に部屋を見て

くるよ」

「そーだな。じゃ、門閉めてくる

俺はマンションの門のロックをかけようと手を伸ばす。その時、俺は妙な違和感を覚えた。誰かに見られてるような気がしたのであ

る。周囲を見回すが、奴らの姿はない。だいたい、アイツらに視力はないはずだ。俺が自分で身体を張つて証明したことだ。

「どうしたの、上坂？」

俺の様子を見て、お嬢が心配そうにしている……。むやみに警戒させても仕方ない。俺は何でもなにように笑つてお嬢に話しかけた。

「いやー、暴れたら結構疲れちまつてさ。田も暮れてきたし、さつあと部屋ん中入ろうぜ」

「そうね……これでやっと、ゆっくり休めるわ

「そうだな。風呂風呂~」

「言つとくけど、覗いたら……殺すわよ?」

「HANAHANA、ソンナコトシマヤンコ?」

「急にカタコトになつてんじゃなー!」

「痛えー!」

門にカギをかけた俺は、お嬢に蹴られながら、もう一度だけ後ろを振り返つた……何もない。いや、気のせいならそれでいい。

そして、終わつてしまつた世界で、初めての夜が訪れる。

第6話「再会」（後書き）

はい。さくやく南さんのマンショングループまで到着です。

……ここまで来るのに6話、先は長いですね。

時系列は基本的にマンガのほうを参考にさせてもらいました。

アニメ版だとだいぶ違うんですね……。

ご感想など、お待ちしております。それでは。

第7話「ひとひの休憩を」（前書き）

投稿が遅れて申し訳ありません。

前回の続きになります。

第7話「ひとひとの休息を」

南さんの部屋に着いた俺は、まずは女性陣に風呂に入るように勧めた。みんな戦いつぱなしなせいで返り血がひどいし、いい加減服を着替えたいだろ？

「野郎は後でいいだろ、なあ小室、コーダ？」

「そうだな、別に僕は構わないけど……」

「うん」

2人の了承を得た俺はポンと、手を叩きながら思い付きを口にする。

「そうだ。別々に入つても時間がかかるて面倒だし、いつそみんなで入っちゃまえば？」

「では、やつをせてもらおうか……のぞかないでくれよ？」

毒島先輩は冗談っぽく言つて笑つ。

「はは、そりやあ保証できなーっす。先輩のが揉めるなら命をかける価値はありますからね」

「……や、君は時々正直すぎるだ」

ストレートに気持ちを言つてみると、先輩が頬を僅かに染めて恥じらつてゐる。お嬢がにこりと笑つて聞いてきた。

「ねえ上坂、右足と左足どっちがいい？」

「仕方ねえだろ、それが男の子なんだよ……」

「かつこよく言つて誤魔化すなっ！」

もうちょっとと反応を見てみたかったが、お嬢が本気でキレそなうのでこれ以上は自重することにした。リビングは着替えに使うらしいで、俺たちはそそくさと階段を上がって2階の部屋に向かった。リビングからは階段で2階へと向かうことができる。

2階の部屋は、南さんの私室だった。大きなベッドに薄型のテレビなど、飾り気はないがどこか高級感のある部屋である。ただし壁際に女性の部屋には似つかわしくない鉄製のロッカーが設置されており、それだけが明らかに浮いていた。武器があるとすれば、この中しかないだろう。でも、ここのかぎは持つてないんだよなあ……ぶつ壊した方が早いか。

俺は持ってきた荷物の中からバールを取り出す。ロッカーには扉が2つあり、先に右側を開けることにした。

「よつ、と！」

ロッカーの隙間にバールの先をぶち込んで無理やり力任せにロッカーをこじ開けた。

ガギツ！

鈍い音を立てて開いたロッカーの中には外国語で文字の書かれた小さな箱が大量に収納されていた。コーダが箱の中身を調べると、銃の弾丸がみつちりと入っていた。あとは双眼鏡や、銃のパーツのようなものがある。コーダが弾薬を1つ1つ調べて何があるか見ていく。やたら楽しそうだ。

「弾薬がこんなにあるなんて……これだけあれば……」

盗賊じみた行為に勤しむ俺たちとは対照的に、階下から聞こえて

くる女性陣は黄色い声を上げながら、仲良く入浴を楽しんでいた。「あれだけ高城に蹴られてもまだ行こうとするお前は本当にすごいよ……僕はまだ死にたくない」

「でもよう、小室。好きな女の子の裸を見たいと思うのは男として当然の欲求だぜ。富本の……見たくねえのか？」

「そ、そりゃあ見たいけど……」

「今からでものぞきに行くかい？ 僕あ同士をいつでも歓迎するぜ」「あれだけ高城に蹴られてもまだ行こうとするお前は本当にすごいよ……僕はまだ死にたくない」

「小室の奴は顔を赤くしながら悩んでいる様子だ。ははっ、初々しい奴だなあ。

「なんせ、うちのガツノの美少女、美女が揃ってる。命の張るくらいの価値はあるだろうよ……まあ、あっちのお宝映像も見たいところだが、今はこっちの宝箱に集中しようつかね。

「……ふんっ！」

俺は左側のロッカーの隙間にバールを差し込み、勢いよくこじ開ける。ロッカーの中に入っていた黒光りする『お宝』を見て、俺は思わず笑みを浮かべた。

「見ろよ2人とも。大当たりだ」

ロッカーの中に入っていたのは、黒光りする銃器の数々だった。ライフルにショットガンにクロスボウに……とにかく各種の銃器が色々とある。どこからこれだけのモノを揃えたんだろうかと思いたくなるほどだ。

「一タが田を輝かせて武器を手に取る。嬉しそうに銃を手に取つては、解説をし始めるが……『ごめん一タ。説明が長くて覚えきれなかつたよ。

「へえ……」

小室が田の前にあつたショットガンに手を伸ばす。そしてガチャリとバーを引き、何気なく銃を一タに向けた。

「た、例え弾丸^{シェル}が入つていなくても、絶対に人へ銃口を向けるな！ 向けていいのは……」

「へ奴らくだけ……か」

「……それで済みやあいいけどな」

こうして、銃を手に入れた俺たちは、一タに教えてもらいながらマガジンに弾を詰め始めた。

「さすが、一タは実銃撃つただけあつて教えが的確だな、つと……」

「本物撃つたことあるのかよ！？」

「前にアメリカに行つた時にね」

民間軍事会社……ブラックウォーターのインストラクターに1ヶ月教えてもらつたらしい。その人はデルタフォースの曹長だつていふ話だ。本当にそつち方面は完璧だな、と小室が感心している。

「けど……こんなに銃を持つてて大丈夫なのか？」

「基本的には違法じゃないよ」

「一タ曰く、ここにある銃をパートを別々に買う分には違法では

なく、その後で組み合わせたら違法だそつだ。その辺の法律の抜け道的なものはどこにでもあるものだなあ、と思つた。

「警官ならなんでもありかよ……」

「まあ、いいじゃねーか。おかげでこつして武器も手に入ったんだし

「普通の人じゃないのは確かだね」

本来ならば、独身の警官つていうのは寮に住まなければならぬらしい。にも関わらず、豪華な部屋に住んでるのは何か理由があるのだろう。

「実家か付き合つてる男が金持ちなのか、もしくは汚職でもしているのか……その辺りはどうな上坂？」

「んー、良い人なのは間違いないんだが……とりあえず、すいに美人だぞ」

「まずはそこなんだな……」

俺の答えに小室が苦笑している。

「おかげで静香姉えと一緒にいるとナンパ野郎が絶えなくてなあ……ありや面倒だつた」

まあ、遊びに行つたりした時に色々あつたのだ。その話は機会があれば話そう。

キヤツ、キヤツ。

風呂からの楽しそうな声は相変わらずだつた。騒ぎすぎな気もするが、楽しそうで何よりだ。小室はロッカーで発見した双眼鏡でベランダから外を眺めている。コーナーは心配そうにしているが……。

「さすがに騒ぎすぎかも……」

「大丈夫だろ。>奴らくは音に反応するけど……橋のほうが騒がしいからな」

「にしても……すげえことになつてんなー」

太陽が沈んで、真っ暗な空が広がっている。外はすっかり夜の色に染まつていたが、御別橋のほうはライトで煌々と照らされて昼間のように明るい。封鎖された橋に人が集まつてゐるせいもあってこの辺りで一番騒がしい場所だらう。俺は詳しい情報を知るためにテレビの電源を入れた。テレビ中継では、ちょうど御別橋付近の映像が映し出されているところだつた。

『床主市西部の封鎖はなおも継続されておりますが、日本全土のみならず全世界で殺人病の蔓延するなか、その意味があるのかどうかについて批難が噴出しています』

リポーターの言つ殺人病……といつのは>奴らくのことだらうか。言い得て妙な呼称だつた。

『警察の横暴を許すなー！』

『ゆるすなあああ！』

『ただいま、警察などによる橋の封鎖に対する抗議を目的とした団体らしき人々がシユフレールを叫びはじめました！』

リポーターの後ろに大声を張り上げながら警察に抗議する団体の姿が移つてゐる。それぞれが拡声器やプラカードなどを持ち、声高に主張を繰り返している。

『われわれはあ、政府とアメリカの共同開発した生物兵器による殺

人病の蔓延について、徹底的に糾弾するうー』

警察に対しても抗議をする団体は『殺人病』というアメリカが極秘に開発していたウイルスが原因でこのような事態になつたと声高に主張しているようだ。

「殺人病、ねえ……」

「正氣かよ！ 死体が動くなんて科学的に証明できるはずがないのに……」

とはいえる……まんざらありえない話でもないんだよな。だいたい、死体が動きまわっている時点で科学的じゃない。俺たちはそれ以外にも、トカゲじみた化物やカギ爪を持った連中……そういう常識を越えた化物たちとも戦ってきたのだから。

空気感染だとすれば俺たちが無事なはずはない。奴らに噛まれたら感染するということは血液感染だが、少なからず奴らへの返り血を浴びてもなお大丈夫な俺たちを見ると、他にも何か条件があるのだろうか。

「連中、左翼サヨだよね？ 設定マニアにもほどがあるよ」

「確かに左翼は設定マニアで悪い病気だ……極右翼の人種差別主義者と同じくらいに」

小室は複雑そうな表情で語っている。ここがこういう事を言つのは珍しいな。

「へえ、意外だぜ。小室がそういうこと言つなんてよ」

「ああ、お袋の同僚に今でも左翼活動やつてるのがいるんだよ……それであつとな」

「お袋さんの職業は？」

「小学校の先生だよ。川向こうの御別小学校で1年生のクラスを持つてる……生徒がいる限り逃げてないだろうな。そういう人だよ」
パンっ、パン！
…………

遠く、窓の外から拳銃を発砲する音が聞こえてくる。テレビを見ると、警察が>奴ら^クと化した市民に発砲を開始したらしい。だが、中にはまだ噛まれていない人間もいた。1人の母親が娘を噛まれた娘を抱いて助けを求めている。

『やめてえっ、撃たないでっ！　私もこの子もまだ生きてるー。』

母親はともかく……娘のほうはもう手遅れだろう。事實を裏付けるように、母親に抱かれてぐつたりしていた娘が母親の首筋を噛みちぎった。我が子によつて食われた母親はじきに>奴ら^クと化す。胸が軋む。家族を失う光景を目の前で見せられて嫌でも昔を思い出してしまうからだ。

抗議団体は、正義を得たといわんばかりに暴力を振りかざす警察を猛烈に非難し始める。中継のカメラが、警察の現場責任者らしきおっさんが、最前列で抗議する男の元へ歩み寄つていくのを映し出した。

『ただちに立ち去りなさい。ここにいてはあなたたちも危険だ』

自分の熱弁に酔つた団体の男はまるで意に介さない。警察官は最後の警告をするが、それさえ無視して男は批難を続ける。

『詭弁だ！　おまえたちはあ、政府とアメリカの陰謀を隠す為にい
…………
『もう一度言う。政府と県警は最後の命令で治安維持のために必要な全ての手段を取れと命じてきた。法律的には怪しいが……命令は

命令だ』

パンツ！

抗議をしていた男は、額を拳銃によつてぶち抜かれた。倒れる男と同時に悲鳴が上がり……テレビは放送を中断した。これ以上の情報は得られそうにないな。小室たちを見ると、言葉を失っていた。少なからず動搖しているみたいだ。

「どうにもならなくなってる、すぐに動いたほうが……」「

「小室、暗い中で、奴らくとやりあう気かよ？ 身体が持たねえぞ」「だね。明るくなつてからのほうが……」

その時、話に集中していた俺たちは、背後からこつちに近づいてくる人影に気づいていなかつた。俺はいきなり暗闇から伸びてきた手に頭を掴まれてしまつた。

「ぬあ……！？」

「きょ、うくわ～」

暗闇から姿を現したのは、静香姉えだつた。抱きついてくるせいで、湯上りで若干湿つた長い髪が肌に触れる。シャンプーの香りになんか酒臭いものが混じつているのに気がついた。良く見ると風呂上りにしても顔が赤いよつな……まさか。

「……静香姉え、怒らないから正直に話せよ？ 酒飲んだか？」

「はーい、のんじやいましたあ～！」

「おい誰だ静香姉えに酒飲ましたの！ この人あんま酒強くねえんだぞ！」

静香姉えは、酒に酔つ 扱うと「うして誰彼構わぬ絡んでくるのだ。ぶつちやけると、酒癖がよろしくない。後ろから抱きつかれてるからバスタオル越しに温かくて柔らかいものがああー。ちくしょうでつかいくせにやわらけえなあ！ むにゅむにゅだよー。俺だけじゃなく、小室や平野にも抱きついてキスやら何やー。ああ、どんどん被害が拡大していく。思春期の男子にとつては刺激が強すぎるだろ。乱れまくりの姉を見て、弟としては複雑な気分だつた。

「こひ、静香姉え……でかい声は出すなつて……」「えー やだー。しづかお外こわいからすつといじるのー

まるで小さな子供のようじぶーたれてだだをこねる静香姉え。あんた今年で27歳だわー。」

「い・い・か・ら・寝ろー 弟命令だッ！」「じゃあ、おんぶー」「はいはい……」

身体だけ大きな子供と化した静香姉えに背を向けて、首に手をまわさせる。そんなに重いわけじゃないが……疲れるな。酔つ払いの相手はいつだつて面倒だ。俺は静香姉えのふともとに手を伸ばして支える。びくんと反応した静香音姉えが甘い声を上げる。

「ひやん。お尻に触つてるー…………きょひくんのえつちー」

「我慢しろ、この酔つ払いめ

「はーー」

「あはは、慣れてるなあ……上坂

「何やつてんのよ孝つたら……静香先生見てテレテレしちゃつて……」

「……」

「れ、麗……？」

階段を上がってきた富本が、小室を見て怒っていた。発育の良い身体を薄手のキャミソールが包み、下半身はパンツ一枚つて……お前ら一応男がいることを忘れてねえか？ 田の保養になるからいいけどよ。

小室を見る富本の目がどこか据わつてこむように見える。

「おい富本……まさかお前も酒を……」「なわけないでしょ」

「だ、だよな……お前がまともでよかつ……」

「あ～、孝と上坂君が3人ずついるよ～、増えたあ～」「よし、お前がダメなのはよーく分かった」

まつたく、足下がふらついているじゃねえか。どんだけ……飲んで忘れないことがあつたんだよ。

「……小室、お前は富本の相手してやれ。俺は静香姉えを下に寝かせてくるからよ」

「ああ、わかつたよ」

「こらー、孝ー、聞いてるのー？」

酔つた富本が小室に絡んでいる……富本と付き合つてが一番長いのは小室だし、何とかしてくれるだらつ。

「コーダ、悪いけど見張りよろしくな」「あ、う、うん……」

静香姉えに過激なスキンシップを食らつたコーダがショックで軽くぶらつ正在するのが分かる。すまん……コーダ。

俺は静香姉えを担いでリビングの階段を下りる。1階のリビングの絨毯の上に静香姉えを下ろして寝かせておいた。広々としたリビングはみんなで寝てもまだ余裕がありそうなくらいだつた。

まあ、この時期だから風邪をひくのは心配しなくて大丈夫だろう。メガネのないお嬢が俺の後ろからひょっこりと顔を出した。

「上坂…… じんなとこで何やつてんの、姉に夜這い?」

「人聞きの悪いことを言つたな。酔つ払いを運んできたんだよ」

お嬢はタンクトップにホットパンツか…… これまたラフ極まりない格好だ。つたく…… どいつもこいつも。洗濯してのせいで着るものがねえのかもしねえが、若い女が肌を見せすぎだ。襲われても文句は言えねえぞ。

「こんな状況だもの…… お酒で気が紛れるなら安いものでしょ?」

「……まあ、確かに」

世界は変わつてしまつた。今日だけで普通に一生分以上の人気が死ぬところを見た。下手をすれば大切なものを無くしたりしてるんだから、酒でも飲まなきゃやつてらんねえ、か。そりや何もかも忘れたいつて思うよな、人間なら。

「ねえ…… 上坂」

お嬢が俺の耳元で囁く。やたら距離が近いせいで風呂上りで上気した肌の温度さえ感じられる。お嬢がいきなり抱きついてきた。

「んな…… ー?」

さつきの静香姉えと同じ状況だが相手が違う。お嬢の小柄な身体

に似合わないほどに大きく発育した双つの柔らかいものが背中で潰れて自己主張している。熱い吐息が首筋にかかりてゾクゾクした。

「あんたの背中、おつきこね……やつぱ男の子なんだ」「ま、まあ……それなりに鍛えてるしな」

待て待て……これは本当にお嬢か、キャラ違くね？ 偽物か！？ やばい、混乱してこのせいで思考がまとまらない。やつぱり酔つてるとお嬢も。

「お嬢……俺まだ風呂に入つてないからあんまくつつくと汚れちまうぞ」

「ほんとだ、汗臭い……」

「だろ？ やつさと離れて……」

「上坂はイヤ？ あたしにくつつかれてるの」

お嬢が不安そうに聞いてくる。アルコールのせいで潤んだ瞳が可愛さに拍車をかける。

「イヤなわけあるか。嬉しいに決まってるだろつが」

俺も酔いがうつったか、口はいつも以上に正直だった。可愛い女子に抱きつかれて嫌がるのはガチホモだけだ。

「……このままだと理性がぶつ飛びそうなんだよ。今も正直危ない。お嬢が可愛いから悪いんだ」

「ふふつ……なにそれー」

普段のシンシンしたお嬢とは違つて、まるで子供のように甘えてくる。お嬢の性格が変わっているようと思えるのは、俺が本当の高

城 沙耶を知らないからだらうか。

「あのね、上坂……ありがとね、守ってくれて」

それは、予想もしなかつた言葉だつた。素直な感謝の気持ち。俺は胸の中に温かい感情が生まれるのを感じた。

「約束しただろ。死なせねえし守るつて」

「うん……ありがと……」

お嬢はそのまま、静かに寝息を立て始めた。やれやれ……これだから酔っ払いに付き合つのは大変だぜ。そう思つた俺の顔には自然と笑みがこぼれていた。

俺はお嬢をゆっくりとリビングのソファに寝かせてから、リビングをあとにした。

喉が渴いたので水でも飲もうかとキッチンにむかうと、そこには料理を作つてゐる先輩がいた。鍋からは湯気が立ち上つており、どうやら煮物を作つてゐるらしく、醤油の良い香りが辺りに漂つている。

「ああ、上坂君か。もうすぐ夜食ができるんだが、明日の弁当もな……どうかしたか？」

俺は入り口でアホ面をさらして固まつてゐた。先輩がキッチンに立つて料理を作つてゐるのはいい、驚いたのは服装のせいだ。みんな薄着だつたから先輩もそうだらうとは思つたが……。

先輩は素肌の上に白のエプロンを直接着てゐる、いわゆる裸エプロンである。下着は黒。面積が小さいで、きゅつと締まつた綺麗なお尻から太ももにかけてのラインがほとんど見えてしまつた。肌色面積も多く、男子高校生には扇情的に過ぎる光景だつた。

「せ、先輩…… その格好……」

「は、はしたなさすぎただろうか……？ 『合』のサイズのものがなくて、服が乾くまでの『ごまかしなのだが……』」

ちょっと恥ずかしそうに服をつまむ先輩、胸の谷間が強調される。いや、実にけしからん格好です。男のロマンが詰まつていて、とても良い。

「戦える格好じゃないから危ないかなーと……」

「君がいるし、平野君たちが警戒をしてくれている……評価すべき男には絶対の信頼を『える』ことにしているのだ私は」

そう言つて優しく微笑む先輩は、ひどく魅力的だった。俺はそれ以上に仲間として、信頼してもらえたことが嬉しく思えた。

「ありがとうございます。先輩にそう言つてもらえて嬉しいです」

「友人には冴子、と呼んでほしいよ」

「……じゃ、冴子さんで。なんか手伝いましょうか？ 俺こう見て家事は結構……」

わんつ、わんつ！

犬の吼える声。それに呼応するように、外がやけに騒がしくなつたように感じた。俺と先輩は急いで2階のベランダへとむかつた。

「ヤバイよ……」

平野が眼下の光景を見てそう呟いた。先に来ていた小室も同じようになってしまっている。ベランダの下には、堀の向こうで大量の「奴ら

くが、光に群がる虫のようになつてきていた。夜は人間の時間じゃない。どうやら、本当の地獄は、まだ始まつてすらいなかつたらしい。

夜が深まり、最初の夜は本番を迎える。

第7話「ひとりの休憩」（後書き）

いつも狂犬です。

読んで頂いてありがとうございます。

最近、ユニークが2000を突破しました。これも作品を読んでくださるみなさまのおかげです。お気に入りの登録件数が増えるたびにヒヤッホウ！ と舞い踊っています。めざせ100件登録！ それにも……恋愛系のイベントって書くの難しいですね。どこまでやろうかと迷っています。

「」意見、「」感想ありましたらよろしくお願ひします。

第8話「衝動」

夜になつて活発に、奴らくは動き始めた。映画にしろ漫画にしろ化物の類が夜のほうが活動的なお約束だが……。ランダから見える光景は惨状という他に言いようがなかつた。

ある者は手にしていたショットガンを奴らに撃ち、戦つていたが奴らに弾丸のリロードに気を取られている間に食われた。またある者は逃げながら家のドアへとたどり着くが、中へ入る前に奴らに追いつかれて食われた。それぞれに違えど、誰もが生きるために動いている。ただし、その中で生き残れるのは何人なのだろうか。

その意味で言えば、俺たちは幸運だったのだろう。今は勝ち取つた居場所があり、少なくともここに籠つていれば安全なのである。凄惨な光景を目にした俺以外の3人も凄惨な光景に表情を硬くしていた。

「畜生、ひどすぎる……！」

「小室、撃つてどうするの？」

今にも外に飛び出していこうとする小室にコータが聞いた。問い合わせは単純だつた。

「決まつてんだろ、ここから 奴ら を撃つて……」

「撃つたら 奴ら が反応する。銃声はでかいし、隠しようがねえからな……」

冴子さんが部屋の明かりを消す。夜闇を払つていた電気の光が消え失せて、部屋が本来あるべき暗闇へと包まれた。冴子さんは諭すよみに俺たちに告げる。

「そうだ。そして……生者は光と我々の姿を目にし群がつてくる」

今から外に飛び出して戦う、あるいはここから銃を使って倒すにしても、全ての人間を救えるわけじゃない。俺たちは英雄じゃないくてただの人間なのだから。学校からここまで何人も死ぬヤツを見てきたんだから、そんなことは分かっている。それでも、抗うこともできない自分に苛立ちを覚える。気がつけば木刀を折れそうな程に強く握りしめていた自分がいた。

「……私だって、君の気持ちが分からぬわけじゃないよ。それでも、慣れておかなくてはならない」

そんなことはわかっているつもりだった。外にいる 奴ら は自分の力だけで生き残らなきやならない。俺たちがそうしてきたように。冴子さんは、決して臆病や非情な気持ちから言っているわけではない。友人として、仲間として俺たちを心配しているからこそ、こうして忠告してくれているのだ。

「はい……」

冴子さんの気持ちが伝わったのか、どうやら小室は落ち着いてくれたようだ。

それでも俺は、胸のざわつきが消えなかつた。この地獄のような光景を見ていられなかつたのだろうか……それが自分でもよく分からぬ。コーダが心配そうに聞いてくる。

「京也、顔色悪いけど……大丈夫?」
「わりい、コーダ……見張り頼むわ」

木刀を手にしたまま俺はふらふらとした足取りで階段を下りてい

く。なんだ、この血が滾るような感覚は……？

俺は明らかに興奮していた、まるで酒でも飲みすぎたみたいに熱っぽく、頭が上手くまわらない。俺の中で強い衝動が頭を支配しつつあった。

戦いたい。血を浴びながら 奴ら を殺して、ひたすらに暴れたい、壊したい。

頭の中にそんな衝動が突き動かされている。破壊的な衝動は収まることではなく、ただ強くなつていくばかりだった。喉の渴きのようにつきまとい、俺を振り動かす。俺の脚は、ゆっくりと玄関に向かっていた。明らかにおかしいとわかついていても、俺は止めることができなかつたのである……。

「アー……」
「……死ね」

いつの間にか俺は、門を乗り越えて道路で暴れていた。振るつた木刀が 奴ら を肉の塊に変えていく。2本の木刀を軽々と振るいながら 奴ら を刈り殺していく。まるで血に飢えた通り魔のようだつた。倒すたびに 奴ら の返り血が身体に降りかかっていく。木刀はもはや真っ赤に染まつてしまっていた。

俺が外で暴れているこちに気付いた小室たちが、ナニかを叫んでいる。

「上坂つ、何やつてんだよ！？」
「危険だよ、早く戻つて！」

俺がこいつら程度に負けるはずがねえだろうが……現に今だつて、こうして戦えているだろ。本当にこいつらは鈍い。学校であれだけ

苦戦したのが嘘のようだった。小室たちの声に振り返った 奴らを木刀で殴り飛ばす。

「……足りねえ」

「……ウー」

グチヤア！

地面に倒れた 奴ら の頭をさらに足で踏みつけて潰した。肉を潰す気持ちの悪い感触に、嫌悪するはずの感情は湧いてこない。あるのは興奮と空腹にも似た感覚だけだった。こんなもんじゃまだ満たされない……もつと、もつとだ。

俺は道路を幽鬼の如くさまよいながら 奴ら を屠り続ける。木刀を一振りする度に 奴ら が倒れていくのは爽快だった。

「お願いです、入れてください、子連れで逃げられないんです」

「来るな、よそに行ってくれ！」

「ん……？」

民家の前を通りががつた俺は、小学生くらいの女の子を連れた父親らしき男が民家のドアを叩いている場面に出くわした。子供を連れられた状態で、武器も特に大したものを持っていないワケでもないのにここまで逃げてこれたのは大したものだった。

だが、やつと逃げ込んだのにも関わらず、家の人の返答は冷たかつた。自分たちの身を考えれば、安易に人を迎えることはできないのだろう。それでも少女の父親はあきらめない。娘だけでも助けるために、さりに家のドアを叩く。

「頼む。自分はどうでもいいんです……子供を、娘を……」

父親の必死に訴えに対しても返事はない……どうあっても助けな
いつもりだ。それを見て、俺は苛立ちを覚えるのを感じていた。小
室たちみたいな良い仲間といったから、忘れていた。世の中の多数の
人間はこういうものなのだ、ということを。

「パパ……？」

女の子の不安そうな顔に、父親は持っていたスパナを振りかざし
てドアを壊そうとする強硬策に出た。

「開けてくれ！ 開けてくれなければ、ドアを壊す！」

それでも民家の人に警告したあたりこの人は根が優しい人なの
だろう。娘を救うために必死な父親を本気だと感じたのか、ドアを
壊されはかなないと慌てて返事をする。

「ま、待ってくれ……いま開ける
「ありがたい……」

その時の父親は、ひどく安心した顔をしていた。娘だけでも助け
ることができた、そう確信できたからだろう。ロックの開く音が聞
こえ、ゆっくりとドアが開かれていく。

嫌な予感を感じた俺は、民家に飛び込むように父親らしき男のシ
ヤツを掴んで倒し、割り込んだ。ドアが開いた瞬間に、包丁が飛び
出してきた。長い棒をガムテープか何かで巻いて槍のようになぐし
た鋭利な刃物は間違いなく、殺すつもりで突き出されたものである。
俺が割りこんでなかつたら……今頃は父親の胸に突き立っていたか
もしれない。

「ちいッ……！」

左肩に焼けたような痛みが走る。突き刺さった包丁から鮮血が流れ出しているのが見えた。

家の中には包丁を持った男、その妻らしき女、息子に娘。武器を持つているヤツもいる。どいつもこいつも……恐怖に支配された目をしている。俺を刺した男は、怯えた声で謝罪の言葉を繰り返していた。

「許してくれ……許してくれ……」

自分たちが生き残る為に、こいつらは人を刺した。お嬢がバスで話した、生き残るための最小限のコミュニケーションの話を思い出した。文字通り、俺は身を持つて知ることになった。突き刺さった槍のような包丁の柄を握つて、家の連中を思い切り睨みつけた。

「……謝るんじゃねえ」

「ひつ……！？」

「……んだよ、この家の連中は雁首揃えて子供1人受け入れられねえつてのか。拳銃、人を殺そうとまでしゃがつて。この人たちはどう見たつて人間だろうが」

「わ、私は、家族を守らなくてはならないんだ……」

「だつたら……こっちの気持ちだつて分かるはずだろ。この人は娘を守るうとして必死だつただけだ」

男の怯えた瞳の中には後悔があった……これ以上話しても時間のムダだろ？ 俺は刺さった包丁を引きぬいてドアを閉めた。いきなり割りこんできた俺を見て、女の子と父親は驚いていたようだったが、お礼を言つてくる。

「ありがとう。おかげで助かっただよ……ケガは大丈夫か？」

「お……お兄ちゃん血が出てるよ、痛くない？」

「……あー、結構痛いけどまあ、大丈夫」

まださっきの衝動の興奮が残っているのか……感覚が「マヒ」しているようだ。傷口が少し熱く感じる程度だった。止血ペーパーはしておかないといマズイか。

「あの、これ……」

「お、ありがとな」

そう言つて女の子は俺にピンク色の綺麗なハンカチを差し出してくれる。俺は笑顔で頭を撫でながらハンカチを受け取つて傷口を縛つた。父親は八方ふさがりになつてしまつたことに複雑な表情を浮かべている。確かに、このまま 奴ら のうろついている中を娘を連れて他の家を探してまわるなど、自殺行為でしかない。

「……すぐそこへ、俺たちが使つてるマンションがあります。俺の仲間なら、噛まれてないなら受け入れてくれるはずです」

「だが……見ず知らずの君にそこまでしてもらつのは……それにそのケガでは……」

「わんつー」

犬の鳴き声に背後を振り向いた俺は、近づいてこようとしていた奴らを一閃した。頭をボールのようにぶん殴られた 奴ら は問答無用で行動不能になつたようだ。

……今は危なかつた。わんこが吼えてくれなかつたら噛まれていたかもしれない。白い毛に耳だけが黒い犬は身体こそ小さいが、ずいぶんと勇敢なようだつた。奴らを見ても怯えた様子がない。

「おう、サンキューなわんこ」

だが……あんまり吠えられると 奴ら を呼んでしまう。犬が女子に懷いている様子を見て、連れていったほうがマシだと思った。

「お嬢ちゃんがコイツを持つてくれるか？　吠えないようにしてくれば助かる。でかい音を立てると 奴ら が寄ってきてしまうからな」

「うん！」

「わう……」

女子は優しく犬を胸に抱きかかえた。集まつてこようとする奴ら を見て、父親は迷っている時間はないと判断したらしい。

「よろしくお願ひします」

「……俺の後ろから離れないようについてきてください」

俺は女子とその父親を連れて、来た道を駆け抜ける。小室たちが受けて入れてくれるかどうかはわからない。俺は勝手に暴れて勝手に連れてきただけだ。最悪の場合……俺もこの親子も行き場を失うことを考えないといけない。 奴ら は押しのけたり、足を転ばせるだけにしてひたすらに親子を護衛することに専念する。ただ殺してまわっていたさつきとはまるで正反対の状況だった。

刺された左肩だが、すでに血が止まっている。氣味が悪いほどの驚異的な回復力だった。さつきの衝動といい、本当に俺の身体はどうなつてしまつたのだろうか。まるで人間のものじゃないみたいな氣さえする。

散発的に襲つてくる 奴ら を転ばせながらようやく、駐車場のハンヴィーが見えるくらいまで戻つてきた。門の外に人影が見える。小室に宮本……冴子さんとお嬢もいる。仲間たちは門の前で待つてくれていた。まわりには襲つてきたのだろう 奴ら が倒れている

のが見えた。どうにか俺たちが駆け込むと同時に再び門が閉まった。俺はみんなの顔を見ることができなかつた。俺は勝手に行動して迷惑をかけたのだ。追い出されても文句は言えない……。

「上坂、顔を上げなさい」

「お嬢……」

お嬢が俺の前にツカツカと歩み寄つてきて思いつきつり平手打ちをした。

スパーン！

周りの 奴ら が集まつてきそつなくらいいい音だつた。叩かれた頬がジリジリと痛む。それはさつき包丁で刺された傷よりも、痛く感じた。

「…………どう、目は覚めた？」

「…………ああ」

「言いたいことは色々あつたけど…………とりあえずこれでいいわ。アントタがバカなのは今に始まつたことじやないしね」

呆れたような顔で肩をすくめながらお嬢は言つた。

「みんな…………怒つてないのか？」

みんなの顔はとても怒つている様子ではなかつた。むしろ俺たちを温かく迎えてくれているのである。面食らつたような表情をする俺を見て、小室が苦笑する。

「上から見てたからだいたいの事はわかつてゐるよ。俺たちは仲間だ

ろ、助けあつのが当然だ」

「まつたく……君は本当に無茶をするよ」

「でも、じつして無事だつたんだもの、いいじゃない」

仲間の温かい優しさに触れて、俺は瞳が潤むのを感じていた。涙が溢れそつになつて、思わず手を覆つた。

「あー、お姉ちやんがお兄ちやん泣かせつるー」

「な、何言つてゐのよこのチビッ子はー?」これは上坂が勝手に…

…

「わうー!」

「ほひ、この子もわうだつて」

お嬢が女の子と犬に振り回されているのを見て、みんなが笑つていた。女の子の父親は穏やかな声で俺に言つた。

「君は……こい友達を持つてゐるんだね
「はい、血漫の仲間です」

俺は、迷つことなくその言葉を紡いだのだった。

壊れてしまつた世界で迎えた初めての夜。地獄のような世界で、俺は囁らざもとある親子を救い、今日を生き延びた。それが悪夢のように続く毎日のたつた1日だとしても……確かに得たものがあるのだから。俺はそれで十分だった。

第8話「衝動」（後書き）

評価してくださった方、お気に入り登録してくださった方。この場でお礼を申し上げます。どうもありがとうございます。このような拙い作品ですが、今後ともよろしくおねがいします。

今回は結構オリジナルな感じになりました。上坂がだんだんと人外になりつつ、ありすちゃんのお父さんも生きています……名前どうしよう。

感想などはいつでもお気軽にどうぞ。お待ちしております。最後に、読んでいただいた方に最大限の感謝を。

親子を助けて帰ってきてからは、おおむね平和な時間を過ごすことができた。無茶したのがバレて静香姉えに泣かれたり、冴子さんの作つていた煮物を味見させてもらつたらやたら美味しいくて感動したとか。まあ色々だ。風呂にもゆっくり入れたし、みんなちゃんと睡眠をとつたので気力も体力もそれなりに回復することができた。大変だったのはケガの説明だった。コーダや小室はベランダから俺が刺されるところを見てたらしく、ずいぶんと心配された。包丁でぶつ刺されたのだから当然と言えば当然なんだが……これに関しては俺もよく分からぬことが多い。静香姉えに一度調べてもらつたが、特になにもわからなかつたしな。不安にさせても仕方ないので、傷そのものが浅かつたと言つておいた。

見張りの合間に、俺はコーダに銃の使い方を教えてもらつた。普通の奴らはともかく、イレギュラー相手にはバリエーションがほしかつたからである。

デザートイーグル。大口径のマグナム自動拳銃で、拳銃の中では最高の威力を持つている。銀色をメインとした無骨なフォルムが気に入つた。クマでも殺せるほどに威力があるそうだが、それに応じて反動も相応に大きい。まともに撃てるのが京也くらいだよ……とコーダは言つていた。まあ、ちゃんと射撃の姿勢などを覚えれば女でも撃てるそうだが、銃そのものが結構な重さだしな。

「狙う時は胸のあたりを狙つたほうがいい。訓練していないし、間違いないく照準がブレるから」「おっけー、わかつた」

それから俺は、2階のベランダで見張りをしながら外の景色を眺めていた。長かつた夜が明けて、また日が昇つてくる。世界がどれ

ほどに壊れてしまつたとしても、ちゃんと朝は訪れるのだと俺は知つた。

小室たちはまだ部屋で眠つてゐる。まだ夜が明けたばかりだから……出発するのも少しあとになるだろ？。そんなことを考えているといふと、後ろから声をかけられた。

「おはよう、上坂君」

「ああ、ケンジさん。おはようございます」

俺に挨拶してきたのは、昨夜俺が助けた親子の父親だった。名前は希里 ケンジ（まれさと けんじ）という。年齢は30半ばといつたところで、短めに刈つた灰色がかつた髪にワイシャツにネクタイ姿の男性だ。優しそうな見た目だが、娘を守りながら 奴らの中を駆け抜けてきた勇敢な人である。職業は新聞記者だそうだ。俺の名前を聞いた時に昔の事件を思い出したのか、複雑そうな表情をしていたことを覚えている。勘のいい人だ。俺は彼のことを下の名前で呼ぶことにした。希里さん、だと娘のほうと「ちや」になって分かりづらいしな。

「昨夜は助けてくれて、本当に助かつたよ。君がいなかつたら……私も妻のようになつていたかもしれない」

「あの……失礼ですけど、奥さんは？」

「……家に 奴ら が押し寄せてきた時に……ね。ありすには内緒にしておいてくれないか？ 真実を知らせるには、あの子はまだ幼すぎる」

「……わかりました」

「この人も……大切なものを失つてゐるのだ。いや、失つてゐるからこそ2度と失わない為に戦うことができるのだろうか。

「……う～、パパあ？」

とてとてとケンジさんその後から現れた女の子は、希里（まれわとありす）だ。ケンジさんの娘で、小学2年生の元気な女の子だ。頭にヘアバンドをした赤みがかったショートカットの髪に左目の泣きぼくろが特徴的な少女である。眠い目を擦りながら歩いてくる。お父さんがいなかつたので起きてしまったのだろう。

「お、悪いなありす。起こしちゃったか？」

「あ……京也お兄ちゃんおはよう」

俺を見てちゃんと挨拶してきた。この年齢なのに生意気なところがまるでなく、素直な性格をしてくる。とてもいい子である。

「わん！」

俺もいるで、といわんばかりに犬の鳴き声がした。ありすにぬいぐるみの如く抱えられていた小型犬である。お前はもうある。

「よつじーク。お前は相変わらず元気だなあ……でもあんま吠えるなよ？」

「くうん……」

「ああもう、可愛いなあお前は」

ジークというのはこの犬の名前で、名付け親はコーダである。アメリカの零戦だったかの名前らしい。小さいのにやたら元気のあるこいつには相応しい名前かもしれないと思つた。

俺はジークの頭を撫でる。わんこと少女がいるだけでこんなにも和む。俺のささくれだつた心がほわ～つと、癒されていくのが感じられた。ありすは、撫でられているジークを見ながら、なんだかう

「あいつも撫でてほしーのか？」

「…………うん」

俺は上田づかいで首を振ったあいすの頭をゆづくと撫でる。あいすの髪はサラサラしていて手触りが良い。

「えへへ~」

あいすは俺に撫でられて嬉しそうだ。犬と少女を撫でながら、和やかムードに入っている俺たちを見ながら、ケンジさんが穏やかな顔で俺たちを見ている。

「……俺つひ子供に好かれるよつたタイプじゃねーはずなんだが」

見た目優しそうなコーラタとか静香姉えなうともかく、俺は不良っぽいから普通は怖がるはずなんだが……不思議なことにあいすは全然怖がつている感じがしない。

「京也お兄ちゃんはこわくないよ。だつてあいすたちのことを助けてくれたもん」

無邪気に寝てぐるあいすを見て、昔亡へしてしまった妹のことが頭をよぎった。昔よくひつひつして撫でてやつてたな。

「お兄ちゃん……どこか痛いの?」

「え?」

「泣いてるよ」

自分の頬に触れてみると、濡れた感触が指先にあった。涙が伝つた跡が残っている。ありすは心配そうな顔で俺を見上げている。

やれやれ、なにをやつてんだ俺は。高校生にもなつて昔を思い出して泣くとか……色々あつたせいで気が緩んでるかな。俺はすぐに笑顔を作つてありすを安心させる。

「大丈夫。ちょっと田にゴミが入つただけだ」「よかつたー」

「わん」

もう少ししたら、俺たちは川を越えるためにマンションを出ることになる。おそらくは、ありすたちとも別れることになるだろ。まあ、それまでは……もう少しくらいこの穏やかな時間を楽しめてくれ。

それから数時間後。太陽が昇つた頃に俺たちはハンヴィーに武器や食料などの必要な荷物を積み込んで、川向こうへ渡る為の準備を整えた。ケンジさん達は残ると思っていたが、一緒についてくると言ひだした。

「いいんですか……危険ですよ?」

「ずっと部屋に立てこもつている訳にもいかない。それなら信用できる君たちと行動したほうが、よほど安全だよ」

「うん、お兄ちゃんたちと一緒に!」

こう言われてしまつては、小室も連れて行くしかない。俺たちは新たな仲間を加えてマンションをあとにした。

さて、川向こうに行くための方法だが、主だつた橋は警察によって厳重に封鎖されている。しかし、川の全てが警察によつて渡れないようになつてているというワケではない。俺たちはハンヴィーでとにかく御別川の上流を田指した。護岸工事がされていない川の上流

は水深も浅く、流れの遅いところならハンヴィーでも十分に通れるだろうと考えたからだ。ちなみに発案者はお嬢である。

予想は的中した。現在、ハンヴィーはゆっくりと川の中を走行している。さすが装甲車、半分くらい水につかっていても問題なく進んでいる。ちなみに、まだ着替えのいくらかは乾いてなかつたので、棒を立てて風に晒して乾燥させているところだ。

偵察として、ハンヴィーの天井に座っているのは俺、コータ、お嬢、ありすだつた。背中あわせに周りを見ている。他の仲間は車内にいる。ありすは「コータの膝の上で楽しそうに歌っていた。抜けるような青空の下で、ありすの無邪気な歌声が響く。

「……らんらんらんらん、川くーだりー」

「へえ、歌が上手いんだな、ありすは」

ありすは「コータの膝に座つて楽しそうにしている。歌をほめてやると嬉しそうに笑つた。

「えへへ……ありすえいごでうたえるよ」

「すごいねえ、歌つてみてよ」

「うん！ R o w r o w

「

子供ながら流暢な英語で紡がれた歌詞は、よどみなく耳に入つてくる。実に綺麗な歌声で、癒されて思わず顔に笑みがこぼれる。周囲を双眼鏡で警戒しているお嬢を横目で見ると、どこか機嫌が良さそうだった。

「じゃ、今度は変え歌だ」

「うん！」

「shoot shoot

」

「コーラが歌い出す。いや、発音とかはいいんだが問題なのは歌詞の内容だった。銃をぶつ放して、全部ぶつ殺す的な。ただのトリガーハッピージやねえかよ。英語とはいえ、さすがのバカな俺でも単語で物騒なのは伝わってきただぞ。あ、お嬢のやつ拳をわなわなと震わせてやがる。さつきまでの穏やかな表情が嘘のようだ。

「コーラちゃんす」「ー

「いや……確かにすげえんだが。ありす、これは覚えなくていいからな」

内容を理解してないのか、ありすは純粋にコーラを褒めている。ものすごいドヤ顔をしているコーラに切れたお嬢がバン、とハンヴィーの硬い天井をぶつ叩いた。

「そこ」の「デブオタ！ 子供にろくでもない変え歌を教えるんじゃない！ 分かってんの、元はマザー・グースなのよ！？」
「は、はーい」
「あはははは」

お嬢の怒りに恐れをなしたコーラは素直に大人しくなった。俺とありすがそれを見て笑う。そういうじでいるうちに、向こう岸が近づいてきた。

「みんな、そろそろ川を渡り終えるわよ」

川を渡り終えたハンヴィーが、ゆっくりと河原の砂利道へ戻る。すぐさま俺は木刀を手にハンヴィーから飛び降りて、周囲を見回すが、奴ら、も人間もいない。とりあえずの安全を確保した俺たちが行つた行動は、着替えだった。いい加減服も乾いたし、何より明るいうちからあの痴女みたいな格好じや戦えないだろう、常識的に考

えて。

「お友達の服、持つてきたから好きなの選んでいいわよ」

静香姉えはこういう時は用意周到だった。ハンヴィーを挟んだ向こうで女子連中が楽しそうに着替えを始める。男4人とわんこ1匹は女子の着替えが終わるのを大人しく待っている。男は着替えがないので服はそのままだ。コーダだけは、南さんの家にあつたカーキ色のベストを学ランの上から着用している。学ランやシャツは一応洗つたのでそれで十分だ。

「わん！」
「ジークはいつも元気だな」

ジークは短いしっぽを振つてゐる。会つたばかりだといつて、元の通りありますもこいつもずいぶんと人懐っこいやつみたいだな。

「さて、じゃあ武器を配るよ。京也には渡してあるから、小室とケンジさんのぶん」

コーダが銃を手渡す。小室にはショットガンを、ケンジさんはライフルをそれぞれ渡した。小室とケンジさんは初めて持つた本物の銃の重さと感触に緊張しているようだった。

「まさか、本物の銃を持つ日が来るとは思わなかつたね」
「俺もです」
「まあ、おいおい慣れていくしかないだね」

俺の使うデザートイーグルのマガジンはポケットに入れてある。コーダはそれぞれの銃の扱い方を即席でレクチャーしていた。あり

すのそばにいてもうケンジさんはともかく、前衛の小室にはしつかり覚えてもらわないとな。ショットガンなら棍棒の代わりにならないこともないだろうが、あくまでそれは最終手段だ。あとは実戦で覚えるしかない。

「おにいちゃん！」

「おう、あります。みんなの着替えは終わつた」

俺たちが振り返つて目に入った光景は、なかなかに壯觀だつた。富本は上下ともに制服のままだが、関節の部分に黒いプロテクターを付け、腰にホルスターを巻いている。ライフルを吊るすためのベルトが、身体に食い込んでいるので、逆に胸を強調しているように見えなくもない。

冴子さんは上だけ制服のまま、黒いタイトなミニスカートを履いていた。スカートには深いスリットが刻まれていて、白いふとももと黒いガーターストッキングとのコントラストが目に眩しい。そういえば前はロングスカートだったからすこく新鮮に感じる。足を露出しているのが恥ずかしいのか、頬を染めているのも個人的には高ポイントである。

お嬢は白いジャケットを着ている。何故かは知らんが胸の部分だけ開いているので黒いタンクトップが見えて、それがアクセントになつてている。やつぱりでかい……下は制服のミニスカートである。静香姉えは白いシャツを羽織つていた。ブラをしてるのかと心配しそうなくらい谷間が見えている。お気に入りだったスカートは破れていたので履き替えたのだろう。今はオレンジ色を基調とした短めのスカートをはいでいる。

それぞれが個性的な格好だったが、まあ似合つてはいると思つ。動きやすいのはいいことだ。

「なかなか似合つてるぞ」

「わん！」

「いや、確かに似合つてゐるけど……銃なんて麗は撃てるのか？」

「平野君に教えてもううし、いざとなつたら槍代わりに使うわ」

「あ、使える使えます！ それ軍用の銃剣ついてるし！」

宮本の下げていた長いライフル銃に、コータが嬉しそうに銃剣を取りつけながら使い方を教えていた。ありすがとてとてとこつちに駆け寄つてくる。

「わあ～、パパも持つてるんだ！ かつこい！」

「本来なら……大人が前に出るべきなのかもしけないが……」

「心配しないでください。俺たちが前衛をやりますから」

適材適所で人材を配置するのがいいだろ。前衛は俺や冴子さんがいるし、小室もいる。できるならお嬢やありすみたいな、非戦闘タイプには武器を持たせずにすむようにしたい。

「さあ、ハンヴィー上げるわよ。男子、安全確保！」

『了解！』

お嬢の号令で俺たち3人は、河原から堤防を上り道路へと出る。互いの背中をカバーしながら周囲を確認するが、奴らはおろか、人間の姿さえ見えなかつた。完全なクリアである。上は大丈夫だと小室が河原のほうに合図を送る。

静香姉えがハンヴィーのエンジンをふかし、一気に堤防を駆け上がり道路へ着地する。普通の車と勝手が違うにも関わらず、静香姉えの運転は上手かつた。まるで映画のスタントのようである。

奴らがいなのは、もしかすると川で阻止できたからかもしれないと少しだけ淡い期待を抱いたが、遠くに血のついた車や死体が見える。川は渡れなくても、奴らはいるようだ。

「……やつぱーひーにも 奴ら がいるっぽいな
「世界中で同じ状況らしい…… という話だからね
「でも、警察が残っていたりやつと……」

富本はよほど父親を信頼しているんだろうな。こんな絶望的な状況でも希望を捨てていない。

「……やつね。日本のお巡さんは仕事熱心だから」

富本の言葉に、お嬢はどう返答するべきか少しだけ考えたようだつたが、富本の気持ちを汲み取つてたのか同意した。

「……だな。武器もあるし、結束してねばやつ簡単にやられてねえだろ」「うん。」

富本の表情が明るくなる。甘い期待だと切つて捨てるのは簡単だ。でも、悪いほうにばかり考えても状況がよくなるわけじゃない。だったら俺は、現実を踏まえて前を見よつ。もしも仲間が落ち込んだり、転んだら引き上げてやればいい。

「これからどうするの?」

「高城は東坂の二丁目だったよな?」

「やつよ」

小室は次の行き先として、ここから近いらしいお嬢の家を候補に挙げた。東坂の二丁目だったまつすぐ行ければ目前には到着するだろつ。そこで頭に思い浮かんだのは、最悪の可能性。もし、お嬢の両親が亡くなっていたら……きっと悲しむだろつ。

「……あー、お嬢、あのよ」

ちくしょひ…… 肝心な時に言葉が出てこない。お嬢は寂しそうな表情で言つ。

「あんたらしくないわよ、言ひ淀むなんて。わかつてゐるわ……期待はしてない」

お嬢はちゃんと理解している。この状況において両親が生き残つてこることなどが、どれほど絶望的な望みであるか。

「つまく言えねえけど…… 希望は捨てんよ。子供が親に生きていてほしこつて思つのは当たり前だし、悪いことじやない」

なくしてしまつた俺は、それすらできないから。だからこそ、お嬢やみんなには希望を持つていてほしこのだと想つ。

「……ありがと」

それでも、どれほど甘い考えだとしても、できることなら……お嬢の両親が無事であることを願つ。お嬢だけではない。みんなの家族も生きていてほし。

再びハンヴィーに乗つた俺たちは、お嬢の家に向かつて出発した。俺と小室に富本の3人がハンヴィーの上で見張りをすることにして、他はみんな車内にいる。ハンヴィーはすいすいと道路を走りながら川沿いの道から住宅街のほうへと抜けていく。今日は日が昇つてからずつと 奴ら を見ていない。桜の舞い散るなか、優しい春の風が肌に心地良い。奴ら のいなドライブは快適そのものだつた。富本も小室に寄り添つて機嫌が良さそうだつた。

「やれやれ、お熱いねえ。こりや、お邪魔だつたかな」

「か、からかうなよ上坂」

「そ、そうよ……」

小室も宮本も顔を真つ赤にしている。初々しくていいもんだな、友人として仲の良い2人を見るのは素直に嬉しい。

「それはともかく……上坂、気づいてるか？」

「ん……静かすぎる、だろ」

空を見ながら、俺たちは気づいていた。昨日はあれだけたくさん飛び交っていたヘリや旅客機の姿が、全く見えないのである。やれやれ……このまま何事もなくお嬢の家まで着いてくれれば御の字なんだけどな。少しの不安を乗せて、ハンヴィーは進んでいく。

東坂2丁目の付近は、閑静な住宅街だった。つまり人はいるからそれなりに、奴らがいてもおかしくはない。とはいって、行くところほとんどに大量の、奴らがいるのはどう考へてもおかしい。

「どんどん増えてる……？！」

ハンヴィーの行く手には大量の、奴らがいる。お嬢が車内で指示を飛ばして、別ルートから進もうとするが、そこにも、奴らが群れをなしているのだ。東坂2丁目に近づくにつれてどんどん奴らの数が増えていくようだつた。右折左折を繰り返しながらハンヴィーは走り続ける。

そのうちに、大きな通りに出た。周りより低い位置に道がある綺麗に舗装された道の両脇は、コンクリートの壁がそびえていた。道は奴らで溢れているが、さすがにこれ以上曲がつていては目的地にたどり着けない。ハンヴィーが突っ切つていく。俺たちは落下

しないように、ハンヴィーの天井にはりつくように身を屈めていた。まるで何かによって人為的に流れがせき止められているような違和感を感じていた。橋が封鎖されていた状況にどことなく似ている気がする。

「ん……？ 向こうになんか見えないか？」

「あれって……もしかして……？」

奴ら の後ろに見える道路の途中で、キラリと光っているものを見えた気がした。正体に気付いた富本が大声で叫ぶ。

「だ、だめっ、停めてええ！」

太い銀色のワイヤーが道をふさぐように張られている。あんなモノにぶつかつたらいくらハンヴィーでもヤバい。

キキイツ！

ワイヤーにぶつかるギリギリで車体が横に向いた。ワイヤーと車に挟まれた 奴ら がワイヤーで細切れになっている。

ハンヴィーは停まろうとするが、滑っているようでスピードが止まらない。道路脇の壁に突っ込む寸前でようやく急ブレーキがかかる。その瞬間、車体が大きく揺れてしまった。

振り落とされた富本が車から落ちてしまう。小室がすぐに手を伸ばすが……届かなかつた。富本はボンネットにぶつかりながら道路へと叩きつけられた。

「あ……ぐつ……」
「麗ツ……！」

宮本が苦しそうにうめく。かなり強く背中を打つたらしく、動ける様子じゃない。

「……スライドを引いて、頭のあたりを狙つて……撃つー。」

「バスンッ！」

小室がショットガンを構えながら宮本の前に群がろうとしていた奴らを撃つた……が、倒せたのは一人だけだ。狙いが明らかにブレている。コータがハンヴィーの上からアドバイスすることで、まともに撃てるようになつた。飛び散る弾丸が奴らの数を減らすが、銃声を聞きつけて後ろからもどんどん奴らが増えている。

「弾切れかよ……！」

小室がショットガンにリロードしようとしてポケットから弾をこぼしてしまつ。奴らは目の前だ。俺は腰の大型拳銃を抜きながらハンヴィーから飛び降りた。小室に近かつた奴らの心臓あたりに狙いを定め、引鉄を引く。

「ドオン！」

胸を穿たれた奴らが後続を巻き込みながら吹っ飛んでいく。十分にすぎる威力だつた。肩にものすごい反動がくるものの、撃てないほどじゃない。上等だ……だがやはり数が多い。すぐに弾丸がなくなつてしまつだらう。機関銃かロケットランチャーでも欲しいところだつた。小室の前に割り込んで木刀を一閃して奴らを難しき払う。冴子さんがハンヴィーから飛び出して加勢する。

「小室君、私たちが支える！ その間に宮本君を……」

「ダメだ！ 木刀でやるには 奴ら の数が多いわー」「んなもん……関係ねえッ！」

気合とともに木刀で殴りつけて 奴ら を倒す。冴子さんが左、俺が右だ。数が多くうがやるしかない。

「コータつ、援護は任せた！」

「了解！ ケンジさんは近くの奴に狙いを絞つて！」

銃声とうめき声が交差する。コータはハンヴィーの上からケンジさんと 奴ら を狙い撃っている。ハンヴィーはエンストを起こしたのかまるで動く様子がない。

急に車内からお嬢が飛び出してきて、小室のショットガンを拾いに走つた。俺はお嬢の近くにいた 奴ら を木刀で殴り飛ばした。潰した 奴ら の脳漿がお嬢に降りかかる。

「きやあつ！？」

「なにやつてんだ、バカ野郎！ 危ねえから下がつてろ！」

「あたしは臆病者じゃない……だから、アタシも戦う！」

お嬢の顔は真剣そのものだつた。お嬢は足下にばら撒かれたショットガンの弾を拾つて装填し、 奴ら に向かつて放つ。

「お嬢……」

「これからは……名前で呼びなさいよ」

覚悟を決めた人間を説得する方法を俺は持つていない。お嬢がリードする間に俺が切り込んで戦う。銃と木刀、即席のコンビで前線を支える。

「死ぬもんですか、誰も死なせるもんですか！ アタシの家はすぐそこなのよ！」

「ああ、その通りだ！ 誰も死なせねえ！」

そこから先はただひたすらに戦つていた。無限に湧いてくるのではないかと錯覚しそうだ。奴らをなぎ倒しながら俺たちは戦い続けた。空の色は変わり……いつしか夕方になつていた。

「ぐ……はあ……はあ……クソ、まだいやがる……のか」

全身が奴らの脳みその汁や返り血で濡れていた。ハンヴィーはいまだにエンジンがかからない。あまりに酷使したせいで、振つていた木刀は折れかかっている。お嬢のショットガンもさつきついに弾が切れて棍棒代わりに使おうとしている。

力チン！

「……こつちも弾切れだ」

富本の銃を使って戦つていた小室も弾がなくなつた。まだみんな生きてはいるが、このまでは全滅するのは時間の問題だった。どうすれば全員を助けられる？ 頭によぎるのは全滅の光景。悪夢のようなそれを殴り飛ばしながら俺は思考する。せめて昨日の夜くらい身体が動けば……そう思わずにはいられなかつた。

『なあにいい子ちゃんぶつて戦つてんだよ？ 本当は殺すのが楽しくて仕方ないくせに』

心は囁く。命をかけてギリギリで戦つているせいで、普段は奥に眠つている感覚が表に出るようになつてきたせいだろうか。

絶望的な状況のなかで、限界を迎えたはずの身体は、まだやれると言いたげに熱く滾つたまま。血が沸騰したように、火照りが收まらない。

『仲間のため……なにいつてんだお前は、ただ暴れたいだけだらうが。理性を捨てろよ』

夜の俺を思い出せ。いまはただ、殺すためだけの狂氣があればいい。力だ……力がほしい。人格理性感情優しさ情け……そんなものは全て邪魔だ。殺し合いには必要無い。本能に流されるまま、俺は木刀を捨てて、拳を握つた。

「ウ……おおおおオオオッ！…」

吼えると同時に俺は、奴らの顔を殴り飛ばした。ミシリ、と拳が鈍い音を立てる。あまりに強い力で殴つたせいで、拳が軋んでいる。下手をすれば骨にヒビくらい入つているかもしぬないが、痛みすら構うことはなく、俺は近くの奴らを蹴り飛ばす。後頭部に直撃したハイキックで、奴らが地面に沈む。

奴らの頭を掴み、力を込めるとグシヤリと音を立ててあつけなく潰れた。まるで腐った果実のようだ。倒れた奴らの身体を引きちぎり、投げ飛ばし、時には腕や足を武器のように振り回した。すぐに使いものにならなくなるが関係ない。殺せば殺しただけ奴らの身体が増えるのだから。

「ひやはははははは…」

獣のよつこ、理性もなくただ殺すことだけを繰り返す。奴らがいなくなるまで……何度も何度も。そのうちに、奴らは少しずつ減ってきた。心なしか、俺を避けているようにさえ見える。化物

のへせに逃げるのか、根性のない 奴ら だ。

「…………う、あ？」

気がつけば、近くにいた 奴ら は殺し飛べした後で、俺の周りは血の海だった。

「全員すぐに伏せなき……」、これは……」

突然の声に振り返ると、フルフェイスのヘルメットや耐火服のようないに身を包んだ多数の人間たちが集まっていた。背中にあるポンベのようなものからホースが伸びている。まるで消防士の集団だった。そいつらは俺がやった 奴ら の山を見て驚いて言葉もないうだつた。

奴ら を全部殺し終わつちまつた……じつじよへ。ああ……目の前にまだいるじやねえか。こんな死体どもより、よりよほど歯心えのありそうな連中が。あいつらは顔が見えない。敵なのか、こつちに向かつて銃みたいなものを構えている。なら……敵だな。

「テキは、じる……さねえと」

俺は熱を帯びた身体を引きずるようヒヤヤーのまゝに向かつて行こうとする。お嬢が飛びこんできた。

「上坂、もういいつ、もういいの！ もう戦わなくていい！ 助かつたのよー」

お嬢は俺の身体にしがみつくなつて……必死に何か言つている。泣いてるのか？

「オレ……は」

両手を見る。ペンキに手を突っ込んだようにドロドロで、真っ赤だった。拳など骨が見えそうなほどに傷ついていた。あまりに強い力で暴れすぎたせいだろう。お嬢の声でようやく俺は我に返った。

そして理性が戻り、自分のやったことに恐怖する。

まわりにはおびただしい死体の山。動いている奴らはない。
ここを血の海にしたのは誰だ？

笑いながら 奴ら を引き裂き、潰して殺す。まるで化物じやないか。

みんなが、俺のほうを見ていた。その瞳に浮かんでいるのは……明らかに恐怖である。『人でないもの』を見るような目だった。

俺は叫び声を上げて、お嬢を振り払う。

「上坂つ！？」

みんなに背を向けてその場から逃げ出した。仲間に化物を見るような視線で見られていることに……耐えられなかつた。
俺は……こうして1人になつてしまつたのだつた。

第9話「暴走」（後書き）

さて……今回まことにやけすぎたかもしません……。
お気に入り登録や感想ありがとうございます。とても良い活力になっています。

作品を読んで頂き感謝致します。それでは。

第10話「反逆するという意志」

奴ら の徘徊する街を走り続ける。息が切れそうになつても足を止めずに走り続けた。行く当てなどなかつたが、とにかく今は誰もいないとこに行きたい。逃げて逃げて逃げて……逃げ続けた先になにがあるのか。そんなことを考えている余裕など今の俺には存在しなかつた。

自分自身が怖くてたまらない。 奴ら を殺すことを楽しむ殺人鬼のような自分がどうしようもない程に恐ろしい。もう一人の俺がいて、まるで殺せと命令されていいるようだつた。

戦うのは楽しいよなあ。 奴ら ならぶち殺しても文句ひとつでない。むしろ感謝さえされるんだぜ。

そうじやない……俺は仲間を守りたいから戦つていたんだ。

自分自身に言い訳をしながら、俺は一体どうなつてしまつたのかと問いかけても答えは返つて来ない。答えを返してくれるだろう仲間はない。

俺は人間なのか？ 自分のことなのに、分からぬことがこれほどまでに恐怖を感じるものなのだと俺は知つた。

お嬢たちから逃げるよう走り続けた俺は、日の落ち始めた世界で住宅街の中をさまよつていた。がむしゃらに走つたせいでジンをどう走つたのかさえ覚えていない。

戦いに疲れきつた身体は熱く鉛のよう重いのに対し、心は冷水に突つ込んだかのように冷え切つていた。

ふと、道の脇に停まつていた車の窓に映つていたものを見る。窓に映つた自分の姿を見て……俺は目を疑つた。まるで頭から赤いワインでも被つたかのように全身が真つ赤だつたのである。

「これが、俺……？」

全身が 奴ら の血や体液で汚れてはいるが髪の毛まで全てが染まつた、というワケでもないだろう。黒かつたはずの髪は根元から明らかに変わっている。家族を殺したあの女と同じ燃える炎のように赤い髪だ。血のような深紅の瞳の俺が、間抜け面を晒して窓に映つた自分を見ている。姿が変わった上にボロボロだった両手の拳が再生したかのように治りかけている。

「……ハハハ、まるでマンガだな」

笑うしかない。見た目こそ、まだかろうじて人間だと言えなくもない。それでも俺の存在そのものが怪物と同じようなものだつた。そうでなければ説明がつかない。思えば、今まで不明な部分はいくつもあつた。極限の状況に置かれて精神がイカれた…… そのほうがよほど救いがあつただろう。

俺の中にある衝動的な殺意は『人間』を殺すことにさえ躊躇いがなくなつていて。力の代償にしても大き過ぎるものだつた。

ドガアツ！

苛立ち紛れに車のドアを殴りつけると、鈍い痛みと共にドアが思い切り拳の形に歪んだ。拳の先から伝わってくる痛みはこれが紛れもない現実であることの証明だった。ふらふらとした足取りで俺は街をさまよう。熱に侵された頭で思考する。

小室たちは、あとから来た連中が救助してくれたはずだ。周りの奴ら はどうにかしたから大丈夫だろう。逃げる時にお嬢を突き飛ばしたことを思い出して…… 胸が痛んだ。

「……謝りてえな……でも」

怖いのだ。俺の持つ衝動が、いつか仲間たちすら殺してしまうん
じゃないかと。そう考えるだけで背筋が凍りつく。

俺は、どうすればいい？ 考えても結局答えは見つからないまま……疲れ果てた俺は誰もいない適当な家を見つけて倒れるように眠りについたのだった。

1人で迎えた朝の目覚めは最悪だった。話せる相手もおらず、俺は泊まつた家を出た。空にある太陽は高いから昼くらいだろうか。ずいぶん長い間寝ていたようだ。

テナントの立場から見た賃貸借契約

歩きながら俺は、住宅街には似つかわしくない物騒な音を聞いた。
遠くから断続的に銃声が轟いていた。

「……行つてみるか」

どうせ俺に行くあてなどないのだから……それに、戦っている間は全てを忘れる。俺は戦いの匂いに引き寄せられるかのように銃声のほうへと向かっていくのだった。

戦場になつていたのは、住宅街の中でもかなり広めの道だつた。集合住宅の間に作られた道は深く掘り下げられたような形になつており、両脇の壁がコンクリートで造られている。堀のようになつてゐる間を道路が通つてゐるのだった。俺は上から道を見下ろしてい る。

戦っていたのは、軍隊で使われるような形の黒い服を着た男たちだつた。大きなトレーラーを守るように多数の人間が戦つてゐる。近くにある黒塗りの車はいかにもカタギの人間が乗るものではない。黒い服の肩には日の丸や『憂国一心会』と縫われたロゴが入つてい

「ヤクザ……じゃないな。右翼か？」

黒い服の男たちは、刀を持っており、拳銃やマシンガンなどを持つている者もいる。戦っている相手はたったの1人で、それも完全な丸腰だったが、それでも異様な光景だった。

2メートルを越える巨体。初めてみるタイプの 奴ら だった。姿形こそ体格のいい人間といった感じだが、全身が赤く覆われており、腕は丸太のように太い。銃弾の雨を胴体に浴びながらもわずかに体に傷を負うばかりでびくともしない。黒い服の男たちを殺そうと前進を続ける。

「なんなんだ……」の怪物は…」「とにかく撃て！」

黒い服の男たちは奮戦しているようだが、初めて見るであろうイレギュラーに困惑しているようだった。見た目、耐久力ともに怪物だからな。

「ここの勝てるワケが……」「男が弱音を吐くなッ！」

一際威圧感のある、やたらと眼光の鋭い男が弱腰だった部下に喝を飛ばす。どうやら連中のリーダーらしい。黒い詰襟の服に身を包んだ男の纏う雰囲気は尋常なものではなかつた。遠くにいるのに軽く威圧感を受けてしまうほどである。腰のベルトに帯刀しており、陣頭で指揮を執っている。ロケットランチャーでもあれば倒せるだろうが……圧倒的に火力が足りないのは事実だった。

あのデカい 奴ら ……とりあえずDと呼ばう。アイツは規格外の存在だ。

「つおおおおおおおーー！」

黒服の1人が埒が明かないと判断したのか、銃ではなく刀を抜いて斬りかかるが、Dの筋肉の前に阻まれ浅く表面を切った程度で終わる。男が絶望したところを、殴りかかったDの拳が顔面をぶち抜いて、首ごと吹き飛ばされた。主を失った刀が地面に落ちて乾いた音を反響させる。

「化物め……！」

強いな……今までにもイレギュラーな 奴ら と戦つてきたが、間違いなくDは強い。血が騒ぎ、心臓の鼓動が跳ね上がる。

だからこそ、殺しがいがある。

俺は両脇にあつた道路へと下る階段を降りながら、戦場へと近付いていく。いちいち階段を使うのが面倒に感じた俺は、途中で手すりを越えて一気に地面に飛び降りた。落下地点は……デカブツの頭だ。落下する重力に任せ、俺は飛び蹴りを放つ。

俺の全体重を乗せた蹴りは見事にDの頭を捉えるが、少しバランスを崩した程度だった。そのまま転がるように着地して、近くに落ちていた刀を拾う。

こいつ相手に素手は無理だ、殺しきれる気がしない。首を飛ばされた男が持っていた刀を使わせてもらつ。

「な、なんだあの子供はーー？」

黒服の男たちは、突然乱入してきた俺に驚いている。銃弾の雨が止まっているうちに、俺はDとの距離を詰めて突撃する。刀を振り

力の限り右脚に向かつて刀で斬りつけた。深く斬りつけた脚から大量の血が噴き出す。

重いはずの真剣を小枝のように振ることができる……やはり腕力が相当に上がつていいようだ。

「……アアアアアツ！」

さすがにまともなダメージが入つたようだ。俺を敵だと認識したらしく、真っ赤に染まつた目でこちらを睨みつける。足を止めたDの反撃に振り回された腕を全力で回避する。腕がわずかに頬を掠つたのか、血がにじみ出す。まともに喰らつたらヤバいだろう。

Dの拳が俺に向かつて勢いよく突き出される。まるで戦車の砲だつた。当たれば先程の男のように潰されるだろう。一瞬の後に迫りくる死に對して、俺はギリギリまで見極めてから身を屈め、刀を跳ね上げて腕を斬りつけた。体を切られたDが吼える。

「グオオオオオオ！」

「いきなり現れたかと思つたら……あの怪物とともに戦つてやがる」

後ろから聞こえる黒服たちの声を聞きながら、俺は戦い続ける。さんざん切り刻んだが、倒れる様子は見えない。俺は後ろに大きく飛んで一旦距離をとつた。

Dの腕の筋肉がさらに大きく盛り上がり、近くに乗り捨ててあつた乗用車を持ち上げた。そのまま車を砲弾のように投げてくる。

あんなもんに当たつたらさすがに死ぬ……避けるしかない。後ろには黒服もいるが、他にも車がある。引火したら大惨事確定だ。俺は腰の大型拳銃を抜き、投げられた車に向かつて銃弾を撃ち込む。

車は派手な音を立てながら爆発し、燃えたパーティを周囲に飛び散らせた。Dの体にも燃えたパーティがぶつかつてている。チャンスだと

感じた俺は銃を戻しながら弾丸の如く走り、Dのもとへ飛び込む。一気に距離を詰め、渾身の力で切り下ろした。

Dの体を鋭い刃が切り裂いていく……だが、肩口から切り込んだ刀が途中で根元から折れてしまった。

「なッ……！？」

確かに刀は人を切る為に作られた武器だ。だが……それは人間や普通の生き物に対してだ。『怪物』を斬るなんてことは想定されていない。武器を失った俺の隙をついて、Dの拳が俺の腹を捉える。内臓を全部吐き出しそうになる衝撃が体を貫く。

「ぐべはッ……！？」

腹を殴られた衝撃はあまりにも強く、俺は地面をボールのようこ転がつていく。勢いが止まつたあとも、体が痺れてすぐには動けなかつた。

「じょほつ……ゴホッ……！」

咳き込む口からは血を吐き出す。そうしている間にも口は足音を響かせながら俺を殺そうと迫つてくる。早く立て……じゃないと殺される。吹き飛ばされた時に離れたのか、目の前には大型拳銃が落ちていた。

「あ……あ……」

いいじゃないか、このまま寝ていれば、アイツがきつちり殺してくれるだ。

諦めてしまえ、と声は囁く。化物に生きている資格はないと。それでも俺は……震える手で必死に拳銃を握もつとする。

「こんな体になつても、まだ生きたいのか？ 見苦しいなあ、おつるせこ。そんなことはわかつてゐる。い。

化物が人間といられるワケないのによ。

ああ、そうかもしれない。それでも、俺は仲間といたいんだよ……お嬢に謝りたい。
だから、こんなところでは死んでやれない。死んでやるワケにはいかない。

お前が……俺が仲間を殺そつとするなら、徹底的に抗つてやる！
てめえは俺だ。他の誰に負けたとしても……自分には絶対に負けられない。

田を見開き、手を必死に伸ばす。拳銃を握んだ俺は、震える両脚を奮い立たせて、再びDと対峙する。Dが俺を殺そつと手を伸ばしてきた瞬間、俺は引き金を絞つた。

頭に向かつて発射する。いくらか外れるものの、何発かは頭をぶち抜いたはずだ。

「さすがに痛えだろ……？」
「ウオオオオオオ！？」

頭から血を流しながら、それでもDは倒れなかつた。もう少しで倒せるはず……そう思つたのも束の間、弾丸がなくなつた。

「クソッ……もう武器がねえ！」

「受け取れッ！」

後方から飛んでくる声に俺は振り返った。黒く長いモノが目の前に迫っていた。眼光の鋭いリーダーの男が、自分の得物を俺に投げて寄こしたのだった。刀を空中で受け取り、一気に鞘をから抜き放つ。

体を沈みこませるように、大きく前へ踏み込む。口の懷に滑り込んだ俺は太い腕をぐぐり抜け、刃を上に立てたまま口の顎を下から刀で貫いた。

生暖かい血が顔に降り注ぐ。口は全身を震わせながら地面に倒れ、動きを止めたのだった。

「やつ……た……」

もはや完全に屍と化した口を見て、後ろの男たちが勝利に歓声を上げる。俺は全身を襲う倦怠感に包まれながら、突き刺さった刀を抜いて鞘に戻す。黒い服の男たちのほうへ歩いていく。周りの黒服たちは、警戒したように俺の拳動を見ている。俺にツカツカと近づいてきたのは、眼光の鋭い男だった。近くにいるとよく分かる。降りかかるプレッシャーが並みではない。

「……助かりました。こいつはお返します」

俺は恭しく鞘に戻した真剣を男に返す。男はうなづきながら刀を受け取つた。

「うむ。よくやつてくれた、勇敢な少年よ……君のおかげで部下の犠牲が少なく済んだ。礼を言わせてもらおう」

「ありがとうございます」

男は部下と共に物資を運んでいたのだが、途中で 奴ら の群れに出くわし、そこへあの口が出現したらしい。これから車で拠点である家に戻るそうだ。

「そういえば少年、君の名前は？」

「上坂……上坂京也です」

「名乗るのが遅れたな……私は高城 壮一郎（たかぎ そういちろう）。憂国一心会会長だ」

高城、って。これがお嬢の親父さんなのか。ああ……そういうや右翼の会長だつて言ってたつけな。

どうやら俺は、とんでもない人物のところに来てしまったようだ。

「う……」

どうにか気合で立っていたが、それもいい加減限界だった。エネルギーが切れた俺は、ばたりと地面に倒れる。そのまま意識は闇に飲まれていった。

第10話「反逆するところの意志」（後書き）

投稿遅れてしません！

これから展開をどうしようか迷いました。
感想を書いてくださった方、お気に入り登録してくれた方ありがとうございます。

感想や意見などありましたらい一言でも構いませんので、お気軽にどうぞ。

最後に、読んでくださった方全員に感謝を。

第1-1話「名前を呼んで」

あいつを『お嬢』と呼び始めたのは、いつからだつたろう。名前の理由なんて雰囲気がそれっぽいから、である。まったく、我ながら何というテキトー加減であろうか。

藤美学園きつての天才少女 高城 沙耶。

彼女は紛れもない天才だつたが、頭が良すぎるが故に周りを遠ざけてしまっていた。家の評判によつて周りはビビっていたのか、コータのようにイジメられることはなかつた。クラスには幼なじみの小室がいたが、今みたいに積極的に話しかけてくるワケじやなかつたしな。

きつかけは、1人でいるあいつがただ気になつたから……それだけだ。お嬢が可愛いから、という下心かとも考えたが、見た目だけなら可愛い子は他にもいたわけで。万年赤点ギリギリだつたバカな俺が話しかける相手ではないだろう。それこそ、住む世界が違うつてもんだ。

最初にあいつをその名前で呼んだ時、ずいぶんイヤな顔をされたのは何となく覚えている。なれなれしかつたのが気に入らなかつたのか罵倒もされたが、それからも俺はめげずに話しかけ続けた。少しづつ、少しづつ仲良くなつていつたのである。

お嬢がツンツンした態度をとるのは、防衛本能的なものなのだろう。

話す内容そのものが変わつていたかと聞かれれば、そうじやなかつた。普通の友人どうしが話すような他愛のないもの。お嬢は俺をバカと呼びつつも、決して絶対はしなかつたのである。

お嬢は俺にとって仲の良いクラスメイトになつた。小室とは積極的に話すことは少なかつたお嬢だつたが、それでもあいつのことが気になつてゐるのは俺でも分かつた。

応援してやるのも悪くない、それはそれで楽しそうだ。そんなこ

とを考えていた時期もあつたな。お嬢をからかうと真っ赤になつて否定するのが可愛くて面白かった。

まあ、今は無理だろうな。それを考えるだけで、胸が痛くなるから。

重い瞼を開けると、俺は知らない部屋でベッドに横たわつていた。散々暴れた後だというのに大した疲れすら感じられない。

いつたい俺は、どれくらい眠つていたんだろうか。高城会長の前でぶつ倒れてからの記憶がない。

周りを見回してみる。部屋の中に置いてある調度品にはどれも気品があり、高級そうなのが伝わってきた。俺が寝ているベッドも2人くらいは余裕で寝られそうなほど広かつた。

そういえば、服も身体も返り血でドロドロだつたはずなのに今は綺麗な白いシャツを着ている。俺が寝ている間に、誰かが着替えさせてくれたのだろうか。

「あ、京也お兄ちゃん起きたよ！」

部屋には俺のよく見知つた顔がいた。ありすは、眠りから覚めた俺を見て嬉しそうにはしゃいでいる。お嬢は傍らのイスに腰掛けたまま、目覚めた俺を見て硬直している。服装が変わつてあり、可愛い感じのする白いフリルのついた服に、黒いスカート姿だった。見た感じケガもなく元気そうである。仲間たちの無事な姿を見て俺は、ほつと胸を撫で下ろす。

「ありす、みんなを呼んでくるね！」

ありすは嬉しそうに部屋を飛び出して行つた。俺の暴れる姿を見たのありすの反応は以前と変わっていないよつて思えた。それは無邪気な子供だからなのかな。

部屋は俺とお嬢の2人きりになってしまった。ぎこちない空気が漂っている。どう反応すればいいのか分からぬ俺は、沈黙を守ることしかできないままに時間だけが流れしていく。

「……上坂」

静寂を破ったのは、俺の名前を呼ぶお嬢の声だった。お嬢に呼ばれることに、俺は妙な懐かしさを感じていた。離れていた時間はたつたの1日だというのに、こんな気持ちになるとは思つてもみなかつた。

メガネ越しに見えるお嬢の瞳は潤んでおり、今にも泣き出しそうな表情をしていた。それは俺にとって完全に予想外の反応である。

「お嬢、泣かないでくれ」

言葉は考えるまでもなく、自然に口から飛び出していた。

「えっ？ あたし、泣いて……」

信じられない、といった風にお嬢は自分の頬に触れる。瞳から零れている涙に気づいて戸惑いながらも途切れ途切れに言葉を紡いでいく。

「だって、アンタここに運ばれてからずっと寝たままで……せっかく会えたのに」

ぎこちない言葉は、だからこそ感情が込められているのが分かる。俺の胸が温かい気持ちで満たされていくのを感じていた。

「アンタが悪いんだからつ、助けるだけ助けて勝手にいなくなるなんて、許さないから……」

「でもさ、お嬢。俺は普通の人間じゃないんだよ」

頭に渦を巻く異常としか表現しようのない獸じみた暴力的な衝動。人間離れした身体能力を有し、興奮すると血に染まったような髪と瞳に変化する俺はどう見たつて人間というカテゴリから外れてしまつている。

かろうじて外見だけは人間を保つているとはいえ、狂つたまま戻れなくなつたら 奴ら のようになつてしまつだろう。抗うと決めた今でも、恐怖で手が震えてしまう。

不意にお嬢の腕が伸びてきて、俺の後頭部に回される。

「え？」

柔らかな感触が俺の視界をふさぐ。俺はお嬢に優しく抱きしめられていた。顔に弾力のある魅惑の膨らみが当たつている。お嬢の行動があまりにも唐突すぎて頭が回らず、上手く反応できなかつた。温かくて、良い匂いがする。

「アンタはアタシたちを命がけで助けてくれたわ。他の誰が何て言おうとアタシが保証してあげる。アンタは紛れもない人間だつて」

お嬢は人間であるかどうかさえ怪しい俺に対して温かい言葉ををくれる。その言葉は、何よりも俺の心に響いた。

「いて……いいのかな、俺は」
「当たり前じやない」

お嬢の胸の中で優しく抱きしめられながら、俺は守るという決意を新たにするのだった。

その後、ありすがみんなを呼んできた。宮本は白い服を着ており、

ケガが治りきっていないのか小室に肩を借りていた。

小室たちは話をどう切り出すか迷っているのか、微妙な沈黙が場を支配していた。俺は絨毯の上に両手をつき、声を張り上げた。

「……勝手に飛び出して、すまなかつた！」

肉を焼き焦がすほど熱された鉄板の上ではないが、俺は謝罪の意を示す為に地面に擦りつけるほど深く頭を垂れていた。いわゆる土下座である。みんなは驚き、声もないようだった。

「ねえ、京也お兄ちゃん、なんで謝つてるの？ 悪いことしてないよ」

「え……？」

「京也お兄ちゃんは、みんなを助けてくれたんだよ。だから、何も悪くないの！」

そう言つてありすは、俺に笑顔を向けてくる。子供だからこそ純粋で無垢な信頼が嬉しかつた。ジークもりすに続いてわんと鳴いた。場の空気が変わつたのを、俺は確かに感じていた。俺を非難するような視線などなく、いつも通りのみんながそこにいた。

「そうだな……上坂。らしくないぜ。確かにあの時は驚いたけどさ、みんなお前のおかげで助かつたんだ」

小室の言葉を聞いて、みんなが賛成するようにうなづいた。誰ひとつとして、例外はいなかつた。

「まつたく、急に何をするかと思えば……バカなんだから」

お嬢は呆れたように肩をすくめながらも微笑んでいた。

「そうだな、君は本当に大馬鹿者だ」

「上坂君らしいけどね」

「そうよね~」

冴子さんの言葉に続く宮本と静香姉妹も、穏やかな笑みを浮かべている。

「まあ、京也がムチャクチャなのは今に始まつたことじやないしね
「私たちに君を批難する気なんてないよ」

「一ータとケンジさんも、明るい表情をしている。拍子抜けするほどにあつさりと受け入れられてしまつて、俺は逆に戸惑つてしまつていた。」

「でも俺はこの通り、人間かどうかも怪しい状態だぞ?」

「確かにかなり変わつてはいるけど、上坂は上坂だ。奴らとは違つ。今だつて分かりあつことができてるじやないか」

仲間に對しての絶対的な信頼があるから、怯える必要などない。小室はそう言つたが、実行するのは簡単なことじやない。小室のそういうところは、素直にすゞごとと思つ。

「だいたい、一人で悩んで少しほはアタシたちを頼りなさいよ

「仲間なのだから一蓮托生だよ」

「ああ、今度は僕たちが助ける番だ。今度暴走しそうになつたら止めてやる」

まったく、みんなお人よしにもほどがあるだひ……悲しくもねえのに、涙が出てくるじやないか。

「おう、頼むぜ！」

それから俺の状態に関して情報をまとめることにになった。暴走時に髪と瞳が赤くなっていたことや、凶暴性が増すこと。爆発的な身体能力の増加などだ。体力も相当なものだったが、限界を超えるとブレイカーが落ちるよにぶつ倒れてしまう。現状で分かっているのはこんなところだった。

「上坂君の身体能力って、いまどれくらいなの？」

「とりあえず、素手で車をぶん殴つたらドアがぶつ壊れた」

「……アンタつてホント人間離れしてるとわよね」

お嬢を含め、みんなが呆れかえっているなかで、ありすだけはすごいと目を輝かせていた。

「まるでマンガみたいよねえ、はむ」

静香姉えがバナナを食べながらのんきな声で言つが、まったくもつてその通りだ。現在は髪と瞳の色が元に戻つている。

「とにかく、どんなことにも何かしらの原因があるはず。なにか心当たりはない？」

「そう言われてもなあ、じつこつ体質だと知ったのは昨日今日だぜ」

何かあつたとすれば、ガキの頃だらう。あの頃の記憶は妙にあいまいなのである。窓の外から人のざわめく音が聞こえてきた。

「なにやら表が騒がしいようだ」

「パパが帰ってきたから何かやつてるのかも」

俺たちは窓からベランダに移動する。ここもテーブルでお茶を楽しめそうなほどの広さがあった。屋敷の正面にある開けた場所には結構な人ばかりがきていた。こんなにもたくさんの生存者がいることを知つて俺は驚いた。

その中央に置かれている白い台の上に、1人の男が立つている。腰に日本刀を下げた眼光の鋭い男には見覚えがあつた。お嬢の親父さんである高城会長である。周囲はいかつい男ばかりだが、1人だけドレスを身に纏つた女性が混じつている。

「あれがアタシのパパ。正邪の割合を自分で決めてきた男よ

確かに田つきは鋭いし、雰囲気も只者じやなかつたのは間違いないが、自分の親に対してもうせつづじやないような気がする。

「じゃあ、あのドレス人は……」

「アタシのママよ」

エンジンの音を立てながら、高城会長のところに走つてくる1台のフォークリフトがあつた。運んでいるのは大きな金属のオリで、中に黒服を着た 奴ら が入つているのが見える。

「この男は土井哲太郎。四半世紀もの間共に活動してきた我が同志であり友だ！ 救出活動のなか部下を救おうとし、噛まれた！」

低く威厳に満ちた声が響かせながら、高城会長は鞘から日本刀を抜き放つ。オリを運んできたフォークリフトが台に横付けされた。オリの中にいる 奴ら は、ただ理性もなくうめきながら鉄格子にぶつかつている。

「我が友に最後の友情を示す！」

部下の1人がオリのカギを開けた。いまやただ暴れるだけの存在となり果てた 奴ら は、相手が誰かも分からずに高城会長に襲いかかる。飛び出してきた次の瞬間に 奴ら は首を一太刀で落とされた。

俺には、大切な友人に介錯をしているように見えた。変わり果てた友人をせめて自分の手でケリをつける。だが、それを大衆の中で見せる意図はなんだろうか。集まっている生存者の多くはただの一般人である。人殺しなど見慣れているはずもないのに、大抵の人間が顔を青くするのは当然の反応だつた。

俺の仲間も少なからず動搖しているようで、お嬢は衝撃的な光景に目をつむつっている。ありすはベランダの手すりが高かつたおかげで見すに済んだようだ。少なくとも、子供に見せるものじゃないな。

「さらばだ、友よ！」

友人と決別するように告げた高城会長は、首だけになつてもうめいている 奴ら の頭を踏み潰し、全員に向かつて宣言する。

「これこそが我々の『いま』なのだ！」

奴ら になつたものは無差別に人を襲う。そこには友人も家族も恋人であつても例外はない。だからこそ、倒さなければならぬのだ。残酷で、救いなどない。それがこの世界の現実だつた。

「生き残りたくば、戦え！」

結局のところ、大切なものを失わない為には戦うしかない。こうして殺すところをわざわざ見せたのはそのことを伝える為、という

ワケか。

「刀じゃ効率が悪すぎる……」

「そうか？」

刀の耐久力を弾丸の数と同じように考えればそう変わりはないだろう。あとは向き不向きの問題だ。冴子さんに持たせれば相当だろうが、コータが持つてあまり役には立たないという具合に。

「日本刀の刃は骨に当てたら欠けるし、3・4人も切つたら役立たずになるだろ！」

「そうとも言い切れないよ、平野君。技量のある人間が使えば継続的に十分な戦力となり得るのだ」

剣士として冴子さんの意見はもつともだが、コータは銃を否定されたように感じてしまったのかもしれない。俺の場合は力任せにやつてる部分が多いからコータの言うようにすぐにダメになっちゃうだろう。今の状態じゃ加減を考えないとすぐに折れてしまつ。素手で戦い続けるのはあまりにも負担が大きい。

確かに銃は強いが、近接武器と比べれば扱うことそのものは簡単だ。近接武器は折れたり、切れ味が落ちなければある程度は戦い続けることができる。今までの俺がそうだったよ。」

射抜くような視線を感じて、高城会長がベランダにいるお嬢を見ているのだ。

その後もコータは血脂などを指摘して冴子さんと論戦していくようだが、結局論破されてしまった。もうこの辺りでいいだろうと止めに入つた俺の手をコータは勢いよく払いのける。

「邪魔するな！ 僕は……京也みたいには戦えないんだよー！」

怒りの込められたコータの目を見て何となくだが、分かつてしまつた。コータは銃がなくなつてしまつことを恐れている。銃があるからこそ、戦うことができる。コータにとつて銃は命を守る為だけの道具じやない。自らの存在を確立させる大切なものだ。

「平野ッ！ アンタいい加減に……」

お嬢の制止も聞かずに、コータは大量の銃器を抱えて部屋から飛び出して行った。

「なんなんだ、あいつ」

小室はどうにもコータの気持ちが分かつていよいよだ。男なら誰かを守りたいと思うのは当然だわ。

「分からぬーか、小室？ あいつも男だつてことだよ」

「それは知つてるけど」

「あー、まつたくこのにぶちんは……俺はコータを追うぞ」「アンタは来たばつかだから、道が分からぬでしょ。アタシも一緒に行くわ」

「おう、頼む」

早くコータを連れ戻さないとな。あれだけ大量の銃を持ってウロウロしてゐるのを大人たちに見られると厄介なことになる。

俺たちはすぐにコータを追つたものの、屋敷はあまりにも広すぎてすぐには見つからなかつた。

「多分、こつちに来たはずなんだけど……」

お嬢にナビを頼んで迷い込んだのは和の雰囲気が漂つ庭園だった。

緑が豊かで大きな池もあり、錦鯉が悠然と泳いでいる。職人の手入れが行き渡っているのがよく分かつた。そよぐ風が肌を優しく撫でていく。こんな状況じゃなければ落ちついて心を休めることができただろうな。

「それにしても、広い屋敷だよなあ。本当に『お嬢様』だったんだな」

「なによ、いまさら？ お嬢お嬢言つてたのはアンタでしょ」

「いや、お嬢つてのはあくまで雰囲気から付けた愛称だからな」

「……ねえ、上坂。聞いておきたいことがあるんだけど」

お嬢が口にしたのは、これからのことについてだった。

俺たちは今、大きなグループと合流した。ここには頼れる大人という存在がある。もし留まるなら、しばらくの間はこれまでのようになんかでいることもできるだろう。正面切って 奴ら と戦う危険だつて格段に減るはずだ。

「気楽でいいわよ？ 戦力はそれなりにいるんだから、アンタも無茶しなくとも済むわ」

「確かに、な。小室はどうするつて？」

「まだ聞いてないけど……多分アイツはここを出でいくでしょうね」

小室と富本の家族はまだ街に取り残されている。2人はどれほど危険だと分かつていても両親を助けに行く為に街へ戻るははずだ。あいつはそういうやつだからな。その場合、俺たちチームは分離してしまう。

「だから、アンタの意見を聞いておきたいの」

「俺は、小室たちを助けてやりたいと思つてゐる」

家族を助けにいくにしても、ある程度の戦力は必要だろ？ 1人や2人じゃ無理がある。

今までメインで使っていた木刀は、度重なる酷使で限界を迎えており、いつ折れてもおかしくない状態だ。新しい武器をどこかで調達する必要があるな。武器さえ手に入れば、あいつらに力を貸してやれる。友人として、仲間として俺はできる限り手伝うつもりだつた。

「でも、それは俺の勝手だ。お嬢まで巻き込むワケにやいかない」

「なによそれ……」ここに残れ、つてこと？」

「ああ、ここより安全な場所なんてそう多くはないだろ？」

できることなら、一緒にいたい。最も近くでお嬢を守つてやれたらって思つ。だが、それだつて俺のわがままだ。守ってくれる両親んがいるなら、それに任せるべきだ。常識的に考えればそつだろ？ あれだけの修羅場をぐぐり抜けてやつと家族に会えたんだ。それがこのぶつ壊れた世界でどれほどの幸運か。失くすにはあまりにも大きすぎる。

お嬢は俺の言葉を聞いて、烈火の如く怒りを露わにする。

「ふざけないで！ アタシが戦力にならないから？」

「そうじゃない、俺は……！」

言葉に詰まつてしまつ。頭の中に疑問がわき上がつた。

俺はお嬢を『沙耶』をどう思つてゐるんだ？

大切な仲間 確かにそうだ。けれど、今はそれだけじゃない気がする。俺は……。

「『沙耶』に、死んでほしくねえんだよッ！ でも仕方ないだろ、守つてくれる両親がいるなら俺はもう必要ねえんだ！ せつかく生

きて両親に会えたお前に……泣いてほしくないー。」

「あつ……」

飾らざるに俺の気持ちを吐き出した。沙耶の顔からみるみるつらに怒りが消え失せ、嬉しさで満たされていく。

「やつと、名前で呼んでくれた……」

「やつして欲しいって、言つてただる」

暴走する少し前に、沙耶が微笑みながら言つていた。

「じゃ、じゃあアタシもアンタのことを名前で呼ぶわ」

「あ、おひ。好きにしろよ」

沙耶は豊かに発育した胸に手を当てながら、大きく深呼吸をしていれる。おこおい、メチャクチャ気合入ってるじゃないか。

「あ……京也」

耳まで真っ赤にしながら、俺の名前を呼ぶ沙耶。呼んだ後も俺の反応をうかがうように上目づかいでこっちを見てくるのだ。あまりにも可愛くて、抱きしめたい衝動に駆られる。

ああ、ちくしょう。何で名前呼ばれるだけでこんなに顔が熱くなつてんだよ、ワケわからねえぞ。悪いのは沙耶だ、こいつが可愛いからいけないんだ。

『なにを騒いでいるー。』

互いに赤くなっている俺たちのところへ、遠くから男の怒鳴り声が聞こえてきた。

「パパの声ね……行つてみましょー！」

俺と沙耶は急いで騒ぎの中心地へと向かつた。

「どうあっても銃は渡さぬつもりか

「ダメですっ、イヤです！」

庭の一角にある和風な離れの近くで、憂国一心会の黒服たちに囲まれていたコータは、その中心で高城会長と話し合ひの真つ最中だつた。高城会長のコータは地面に膝をついてガタガタ震えながらも、決して銃は手放さない。実際に向き合つた俺は知つてゐる。高城会長と向かいあうプレッシャーは相当なものだ。この場から逃げ出しえいないだけ上出来である。

「銃がなくなつたら、俺はまた元通りにされてしまつ！　自分にも出来ることがようやく見つかったのに！」

コータは涙声になりながらも、自分の意志をはつきり伝えようとしていた。顔は涙と鼻水でぐちゃぐちゃだし、メガネもズリ落ちてしまつてゐる。

「出来ることとは何だ？」

「そ、それは……」

「あなたのお嬢さんを守ることです！」

言葉に詰まつたコータの元に、小室が翻つて入つた。小室はコータをかばつよろに前に歩み出る。

「小室……なるほど。沙耶とは長に付き合ひだつたな」

「はい。ですが、地獄の始まりからずっとお嬢さんを守つてきたのは、平野と上坂の2人です」

「そいつの言つ通りよ、パパ！」

俺と沙耶も小室に続いて、ロータのやまに行く。

「京也に沙耶さんも……」

「君は……そ、うか、先刻の少年だな。田が覚めたよつて何よつだ」

高城会長から感じる威圧感が前より強こよつた氣がするのは氣のせいだらうか。

「ここまで運んでくだつたことを感謝します、高城会長」

「氣にあることはない。先に助けられたのはほりのほりだ」

それから続々と仲間たちが駆けつかる。冴子さんとあつすやジーグ、ケンジさん、ケガをしている富本も静香姉えに肩を貸してもらいながら現れる。ここに、小室チームが全員集合した。

「そ、うよ、このバカとどぶちんがいなかつたら……アタシは今、奴らの仲間だつたわ」

沙耶は自分の父親と対峙しながら、凜とした声を庭じゅうに響かせる。

「ここつが、ここつらが守つてくれたのー、パパじゃなくてねー！」

沙耶の言葉を聞いたコーダは、せりて両手から涙を溢れさせる。

「……そつか」

高城会長の表情は変わらないが、降りかかっていた威圧感が和らぐのを俺は感じていた。会長のかたわらにいる沙耶の母親は、どこか嬉しそうな微笑みを浮かべていた。娘の成長を喜んでいるのだろうか。

わざかに緩んだ雰囲気のなかで、黒服の男がやつてきた。どうやら生存者が徒党を組んで、騒いでいるらしいという話だ。それを沙耶に説得してほしいと頼まれたのである。

「なんでアタシがそんなことを……」

「我が娘は語らねばならないほど愚か者ではない！」

「沙耶、私からもお願ひするわ。パパや私だと、の人たちは警戒しきてしまつもの」

特に断る理由もない。助けてもらつた礼代わりになるか分からないうが、できる」とはやつてみるが。

「よし、そつと決まればさつと行こうぜ」

「い、一緒に行くよ！」

「僕も付合つよ」

俺とお嬢、それからコーダと小室が加わつて4人で説得に行くことになつた。宮本もついてこようとしたが、静香姉えに薬を塗るからとドクターストップをかけられた。悲鳴を上げながら逃げ回る宮本を静香姉えが追いかけるといつ、非情に面白い光景が見れた。

薬を塗られるのは、そんなに痛いもんなんだろうか。

冴子さんは、高城会長の頼みでそつちに付き合つてもうひとつになった。沙耶の母親はジークにプレゼントがあるらしい、ありすとジーク、ケンジさんはそつちについて行つた。

「上坂君、と言つたか。君にも後で話がある。そちらの問題が片付いたら私のところへ来てくれるかね」

「はい。分かりました」

高城会長から直々にお呼び出しをされてしまった。とりあえず、先に騒いでるアホどもを黙らせに行くとしようかね。

「コーダ、説得に銃はいらねえぞ。無駄に刺激しちまつてもアレだし、部屋に置いてくれるか」

「あ、そうだね」

今回は戦闘するわけじゃないからな。俺たちがやるのは、あくまで説得だ。下手に武器を持つてのを見られると面倒だ。武器を一旦置いてから、俺たちは問題の起こっている場所へと向かった。

高城会長が演説をした台の近くで、ざわめいている人だかりがつた。集まつた大人たちはざつと見積もつて20人以上いる。

「ずいぶん多いな……」

「まあ、こんだけものが見えてない大人が多いってのは問題だな」

「そうだね」

「とにかく、説得するわよ」

こうして話し合いが始まつた。ここに集まつている大人たちは、ニュースで放送されていた殺人病の情報を信じ切つていて、殺すなんて人道的に間違つていて。治療してあげるべき、という意見だつた。

とりあえず、バカかと言いたい。治療するにしたつて 奴らをどうやって大人しくさせる気だらうか。基本的に会話も通じないつてのに。 奴らはこっちを見境なく襲つてくるだけだ。イレギュ

「一の中にはおぼろげながら話せるやつもいたが、あれは例外だろ。沙耶は集まつた大人たちに、殺人病は政府の流したデマであると告げ、奴らは人間とは別のものだと説明した。

まあ、そこまではよかつたんだが……平和ボケしてる連中がそれを信じるはずもなかつたのである。

「信じられるワケがないだろ？、あれは新種の伝染病のよつなものなんだきっと！」

「實際はそうかもしけないが、どつちにしたつて正当防衛は成り立つだろ？、奴らは人間を殺す氣で襲つてきてるんだからな。

「死んで動き続けるものに納得の行く説明があるワケないじやない！」

「だが、實際に動いているんだから何かしらの理由があるはずだ」「そうよ、理由もなしに起ころることなんてないわ！」

沙耶と主に話している中年の男と田の細いオバサンは、常識を盾に食い下がつてくる。まあ、非常識の塊がここにいるワケだが。沙耶は、たわ言を正論でねじ伏せてオバサンたちを黙らせた。流石と言ふべき手腕だった。

「アタシたちは、奴らに食われず生き続けるしかないの。その為にどうしたらいいかはさつきパパが説明してくれたでしょ？」

「……そういふことね」

オバサンは意を得たり、とばかりにイヤな笑みを浮かべる。

「みなさん聞いてください！この子は、殺人を肯定する男の娘で私たちにも殺人者になれと言つています！」

「あの……いつたい何の話をしてるんですか？」

小室の言っていることはひどくまともだ。それすら、現実から目をそらした大人たちには通じない。怒りの込められた目でにらみつけてくる。

「子供が口を挟むことじやない！」

子供か、あんたたちよりずっと現実が見えているんだがね。その後も大人たちは、獣のようなヤクザには任せられないだのと言っていた。助けてくれたはずの相手をバカにしているのを見て、俺の中にふつふつと怒りがこみ上げてくる。

「沙耶、ちょっと代わるぞ」
「え？」

俺はヒートアップした大人たちのほうへ向かって歩み寄る。怒りはできる限り内に抑え込んだが、それでも人を殺しそうな目つきになってしまう。顔は笑っているが、目が笑っていない状態だ。俺を見た大人の1人が悲鳴を上げる。

「ちょっといいですかねえ？」
「な、なんだキミは……？」

怪訝そうに俺を見る大人たちの無遠慮な視線には構わず、俺は続ける。

「聞いておきたいことがあるだけです。これから具体的にどうするんですか？」

俺の視線に耐えながら、オバサンは話す。思つたより根性あるな。

「そ、そうね。ボランティアを集めて殺人病の人達を治療しましょう」

「殺人病の方は、どうやって連れてくるんですかね？」

「そ、そんなの外にいけばいくらでもいるじゃないか」

「殺人病の方は会話が通じませんが、それについての解決策は？」

「た、高城会長のほうに助力をお願いして人員を割いてもらえば…」

…

「それはつまり、力ずくで連れてくるってことですよね」

淡々と質問を繰り返す俺に、騒いでいた大人たちはついに黙つた。

「あなたたちがどうしようと勝手ですが、…助けてもらつた相手をバ力にするのも大概にしてくださいね。『大人』なんですから」

まあ、こんなものか。結局、こいつらは現実が見えてないだけだ。これ以上話しても時間のムダだろう。俺は沙耶たちとその場を離れたのだった。

「アンタ……ただのバカじやなかつたのね」
「ひつでえな、オイ！？」

沙耶は心底感心したように目を丸くしている。なんだろう、せつかく上手くいったのにこの反応は。小室にコーナーまでうなづいてやがる。お前ら、人のことをなんだと思ってんだ。まるで俺が脳筋みたいに……まあ、否定はせんが。

「京也、怒つてる？」

「ああ、すっげームカついた」

命を助けてもらひつておいて、その相手すらバカにしてるんだからな。ああいうバカどもの面倒まで見切れない。

「でも、ヤクザと右翼つて似たようなものだから」

「つちは違うのよ、利権右翼とかヤクザには命を狙われたこともあるわ！」

「で、でも、活動にはお金がたくさんありますよね？」

「私も天才だけど、ママも天才なのよ」

沙耶の母親は、知らない人間がいないほどの凄腕トレーダーだつたらしい。高城会長と結婚してからは、その才能をフルに發揮して財産を100倍に増やしたそうだ。金つてのは集まるところには集まるもんなんだな。

「なにも見て来なかつたのか、あの連中は」

「現実から目をそらしてゐ、つてことだろ」

「ちょっと分かるけどね、あの連中の気持ち。人間つて見たくないものは見ようとしないから」

確かにそうかもな。俺だつて自分の身体がおかしくなつていてることを認められなかつた。とことんまで追い詰められなければ、人間つてのはそう簡単に現実を直視することができない生き物なのかもしない。

小室も思つところがあつたのか、少しだけ表情を曇らせてゐる。

「現状を元に戻そつとするのは……当然の反応つてことだな

「なるほどなあ……勉強になつたよ」

納得しながらうなづく小室を見て、笑う俺につられてお嬢とトー

夕も笑い声を上げる。

小室は、変化を素直に認める事のできる人間だ。だからこそ、俺たちのリーダーたり得てている。

「な、なんだよ？」

「そういうお前だから、俺たちのリーダーってことだよ！」

「はあ？」

分かつてないな。まあ、それでこそ小室だと言えなくもないか。

『い、いたいのだめえええつ！』

上から富本の情けない悲鳴が聞こえてきて、俺たちはみんなで顔を見合させて大笑いしたのだった。

第1-1話「名前を呼んで」（後書き）

更新遅れて申し訳ありません！

感想をくださった方にお気に入り登録してくださった方、ありがとうございます。

上坂がチームに復帰しました。あとはようやくヒロインの名前を呼びましたね。だいぶ強引に話を進めましたので、見ずらい点などがあるかもしれません。意見や感想などがありましたら一言でも頂けると嬉しいです。

さて、原作ではそろそろ冴子さんが村田刀を入手するところですが、上坂にも新しい武器が必要になつてきました。何か良さげな武器があればいいんですが……。

最後に、読んで頂いた方に感謝を致します。

第1-2話「せめて、後悔しない選択を」

騒いでいた大人たちの『説得』を終えた俺は、沙耶に高城会長のところへ案内してもらひ。沙耶の住んでいる屋敷は広すぎて、俺みたに不慣れな人間が迷うには十分すぎるからだ。

高城会長が待っていたのは、屋敷の奥のほうにある場所だつた。ここは他の部屋とは違つて和室である。『敬天愛人』と書かれた掛け軸が飾られており、下には横に置かれた日本刀があつた。まるで、時代劇で出てくるような部屋みたいだ。

俺と沙耶は、畳の上に置かれた座布団に正座で腰を下ろし、胡坐をかいだ高城会長と向き合つている。

「わざわざ呼びつけたのは、他でもない。君自身について聞かせてくれるかね」

「そうだよな、でなければ忙しい身分の人が俺をわざわざ呼ぶわけもないか。

高城会長と初めて会つたのはDと戦つた時だから、俺の髪と目は赤く発色していた。その上、ただの高校生が日本刀一本でDみたいな化物を倒したのだ。ワケが分からなくて当然だろう。

俺は、現時点できることをできる限り高城会長に話し始めた。俺の身体に起こっている異常。人を越えた身体能力や、これまでに出会つたイレギュラーな奴らについてだ。

「……まるで、夢物語のような話だな」

話を聞いた高城会長は、訝しげな表情を隠せないようだつた。

「でも事実よ、パパ。こいつの力は見たんでしょう。身体が変化した

のも何かしらの理由がきっとあるはず。だけど、今の状況じゃそれを調べることもできないわ」

「ふむ……」

沙耶の言葉を聞いた高城会長から放たれる威圧感が、鋭さを増したのを俺は感じた。高城会長が一瞬で後ろに置いてあつた日本刀を掴み、刀身を鞘から引き抜く。居合のように俺の首筋に向かつて走らせる。

「さ、京セツ?!

驚く沙耶とは対照的に、俺は表情を変えることもその場から動くこともせずに、高城会長の動きを見ていた。日本刀の煌く刃は、俺の首筋に触れる寸前の位置でぴたりと止まっている。達人だからこそにできる芸当だった。

「どうして動かなかつた?」

「会長の剣に殺氣を感じなかつたからです」

威圧感は増したが、俺を切ろうとする意志というか、殺氣を感じられなかつたのだ。そして、高城会長が理由もなく人を切るとも思えなかつた。だから俺は動かないという選択をしたのである。

「はははっ、見抜いていたか! 面白い少年だ!」

高城会長が豪快に笑いながら、日本刀の鞘に刃を納める。沙耶が安心したようにほっと息をつく。再び腰を下ろした高城会長の表情は、和らいだものになつていた。

「大した胆力だ。これならば、今まであの地獄を生き抜いてきたと

「……も頷ける。君は、これからどうするのかね？」

「仲間の両親は、まだ街にいます。恐らくは助けにいくでしょう。どれほど危険だとしても」

高城会長は、黙つたまま俺の言葉を聞いてくれている。

「こんな、人間かも分からぬ自分を沙耶さんや小室たちは『仲間』だと書いてくれたんです。だから、自分は自分を信じてくれる仲間を守る為に力を使いたい。そう思つてます」

例えこれが、人の道から外れた化物の力であつたとしても構わない。俺にものであるのなら、どんなものであつても俺の目的の為に、使わせてもらうだけだ。

「……友の為に剣を振る、か。気に入つた！ ならば武器がいるだろ？ 蔵にあるものを持っていくがいい」

「ありがとうございます」

俺は、高城会長に深々と礼をして和室をあとにした。

「ハア……びつくりして心臓止まるかと思つたわよ」

「もし沙耶がぶつ倒れたらマッサージと人工呼吸は俺がやつてやるよ」

「ば、バツカじゃないの！？」

「はつはつは！ いてえッ！？」

半分冗談混じりに言つたセリフに、顔を赤く染めた沙耶のキックが尻を蹴飛ばしたのだった。

高城家の蔵へとたどりついた俺たちは、カギを開けてもらつて中に入った。薄暗い蔵はどこか埃っぽい空気が漂つている。蔵には日

本刀を中心に、槍や甲冑など様々な武具が揃っている。これだけあれば戦でも始められそうだと思いつながら蔵の中を物色していると、隅のほうに置いてある白い布に包まれたものを見つけた。

「こいつは……？」

何故かそれが気になつた俺は、布を取つてみた。

それはあまりにも無骨で、一見するとただの鉄の塊にも見えた。刀身の長さは2メートルに近く、俺の身体くらいはある上に幅もかなり広い。あまりにも規格外の大きさを持った武器だった。

刃の造りなどを見ると、まっすぐな刃紋のようなものが見えるから一応は日本刀なのだろうか。ナタの刃を大幅に分厚くして、かなり巨大にしたような感じである。

確かに、マンガで似たようなものを見たことがある。これの名前は。

「斬馬刀か」

馬すら切り捨てると言われた超重量の武器だ。鎧を着ている相手すら関係なく両断するが、こいつはその中でもぞんざに桁外れな気がする。

俺は、柄を力強く握り巨大な斬馬刀を両手で持ち上げる。見た目からそうだったが、相当な重さだ。前の俺なら持ち上げることすら相当に難儀しだろう。両腕に確かな重みを感じる。

鈍い光を放つ刃は厚く、とても頑丈そうだ。振れば奴らを真っ一つにすることができそうである。これならかなり無茶な使い方をしてもそう簡単に壊れはしないだろう。奴らのような化物と戦う俺にとってこの上なく『向いている』武器だ。

「お気に召したかしら？」

「ああ、こいつにするぜ」

「はいはい。まあ、こんな重いものアンタ以外には使えないか」

これでまた沙耶やみんなを守ることができる。鞘はないよつなので、背負うよつにして帯刀することにした。俺は斬馬刀の刃に布を巻き直して蔵から持ち出した。

こいつして俺は、新たなる得物を手に入れたのだった。

部屋に戻った俺は、屋敷を出る為の準備を整えている。斬馬刀を担ぐ為の皮紐は用意してもらつたので、引っかければ持ち運びは何かなりそうだ。

俺は部屋のテーブルに立てかけられた2本の木刀を見る。度重なる戦闘でボロボロになつてしまつた俺の武器。地獄が始まつてから一緒に駆け抜けてきた相棒はもう限界だつた。だから、ここに置いていく。

「今までありがとうございました。助かつたぜ」

こいつがあつたから、初めて 奴ら に囮まれた時、沙耶とコータを守り切れた。数え切れないほどの 奴ら を倒してきた。感謝を抱いたまま、相棒に背を向けて部屋を出た。

かつての相棒との別れを済ませた俺は、正面門があるところへ向かつた。既に小室チームは汎子さんを除いて全員集まつていた。

小室から話を聞くと、両親を探すので街に戻るらしい。宮本も一緒だ。親孝行な小室のことを気に入つた高城会長は、小室の為に乗り物を用意してくれたらしい。

8輪の「ゴツい水陸両用のバギー」が停まつていた。しかも、軍用モーデルらしい。またすごいものをくれたな。

「どうだい、なかなかだろ?」

「う、運転できるかな」

バイクは乗ったことのある小室も、さすがに不安そうだった。松戸さん、と呼ばれたメカニックの男性は心配なことばかりに笑つて呟つ。

「バイクを無免でいけんだる、基本は同じだ」

松戸さんから説明を受けた小室は早速バギーに乗り込む。アクセルを回転させてバギーを勢いよく走らせる。馬力の強さに驚きつつも、何とか転ばずに運転してみせたのは流石と言つべきだろつ。

「いづやいーな！」

「いこつなら 奴ら をぶつ飛ばして進めそつだ」

面倒なら水の中にも入れるそつだ。といつよりも可能なうば公園や河原を走つたほつがいいらし。舗装された道ではタイヤの水かき用の山がすぐに崩れてしまつとのこと。

「本当に2人だけで行くつもりなワケ？」

「僕と麗の親だからな、沙耶たちに迷惑はかけられないよ」

厳しい表情で問いかける沙耶に、小室は仕方ないと言つた感じで返事をする。俺は小室の背中をぶつ叩いた。

「ぐ……か、上坂？」

「なあに水臭いこと言つてんだ。だいたい、2人だけでビーやつて親御さん救出するつもりだよ」

「確かにそうだけど……上坂、ついてくるつもりかー？」

「おいおい、何のためにこんな重いもん持つてきたと思つてんだ」

そう言つて俺は、背中に背負つた斬馬刀を見せる。今は刃の部分を白い布で巻いてある。

「おつきいねー！」

「わん！」

ありすが歓声を上げる。小室たちは俺の新しい武器に驚いているみたいだ。

「お前には驚かされてばっかりだな」

「ちつたあ役に立てると思つぜ。だから俺も連れていけ」

「やつぱり……アンタも行くのね」

沙耶の表情はどこか悲しそうだった。俺は努めて明るく笑いながら言つ。

「らしくねえぞ、沙耶。死ぬワケじゃねえ、『必ず』生きて戻つてくるんだ。だから待つてくれよ」

「……いいわ。絶対だからねっ！」

冴子さんがやつてきたのは、ちょうどその時だった。服装が変わつていて。上着はウチの制服だが、タイトな黒のスカートには深いスリットが入つていた。黒いガーターストッキングからのぞく白い太ももが実にいいバランスである。脚と関節には黒いサポーターが装着されていた。凜々しさの中にエロスが漂つ格好の冴子さんを、宮本がジト目で見ている。

「なんてーかさ、狙つてない？」

「いや、ありや天然だろ」

「「つわわわ……」

富本の言いたいことは分かるけどな。本人に自覚はないだろ？
ほら、冴子さん小首を傾げてるぞ。

「私も連れて言つてもらえるかな」

「だから、私たち……！」

「さつき上坂君が言つた通りだ。この家族を救出するにも人数は必要だよ。私も役に立てると思う」

冴子さんは腰に帯びた日本刀に手をやつて存在を主張する。村田刀むらたとうという名刀らしい。冴子さんも武器を手に入れたのか。木刀ですらかなりのものだったのだから、この人が真剣を持ったたらどれほど強いのだろうか。一度戦つてみたいと思つてしまつのは、やつぱり何かに影響されてるんだろうか。

「だつてさ、どうするヨリーダー？」

小室は少し困つたような表情を浮かべながらも、俺と冴子さんを連れていいくことに同意した。

こうして、俺、小室、富本、冴子さんを加えた4人のメンバーで小室と富本の両親を探しに行くことになつた。高城会長がここを発つのは2日後だと言つていたらしくから、それまでには戻れるようにしないとな。

「んじや、あとは頼んだぜコータ

「任せてよー！」

静香姉えにありす、ケンジさんたちには沙耶と一緒に残つてもらつ。また会つまでしばらくお別れだな。

「あーっ、やつたやつた思い出したあ！」

静香姉えが嬉しそうに飛び跳ねている。嬉しさのあまり、ジークをだっこしているありすを胸に抱きしめていた。巨大な胸で溺死寸前のありすとジークは苦しそうだ。なんだあの天国と地獄。

「どうしたよ、静香姉え？」

「やつと思い出したの、お友達の電話番号…。」

「あー、やつと思い出したのか、南さんの番号」

南さんの番号は俺の携帯にも登録されてたんだが、バッテリーがなくなつてたから調べようがなかつた。静香姉えも携帯とか学校に忘れてきたせいで今まで思い出せなかつたんだね。」

「友達って……銃とかハンヴィーとか持つてた人ですか？」

「うん、S A Tの隊員だから合流できたらすごいわよ～」

戦力としても魅力的だが、南さんのマンションで色々なものを借りてるし礼も言つておきたいところだ。おかげをまで、ここまで生き残れたんだ。無事であつてほしいんだけどな。

「京君～、電話電話～」

「俺のはバッテリー切れだ。小室持つてねえ？」

「ああ、それなら……」

小室から携帯を借りようとしているが、いきなり宮本がものすごい勢いで飛び出して行つた。何事かと目を向けると、門のほうに藤美学園のマイクロバスが停車しているのが見えた。バスの周りには、俺がぶつ飛ばした角田とかいう金髪や紫藤に賛同していた生徒たち

の姿があった。そして、当然のことながら紫藤もいる。にこやかな笑みを浮かべながら、憂国一心会の黒服を着たそこそこ偉そうなチヨビ罇のおっさんと話をしている。

「よくもまあ、ここまでたどり着けたモンだ」

俺も人のことは言えないだろ？が、悪運強いなあいつ。

「いやあ、こんな時に紫藤代議士の子息をお助けできるとは。たいしたもので、学校からここまで生徒たちを連れて脱出されるとは教師の鑑ですね」

紫藤って、代議士の息子なのか。だからなのか、黒服の態度が妙に媚びてる感じがするのは。

「こちらも大変なのはわかつていますが……生徒たちだけでも助けていただけないでしょうか？」

その態度は、知らない人間が見れば生徒思いの優しい教師だろ？まあ、俺たちは本性を知ってるから感動も何もあつたもんじやないが。大したものだよ、演技もここまでくれば賞賛に値する。

「ずいぶんどう立派じゃない。紫藤せ・ん・せ・い？」

宮本は、一直線に紫藤のそばへ走って銃剣を装着したライフルを紫藤の顔に突き付けている。あと少し動かせば、紫藤から真っ赤な血が流れ出すだろう。紫藤の表情が凍りついている。死んだはずの生徒が生きて目の前に現れた上に、自分を殺そうとしているんだから無理もない。

紫藤を見る宮本の瞳は、ひどく冷たかった。いつ殺してもおかし

くない。やつ思わせるだけの雰囲気が今の富本からは感じられた。

「み、富本さん。よぐ」無事で……」

自分で見捨てておいて、白々しいにも程があるだろ。俺たちは富本がどうして紫藤を憎んでいるのか、知ることになる。

富本の父親が紫藤議員について調べていたこと。その父親が娘を留年させて泣いたということ。成績には全く問題がなかつたはずの富本のデータを改ざんできたのは、紫藤だけであるということだった。大した小悪党じやねえか、紫藤。

今まで、富本は復讐心を抑えこんできた。父親がいつか紫藤議員を逮捕できれば紫藤も法によつて裁かれる。

「でも、もつ……ッ！」

だが、世界はぶつ壊れてしまった。抑え込んでいた感情を止めるものはなくなつてしまつたのである。銃剣の切つ先が、わずかに紫藤の肌を破り、一筋の血が流れ出す。周りの人間たちが集まつてきて、一気に空気がざわめく。

「警察官の娘でありながら、殺人を犯すつもりですか？　は、犯罪者になると？」

「あんたになんか言われたくないわよッ！」

「ならば、殺すがいい！」

重く響いた高城会長の声が、騒がしかつた周りを一瞬で静まり返らせた。高城会長は威圧感を振りまきながら登場する。紫藤の父親とは関わりがあるらしいが、今となつては無意味であると切り捨てた高城会長は、富本に告げる。

「望むなら、殺せ。むろん、私も必要があればそうする」

殺人を肯定する言葉に、わざと騒いでいたオバサンやおっさんが意見しようとするが、高城会長の眼光で射抜かれて黙つた。

高城会長は明確な答えを持つている。それは、人を率いるものとして必要なものだと思つ。まったく、ただでさえ余裕がねえのに人の生き死にまで責任を持たなきやならねえのか。つづづく子供じやいられねえ世界だよ。

高城会長の言葉を聞いて、富本の瞳に少しだけ迷いの色が混じるのが見えた。富本を止めようと駆け出す小室の肩を冴子さんが掴んで止める。

「冴子さん……」

「富本君は自分で決めなければならない」

冴子さんは分かつっている。俺たちにあいつを止める権利なんかないつてことを。沙耶は動かない俺を見て問いかけてくる。

「アンタは止めないの？」

「選ぶのは富本だ。^{アイツ}富本には紫藤を殺すだけの理由がある」

俺らにできるのは、紫藤を殺すにせよ、殺さないにせよ 選択したあいつを仲間として受け入れてやることくらいだ。

だけどな、富本。殺したら、お前は大嫌いなあいつを死ぬまで背負わなきやならないんだぜ？

死の淵に追い込まれた紫藤は、額から冷や汗を流し、口の端を吊り上げながら笑みを浮かべて叫ぶ。

「いいでしょ、殺しなさい！ 私を殺して、命ある限りその事實に苦しみ続けるがいい！」

それが自分の『えられる最高の教育である』と、紫藤は両手を広げる。富本が決断するまでの時間は数秒だったが、ひどく長く感じられた。

結局、銃剣は紫藤を貫くことはなかつた。富本は復讐を天秤にかけた上で、紫藤を『殺さない』という選択をしたのである。紫藤に背を向けて去つていく富本に、高城会長が声をかける。

「それが君の判断か？」

「殺す価値もありませんから」

「それもまた、良し！」

吐き捨てるよつに言い放つた富本を見て、高城会長が大声で笑っている。紫藤は怒りで拳をわなわなと震わせながら、顔を歪ませていた。

「お前たちは去れ！　お前の生徒たちもな！」

高城会長の一聲で、紫藤と生徒たちはバスに戻されて再び奴らの徘徊する街へと送り返されるのだった。

「許されざる行為だと思いますか？」

バスに押し込められている紫藤たちを眺めていた俺と小室に、沙耶のお母さんが問い合わせてきた。同じような立場に置かれたならどのような選択をするか、ということか。小室は複雑そうな顔をしながら答える。

「……やっぱり、わかんないです。すみません」

「これまでなら、その態度を褒めてもいいが……生き残りたくば大

急いで学ぶ」とだ

「あ、はい」

「あなたはどうかしら、上坂君？」

「どう行動するにしても、後悔しない選択をしたい。そう思つてます」

もし、殺すと決めたなら殺す。あとで後悔はしない。自分の心に正直にあること、それが俺の考え方である。

「己の心に純粹である……か。よく答えたが、人を率いるには向いていないな

「ふふつ、そうですね」

「ええ、自覚はします」

だから俺は、小室を支えていくつもり。彼らのコーダーには成長してもうわんとな。

「麗……あのや」

富本を慰めようとした小室を、富本は拒絶した。振りかえった富本の瞳は、涙で濡れている。

「慰めないで……それだけはイヤなの。紫藤のことを相談したい時だつてそうだった。だから私、永に話して……」

「……ツ?」

なるほどね、これで色々と腑に落ちなかつたことが理解できたぞ。富本が井豪と付き合つた理由とかな。

「でも、もういいわ。これで終わつた。あとは『これから』がある

だけよ、大変そうだけね

涙を拭いながら、富本は笑顔でそう言つた。こうして、富本の起こした騒ぎは一応の解決をみせたのである。

「パパ、見えないよ~」

「ああ、ごめん。もう大丈夫だよ」

富本が殺人するかもしぬなかつたからケンジさんはありすの目を隠していたのか。ナイスな判断だが、ありすは頬をハムスターのように膨らませて「立腹のようだ。

「なあ 静香姉え、電話かけんじやなかつたのか」

「あ、そろそろ……えーっと、ここが1だから」

静香姉えは、小室の携帯を借りて指で1つ1つボタンを押していく。もどかしさのあまり、手伝つてやりたい衝動に駆られる。

「俺がやろうか?」

「わからなくなるから、だあめ

「さいですかー」

どうにか番号を押した後、ややあつてから電話がつながつた。

『もしも……』

「あーリカあ、生きてたねー! あたしも京君も色々大変だつたんだけど……」

『ああ、弟君も無事なのね。だつたら大丈夫か……今どこにいるの、あたしの部屋?』

『あそこはもうダメ。ゴメンね、勝手に鉄砲とか借りちゃつて』

『それはいいから、今ビニに』

どうやら、南さんも無事のようだ。知り合いの生存が確認されて嬉しい。静香姉えの表情もすこく明るい。安心していたその時、空が光った。夕暮れ時のはずが、一瞬だけ真昼のような明るさに包まれたのである。

ひどく、嫌な予感がした。不安を後押しするよひよひ、不快な音を立てて通話が突然に途切れ。

「え、もしもし、リカあ？！」

そして、地獄のような状況はさらに加速していく。

第1-2話「せめて、後悔しない選択を」（後書き）

前回の投稿から非常に間が空いてしまい、申し訳ありません。
仕事が……仕事さえなれば（泣）
と、言い訳はこれくらいにしておきます。

さて、新しい武器の入手と紫藤のイベントが終了しました。アニメ版だと高城家脱出までなので次で1クール目が終わりってところですね。

お気に入り登録してくれた方、ありがとうございます。
このような未熟な作品を応援してくださるみなさまには、いつも感謝しております。もっと文才が欲しい今日この頃です。
誤字・脱字、おかしいところなどありましたらピリツケ。
最後に、読んでくださった方に最大限の感謝を。

第1-3話「これで終わりじゃな」

夕方の空に瞬いた光は、花火のよつて弾けてすぐに消え失せた。妙だったのは、火薬の炸裂する音が一切しなかつたところである。なんだつたんだ今のは？

「えへへ。小室君」めん、ケータイ壊れちゃった」「ええ～」

静香姉えはすまなそうに小室の携帯を返している。いくら静香姉えが機械に対して無器用だとはいっても、こんなに簡単にぶつ壊れるもんだろうか。しかも普通に通話をしている最中だつたのに。沙耶も何やら考え込んでいる顔だ。

俺は周囲の状況を観察することにした。

屋敷で作業に使つていた車はつこさつきまで動いていたのに、現在はモーターすら回らず完全にエンストを起こしているようだつた。ペースメーカー使つていた男が胸を押さえながら倒れ、妻らしき女性が周りに助けを求めて叫んでいる。

「こんなにっはんに色んなことが起るなんて……」「偶然にじけや出来過ぎだな」

嫌な予感をひしひしと感じながら、俺は考える。ペースメーカーの故障、突然のエンストに携帯電話の切断。そして、これらが同時に発生したということが何を意味するのか。

「停電と同時にヤヒが全部死にましたー」

高城会長の部下が焦つた様子で報告しているのが聞こえてきた。

沙耶が、なにか思いついたのか富本に指示を飛ばす。

「富本、銃のディレクターサイト覗いてみて。あなたのはH-C制御のはずだから」

「うそ」

「ディレクタのは、スコープにつけてる照準のことだよな。富本が銃剣付きのライフルに取り付けたスコープを覗き込むと射線上にいた沙耶が慌てて飛び退く。

「ディレクタは見える?」

「ん~、見えない」

「やつぱつ……」

「じつこじつこじつたよ、沙耶」

見たところ、ノータのまつりこじてるスコープは問題なく動いているようだ。

「アンタなら、原理は分からなくても勘で気づいてんじゃない?」

「さっきの光で電子機器がぶつ壊れた、ってのか」

「やつよ……パパ、計画を立て直さないとダメ! これはきっと

「

沙耶が高城会長に何か言おうとしたちょうどその時だった。門のほうから男の悲鳴が聞こえてきた。

「は、入ってきたあああつ!」

屋敷の外から駆け込んできた1人の男がいた。男は必死な形相で来るな来るなと連呼しながら逃げ込んでくる。しかし、門に足を踏

み入れたところで、背後から襲いかかる 奴ら に肩を掴まれ、そのまま身体を食いちぎられてしまった。

奴ら だ。それも1匹や2匹じゃない。門の外にいる 奴ら は数えるのが巴からしくなつてくるほどの大群で押し寄せようとしていた。

「門を閉じよ！ 急げ、死人どもを中に入れるな！」

高城会長の判断は早かつた。状況を察知するやいなや、素早く部下に指示をする。

「会長！ ですが、それでは外にいる連中を見捨てる事に……」「今閉じねば全てを失う、やれッ！」

有無を言わせぬ口調で命令を下す。これが、人の上に立つ人間といふものか。どこまでも合理的で、冷徹にさえ見える判断。自らの迷いが全員を殺すことになると理解しているからこそその行動なのか。高城会長の激に、浮き足だつていた会長の部下たちが一斉に動き始める。すぐさまリモコンの遠隔操作で屋敷の門を閉じようとするが、故障していく動かないようだつた。

「クソ、こんな時にツ……誰でもいい、門を閉めろ！」

高城会長の部下は数人がかりでどうにか門を閉める。格子の隙間から血に濡れた腕がいくつも突き出している。門を突破して 奴ら が1匹入つてしまつた。

「じ、銃を持つてゐるんだから、早く何とかしなさいよ！」

急に訪れた危機に直面してヒステリックに叫んでいるオバサンの

雑音が耳障りだ。俺はコータに話しかける。

「やれるか、コータ？」

「誰に言つてるのさ！」

俺に言われるまでもなく、コータは既にライフルを構えて銃口を侵入してきた奴らへと向けている。ゆらゆらと緩慢な動きで歩いている奴らなどコータにとって動かぬ的に等しいのだろう。騒がしい空気を切り裂いて1発の銃声が屋敷に轟く。コータの銃撃は確実に侵入してきた奴らの頭部を破壊した。頭の半分が弾け飛び、力を失つた奴らの身体が閉じた門にぶつかりながら崩れ落ちる。

「ま、こんなもんかな」

非の打ち所がまるでない、見事なヘッジショットである。これで一時的にこの辺りは安全地帯になつた。

「会長、奥様、得物をお持ちしました！」

黒服の1人が、銃器を会長たちに手渡している。自分の武器を受け取つた沙耶の母親は、動くのには邪魔だとばかりにドレスの裾を自らの手で破り、太ももにハンドガンの付いたベルトを巻きつけた。腰にはマシンガンまで携帯している。

「ママ……」

「ひゅう、豪快だねえ」

戦闘準備を完了した沙耶の母親は、高城会長に銃を渡そうとするが銃は不要だと断つている。刀のみでやるつもりらしい。そうして

余った銃が沙耶のところへ回つてくる。銃身の先端部分が細くなっているのが特徴的なハンドガンだった。丸いタイプのマガジンも一緒に手渡している。

「ルガー P08ストックとドライマガジンまで……」

「一タは目を輝かせている。こんな状況でも相変わらずなやつだ。いきなり母親から銃器を渡された沙耶は戸惑っているようだつた。

「一、こんな渡されたつて使い方がわからないわよ」

「撃ち方はあなたが教えてあげてくださるわね、平野くん？」

「は、はい！」

「きなりの」指名に平野が元気よく返事をしている。まあ、適任だろう。一タなら上手く教えてやれるはずだ。

「んで……何がどうして一になつた？」

「あの妙な光の後だよな、ケータイとか車が壊れたの」

小室の言葉にうなづきながら、状況を唯一まとめて理解しているであろう沙耶が説明を始めた。

「EMP（電磁パルス攻撃）よ。高々度核爆発、ともいうわ

沙耶の説明を簡単になると、大気圏の上空で核をぶつ放すと電磁パルスなるものが発生して、電子装置がイカレちまつてことらし。つまり、電子機器は一切使えないということだ。おいおい、かなりヤバいんじゃないかそれは。

「じゃあ……もう携帯とか使えないの……？」

「ケータイビニルがヤシや車もよ。たぶん発電所もダメでしょうね」

沙耶の話では、EMP攻撃の対策をしていれば別だそうだが、そんなもんは政府や自衛隊などの「」一部しか施してないらしい。

「直す方法はあるのか？」

高城会長が沙耶に向かつて聞く。相変わらず普通に言葉を話すだけで威圧感のある人だった。

「灼けた部品を変えれば動くかも……全部が全部壊れたワケじゃないだろ？ から電波の影響が少なければ生き残っている可能性も」

あとは、電子機器を使つていない昔の車なんかは大丈夫らしい。絶望的な状況だが、まだ希望はあるようだ。

「すぐに調べる」

「はっ！」

高城会長が部下に指示を飛ばしている。「うまく動いてくれるものがあればいいんだがな。

「沙耶。」この状況でよく冷静に物を見た。褒めてやる「パパ……」

自分の父親に褒められた沙耶は、嬉しそうな顔をしている。実に微笑ましい光景だ……と言いたいところだがさてどうしたものどうか。俺たちは、電気関係をほぼ全て奪われた。最悪の状況がさらに悪化し、これから先に迎える夜は完全な闇だ。ローソクとかランタンがねえとともに動けそうにない。

俺たちが沙耶の説明を聞いていた間に、門の外にいる 奴らはさらに数を増していた。鉄で出来た門はかなり頑丈そうだが、> 奴らの数はあまりに多すぎる。門前の道路を埋め尽くさんばかりに> 奴らが押し寄せているのだ。今は高城会長の部下の数人が抑え込んでいるが、耳障りな音を立てながら鉄の門は軋み続いている。止めどなく押し寄せる 奴らの圧力に耐えられなくなつた門が決壊する。

この場にいた全員の表情が凍りつく。俺もその例外ではなかつた。一斉に 奴らがなだれ込んできた。門のそばにいた人間は逃げる暇もなく 奴らの大群によつて飲みこまれてしまつ。

「か、会長おお、逃げてください！ は、はやぐああぎ……」

男の断末魔を皮切りに、> 奴らは門の近くにいる連中から順番に襲つていく。逃げる者、手に武器を取つて> 奴らに反撃する者もいるが……見るも無残な結末に終わつてしまつ。

「パパ、家に立て籠つて……」

「守つて何の意味がある。押し入られ食われるだけだ！」

高城会長は、激を飛ばして全員に呼び掛ける。まだ安全な隣家のほうへみんなを避難させるようだ。無論、その為には> 奴らを突破しなくてはならない。これだけの大群を相手にである。

俺は斬馬刀に巻いていた布を勢いよく引き剥がした。むき出しになつた斬馬刀を担ぎながら 奴らのほうに向かつて一步踏み出す。

「上坂、どうする気だよ！？」

「ちよつくり時間を稼いでくる」

いのまま立てこもるにしても、脱出するにも 奴らの数は多す

ざる。生き残りたかつたら、戦つしかないだろ。」

「やつだね。」のままでは脱出もままならない

冴子さんも俺の考え方と同意見なのか、村田刀を鞘から抜いて戦闘する構えを見せてくる。互いに笑みを交わす。本当、話が早くて助かるぜ。

「んじゃ、行つてくる」

言葉は軽く、されど死地に踏み込む一步は決意のよつと重く。敵に向かつてただまつすぐに進む。

「アアー！」

俺の接近に気付いて向かつてくる奴らを標的にして斬馬刀を横に一閃する。奴らは血と臓物をまき散らしながら上半身と下半身に分かれて落ちる。間髪入れずに、近くにいた奴らをなぎ払うように斬馬刀を振るつた。刃の届く範囲にいる敵はことごとく両断されていく。奴らの返り血を浴びながら、俺はさりに奴らの集団に深く切り込んでいった。

「ひ、一振りで2、3匹がいっぺんに吹き飛んでる……！」

「私も、負けてはいられないなッ！」

冴子さんも俺に続いた。村田刀が振るわれる度に鋭く銀の光が奔り、奴らの首が空を舞う。冴子さんは返り血の中をまるで踊るように切り進んでいく。雑に奴らを叩き切つているだけの俺とはまるで正反対の剣である。

押し寄せる奴らの一角が崩れていくのが分かつた。20を超

えたあたりで数えるのをやめたが、それでも押し寄せる 奴ら は
まだまだいる。大して減った気がしない。

「どうした、息が上がっているぞ、上坂君」「
ハア、ハア……上等だ。まだまだやれる」

減らず口を叩いた直後、耳をつんざくような爆発音が轟いた。爆
発に巻き込まれた 奴ら が焼かれながら吹っ飛んでいるのが見え
る。火薬の匂いが鼻をつく。ダイナマイトを使つたのか。

「ア……ア」

俺に近寄ろうとしていた 奴ら の首が切られて飛んだ。刀を持
つた高城会長とマシンガンを手にした沙耶の母親が立つている。

「若人にばかり、任せているのは私の性分ではないのでな」「
まったく、無茶をするものね」

沙耶の両親が先陣を切つてここまで切り込んでいたのか。会長た
ちに続いて部下たちも銃を撃ちながら 奴ら と戦つているようだ。

「行くがいい、仲間の元に」「
ですが……！」

この数相手にいくら銃があるって言つても無謀だ。ならせめて沙
耶と一緒に……！

「……娘を頼む」

静かに、だがとてもなく重い言葉。俺の心臓が一際大きく鼓動

するものが分かつた。

「壮一郎さんと私には役割があります。せめてあなたや小室君に娘を託すのが親として精一杯の我がまま。そして、それにすら罪悪感を感じている」

人の上に立つ人間として、自分についてくる大勢の人間を見捨てるることはできない。2人とも、覚悟を決めているのだ。そんな人間を説得する方法なんて俺は知らない。

「……はいッ、必ず！」

親として最も大事なものを両親から託された。ならば、約束は果たさなければならない。俺は冴子さんと共に小室たちの元へ走つていく。

俺は強くなつた。普通ではなくなつたが、少なくとも田の前にいる人を守つてあげられるくらいには強くなれたのだと思つていた。自惚れもいいところである。俺は仲間の両親を救うことさえできなかつた……。

「……冴子さん、上坂！ 急げッ！」

どうやらバギーは無事だつたようだ。先に乗り込んだ小室が俺たちを呼んでいる。絶叫と銃声の交差する混沌とした屋敷を駆け抜けながら俺と冴子さんはバギーに乗り込んだ。俺を合わせて9人と1匹もいるから、ハギーのスペースはギリギリだつた。

「行くぞ！」

小室がハギーを勢いよく発進させる。奴らをひき殺しながら

進んでいく中で、俺は後ろで振り落とされないように車体にしがみついていた。一陣の風と化したハギーは屋敷の門をくぐり抜け、道路を疾走する。ここから脱出できそうな場所は……。

正面の道路に、乗り捨てられたバスとバリケードに使われていたブロックの隙間がある。ハギーでギリギリで通れるかどうかといったところだ。

「狭すぎるわ！」

「えええええ、無理よおーー！」

確かにキツそうだが、他に道はない。となれば男は度胸だ。

「突っ込め、小室オ！」

「よしつー！」

小室は最高速でハギーをカツ飛ばしてわずかな隙間に車体を滑り込ませる。判定は一瞬で下された。瞬きの後、俺たちは隙間をくぐり抜けていた。安心した空氣に富木がほっと息を吐いている。

「これでどうにか……あつ」

「なにも言わないで。お願ひだから」

俺たちが生き残っているのは、逃がしてくれた人たちがいたからだ。地獄と化したあの場所には、まだ沙耶の両親が残っている。

「つか……」

しんみりした空氣の中、無理やり車体の後部にしがみついていた俺はどうにか車内に這い上がるつと腕を伸ばしている最中だった。さすがに態勢が辛かつたのである。右手にムニユリと何か柔らかいものを掴んだ。例えるなら、えらく弾力のある焼き立てのパンのよ

うな素晴らしい感触だ。左手を適当なもので固定して、這い上がる
為に、俺は指に力を込める。

「ふうんソッ……！？」

どうにか身体を車内に滑り込ませることに成功した。シートの感
触が尻に心地よい。

「やつと上がれたぜ。あーキツカッ……ん、どーしたみんな？」

運転してゐる小室以外なんか目を丸くして驚いてんだけど。俺は自
分の右手が掴んでいるものを見て納得した。どうりでいい感触がす
るはずである。俺の右手は沙耶の豊かに膨らんだ胸をわし掴んでい
た。

「おう、沙耶の胸だつたのか。悪い悪い、痛かつたか？」

「あ、あんたはああああツ！？」

「あべしいー？」

沙耶の光速の張り手が俺の顔面を直撃し、吹つ飛んだ衝撃でさら
に宮本の胸に顔を埋める形に。

「ひつ、せやああツ？！」

後頭部を銃床でぶん殴られて俺の意識は闇に飛んだ。目覚めた後、
俺が即座にとつた行動は車内で両手をついて土下座だつた。

「すみませんでした！」

「本当……バカツ！」

まあ、痛かつたけどいいだろ？。しんみりしてもしゃーないからな。これで少しは気がまぎれてくれるといいんだが。うん、ありますと静香姉え以外の女性陣の田が冷たいことなんて気にしませんよ。

「これからどうするの？」

「悪いとは思いますがけど、僕と麗の親探しに付き合つてもうります」

「」から小室たちの家、東署、小室の母親が勤めている小学校を回るらしい。全部回つてもハギーのスピードなら2~3時間もあれば足りるだろ？といつことじだつた。

「国道だ！」

冴子さんの声から間もなく、俺たちは開けた場所に出た。今まで通つていた路地とは違つてかなり広い道路である。

だが、俺たちは田の前に広がる光景を見て田を疑つた。無造作に乗り捨てられた車、道には夕焼けに照らし出された血の跡が生々しく浮かび上がつている。国道には 奴ら が蠢いていた。

「こつぱい……」

「そう、だね」

ありすの言葉に、ケンジさんが乾いた返事をする。無理もない、ようやく切りぬけたと思つたらこれだからな。 奴ら は結構な数だ。このまま突つ切つていくのはさすがに無理だろ？。

「どうしろってんだよ……」

「……音が出るモンがコレしかねーから、 なのか？」

「ええ。おやじは今この街で唯一のHンジン音よ」

だから 奴ら は「こいつに群がつてくる。光に引き寄せられる蛾のよう」。

「「」のハギー水陸両用よね？ じゃあまた水に入れば！」「「」の人数じゃ、浮くかどうか怪しいそつだ」

まあ、明らかに積載ギリギリだからな。むしろオーバーしてるんじゃないか。

「だつたらどうすればいいのよ……」

「無理を承知で突つ切るか……いや、待て。沙耶、別な音があればいいんだよな？」

「まあ、そうね。何か思いついたの？」

結構、ダーティな方法だからな。あんま胸を張れるもんじゃない。折角だからここにあるものを使わせてもらおつかね。

乗り手のいない車は、道路に放置されている。当然、車にはガソリンが入っているから銃でぶち抜けば引火するよな。

鼓膜を痺れさせるほどの轟音。爆発した車が燃え上がっている。狙い通り 奴ら は聞こえたでかい音に引き寄せられている。銃声が出ても、直後により大きな音が出る為什麼だろうか。その間に俺たちは離れた場所を通つて逃げる。バギーは置いていくことになるが、これでどうにか歩きでも突破できるだろ？

「「」、こんなので上手くいくなんて……」

「沙耶、あきらめろ。上坂が無茶苦茶なのはいつものことだ」

「そうですよ、沙耶さん」

「お前ら全員後で覚えてろよ」

軽口を叩きながらも、俺たちは 奴ら と極力戦わないように道

路を進んでいくのだった。そうして物資の補給をかねてとある場所へと立ち寄ることになる。

「 いーなら、色々揃つてゐるはずだ

田の前にあるのは、床主でもかなり大きなショッピングセンターだ。ここまでくれば、小室たちの実家は田と鼻の先らしい。

「さて、何が出来るのかねえ」

何事もなければいいんだがな。

一抹の不安を胸に、俺たちはショッピングセンターに足を踏み入れるのだった。

俺たちは新たな場所へとたどり着いた。これからここで何が待つてゐるのか、何一つ分かりはしない。それでも……俺たちは絶対に生き残らなきやいけないんだ。

大切なだけは、何としても守つてみせる。例えほかの何を失つたとしても構わない。

俺たちの戦いは まだ終わりそうにない。

第1-3話「これで終わるじゃな」（後書き）

第一期、完！

投稿の感覚が空いてしまいと申し訳ないです。

今回で完結……ではなく、まだ続きます。

読んでくださった方、全員に感謝致します。

追記：近い内にOVAネタで番外編を上げるかもしれません。

番外編「はーれむおどりやでっ」（前書き）

今回は番外編になります。アニメ版のOVAを元に作っています。
本編とは関係なく、シリアルもありません。コメディオンリーです。
それではどうぞ。

番外編「はーれむおふるやでつむ」

空には、雲ひとつない青空が広がっている。降り注ぐ太陽の光が
やけにまぶしい。夏にはまだ少し早い時期のはずだが、じつとして
いると軽く汗が出てくるくらいだった。

気が付けば俺は白い砂浜に立っていた。靴越しに感じるサラサラ
とした砂の感触は、俺たちが 奴ら から散々逃げ回っていたアス
ファルトやコンクリートのような固いものとはまるで違うものであ
る。

俺だけじゃなく、小室やコータ、ケンジさんやジーラの男連中を
始めとして沙耶、冴子、静香姉妹、ありす、富本もいる。

「どうして、俺たちはこんなところに……」

「何を言つてるんだよ、京也？」

「コータは話す。俺たちは 奴ら から逃げる途中で運よく小舟を見つけて、奴ら のいないであるつ海へ脱出した。がしかし、面倒になつて途中で海岸からほど近いこの離れ小島に立ち寄つたらし
い。確かに、砂浜には俺たちが乗つてきた小舟が止まつていてのだが、ここに来るまでの記憶がない。

「もう、だつたか？」

「どうしたの京也、調子でも悪い？」

沙耶が心配そうに俺の顔をのぞきこんでくる。その表情はいつも
より柔らかく、女の子らしいものだった。俺の気のせいならそれで
いいか。このところあまりにも色々ありすぎたからな。

「ははっ、大丈夫だつて。それより何があるか分からねえから用心

しねえとな

少しだけ違和感を感じながらも、俺は笑ってそう答える。みんなが当然のように受け入れているなら、特に問題はないはずだ。俺が過剰になりすぎてるだけだらう。

「大丈夫でしょ。奴ら は海を渡れないんだから」

富本は嬉しそうな表情でそう言つた。まあ、確かに海に囲まれたここなら先客がいない限り安全なのか。今はシーズンじゃないから客も入つてないだらうし。とはいえ、雨風を凌げる場所がないのは辛いな。食料も水も底を尽きてるから探さないといけない。

「お家、あるよ?」

ありすの指差した先には、海の家が建つていた。それほど大きいものではないが、ちゃんとした建物だ。何という幸運だらう。

「わあ〜、ホントだ

「よし、あそこから探索してみよつかー！」

「うん！」

海の家『地獄谷』。赤を基調とした看板には白い文字でそう書いてあつた。店が休業中だつた為か食料こそなかつたが、非常用のミネラルウォーターなんかは結構な数揃つていた。これでしばらくはどうにかなりそうだ。

「至れり尽くせり、だね」
「ともかく助かつたな」
「しつかし……沙耶たち遅えな」

俺たち男4人（ジークはありすと一緒に）は、店の外にいる。店内で水着を見つけたので、汗とかで汚れた服を着替えようという話になつたのだ。俺たちが着替え終わつてからそこそこ時間が経つているのだが、一向に誰も出てこない。

「女性の着替えは時間がかかるものなんだよ、上坂君
「そんなもんすかねえ」

さすがに妻帯者であるケンジさんの言葉には重みがあった。そういえば、静香姉えとどつか行く時にもいつも待たされた記憶があるな。やっぱ男と違つて色々面倒なんだろうかね。

「それにしたつて……着替えがこれしかないってのはなあ
「まあ、確かにね
「格差を感じるよな」

小室とケンジさんがボヤくのも無理はない。女物の水着は種類がやたらと豊富にあつたのだが、対して男物の水着はほとんどなかつたのだ。小室とケンジさんは男の象徴がばつちり浮き上がって見えそうなくらいぴっちりしたブーメランパンツを履いている。俺に至つてはそれすらなかつたので赤いふんどしだ。慣れてないせいか、すつげえ違和感があるぞこれ。せめてトランクスぐらい置いてほしかつた。まあ、それでも俺はまだマシである。

「小室たちはまだいいじやない、僕なんてコレだもの！」

「コーラに至つては男物ですらない。女子が着る紺色のスクール水着だつた。コーラの無駄なお肉が多めな身体をぴっちりと包み込んでいる。サイズが微妙にあつてないのか、まるでボンレスハムのよ

うだった。『——寧に胸の辻札のところは『2・B ヒラノ』と書かれている。

「じゃんけん勝ててよかつたぜ……あれを着たところを見られたら生きていられる自信がねえ」

「あははっ！」

何故か嬉しそうに見えるコーダの首から下にはあまり視線を向けないことにする。野郎のスク水姿なんざ見たところで誰も得をしないからな。せめて他の女子に着せてやれば違つただろうに。暇つぶしがてら、俺は小室たちとスク水について話すこととした。

「似合にやうなのはありすちゃんじゃないか？ 年相応だし」

「静香姉えが着ると……イメクラにしか見えねえな。行つたことねえけどよ」

「静香先生かあ～」

静香姉えの日本人離れした身体に小さめの水着を着せたところを想像してみた。

この年齢で学生のものを着るのはやはり恥ずかしいのだろう。成熟した女を感じる身体を紺色の薄い布切れ一枚で隠しているのだ。サイズがややあっていいのか、水着の股のあたりが食いこんでしまっている。頬を赤く染めて少しもじもじしながら、静香姉えは聞いてくる。

『ビ、ビつかしら……や、やつぱり似合わないわよね？』

「とまあ、こんな感じか？」

「や、やめといつ。色々マズい」

「そ、そだね」

「ああ、それが賢明だろーよ」

健康な思春期の男子は揃つて前かがみになるしかないだろう。ある意味とても似合つていると言えなくもない。

「まあ、とりあえず俺が言いたい」とはだ

ジーク、今すぐ俺とポジショントを変わつてくれ。みんなの着替えが見放題じゃねえか。静香姉えは身内でありすは子供だから除ぐとしても美少女が3人もいるんだぞ。行かなきや男じやねえだらここは！

「や、やめとけつて上坂、死ぬ氣か！？」

「大丈夫だ。ブツ飛ばされて意識が落ちる前に脳内フォルダに焼きつければツ、問題ない！」

「いや、そうじやなくてさ」

「へえ、ずいぶん楽しそうじやない……京也あ？」

背筋に冷たいものを感じながら振り返ると、着替え終わつた沙耶がそこにいた。長い髪は邪魔なのか、団子みたいに丸くしてまとめている。メガネはそのまま、チャイナ服が似合いそうな感じだった。

淡いピンク色のビキーに包まれた身体は、高校生とは思えないほど発育している。胸を包む生地の面積は小さく、肌の大部分が露出する形だ。小柄な体に似つかわしくないほど豊かに実つた双つの果実が動くたびに柔らかく揺れて存在を示している。これで成長途中だというのだから、将来有望にもほどがあるというものだ。水着にはフリルが付いていて可愛らしい。そういうえば屋敷でもそんな感じの服を着てたつけな。沙耶はこういうのが好きなんだろうか。

「似合つてんぞ、沙耶」

お世辞でもなんでもなく、自然に言葉が出てきた。

「あ……あり、がと」

どうやら今の一言で怒りも消え失せたようだ、沙耶は耳まで真っ赤にしながら照れていた。いやあ、眼福だね。寿命が延びるつもんだ。

「服を着替えられてすつきりしたよ」

「おお～」

思わず感嘆の声が漏れた。次に出てきたのは冴子は白いスポーツイナ感じのする水着だった。健康的な感じがして、とてもよろしい。髪は後ろで二つの三つ編みにしてあり、冴子の持つ清楚な印象が強調されている。特に鍛えられてキュッと引き締まつたお尻のラインが芸術的だ。

「そ、そんなに熱い視線で見つめられると……照れるな

「ああ、悪い。魅力的だったもんでつい」

「か、上坂君も似合つていいよ。すげえ男子らしげ

照れながらも、冴子なりにほめてくれているのが分かつたので素直に受け取つておく。

「うつ……せつぱぱサイズじゃ分が悪いか

沙耶が何やら悔しそうにしているのが可愛らしい。氣にしたの

が、お前だって十分過ぎるほどに魅力的だぞ。それに、あんまり丁力いと静香姉えみたいにサイズがなくて苦労する。

「ねえ、何の話？」

富本は、紺色のホットパンツに面積のかなり小さいグリーンのビキニか。ホットパンツから出でているビキニのヒモを引っ張つてみたい衝動に駆られるね。下はどうこつた感じなのか、気になつてしまふがない。あとは長い髪をポニーtailにしているのが個人的には高評価だ。

しかし、じつして比べてみるとそれなりにでかい部類に入るはずの富本が若干控えめに見えてしまうあたり、うちのメンバーの基準値が平均を大きく上回っているのがよく分かる。

「上坂君、なんか微妙に失礼なこと考えてない？」

「いやいや、俺は形とか全体のバランスって重要だと思つぜ。なあ

小室

「お、俺にいきなり振るか！？」

そこはほり、リーダーが氣のきいたセリフで富本をテレさせてくれるのを期待したんだよ。

「そりや、静香先生なんかと比べられたアレだけや……」

「う～、お腹すいちゃつた～。栄養ないとちぢんじやうわ

「いや静香姉え、ラクダのゴブじやねえんだからよ……」

へえ、胸についてるそれは栄養タンクだったのか。だとすればうちの女性陣は割とサバイバルな状況に強いんじやなかろうか、などとくだらないことを考えつつ、相変わらず天然な我が姉に突っ込みを入れる。

静香姉えは青いビキニなんだが、胸の盛り上がり具合がハンパじゃない。よくあのサイズで垂れないもんだと感心する。あんまり運動しているところを見たことがないんだけどな。

つーか、静香姉えの下の水着まるでヒモだろこれ……後ろからだと尻がほとんど見えてんじゃねえか。どいつもこいつも水着の生地が小さいのはつかりだし。俺としては嬉しいからいいんだけど。

「へえ、よくおさまるサイズのがあつたなあ」

日本人にしちゃ珍しいサイズだからな、もしかすると置いてないかもと思つたんだが。

「うん、じこすいく品ぞろえが良かつたの。どう、似合つてる?」

「ああ、いい感じだぜ」

「うん、ありがと~」

「お兄ちやん、ありすはー?」

最後にジークを頭に乗せたありすが出てきた。明るめな色合いのワンピースタイプの水着である。ありすの可愛い子供らしさを十分に引き出していた。他が他なのでなおのこと新鮮に感じる。ジークも帽子と水着を着ているのでセットで見ると実に心が和む。

「おう、ありすも可愛いぞ」

「えへへ~」

さてと、これで全員そろつたワケだが、とりあえず食料の確保が最優先だろつ。

「じゃあ、手分けして食料を……」

言いかけた小室だつたが、宮本と沙耶、静香姉妹は遊ぶ気まま
んらしい。冴子やありすは協力してくれそうだつたが、ここは俺ら
で探したほうが良さそうだな。まあ、4人もいれば何とかなるだろ
う。

「へいへい。食料は俺らで探しておくからどうやつくり羽を伸ば
してくださいや、お姫様方」

「まあ、しょうがないか」

「そんじや、食料を調達に行きますかね」

そんなこんなで、俺たちは手分けして食料を探すこととしたのだ
つた。陸のほうは小室とケンジさんに任せて、俺とコーダは海のほ
うへ向かう。魚を入れる網は海の家にあつたのでありがたく使わせ
てもらうことにした。とりあえず、コーダにサバイバル術の基礎で
ある魚の獲り方をレクチャーしてもらつた。現在は、別行動で魚を
探しているところだ。

「よつ、と」

銃剣の先に刺さつた魚を網に放り込む。木の枝に銃剣を縛り付け
て作った即席のモリは非常に役に立つた。魚を探し始めてから数時
間でそれなりの数の魚を手に入れることができた。これならコーダ
の分も合わせて晩飯はみんなで腹いっぱい食えるだろう。

「それじゃ、もう少し不甘ばりますかね」

と、気合いを入れなおしたところで急に視界が真っ暗になつた。
それと同時に背中で柔らかくて温かな2つのマシュマロが潰れる感
触が伝わってくる。

「うおう？！」

「だーれだ？」

俺に対してもうひととをやる人物は静香姉えしか心当たりがないんだが、声が違った。

「沙耶か」

俺が名前を告げると視界が元に戻る。後ろを振り返ると、してやつたりといつ表情をした沙耶が立っていた。

「ふふつ、驚いた？」

「まあな」

お前にいつことするキャラだつたか？ やはり今日の沙耶はいつもと違つ感じがする。本人が楽しそうなので別にいいんだが。

「どうした、みんなで遊んでたんじゃなかつたのか」

「様子を見に来たのよ。たくさん遊んだ後に晩御飯がないんじゃ困るでしょ」

「くくつ、違いねえ」

「でも余計な心配だつたわね。へえ、結構獲れてるじゃない」

沙耶が嬉しそうに網の中を覗き込んでいる。前かがみになつているせいで、ただでさえ豊かな胸の谷間が強調されて目が釘付けになつてしまつ。いい目の保養だ。

俺の視線に気づいた沙耶がさつと胸を隠す。恥ずかしいのか、顔に赤みが差している。

おや、蹴りの1発は覚悟したんだがな。今日は物理的な反撃はこなこようだ。

「……ど、どじ見でんのよ、すけべ」

「男はみんなエロこもんだ」

「そ、そういうもんなの?」

沙耶のおかげで活力の補充できた俺は、さらに魚を獲り続けた。沙耶に網を預けた網の中身がいっぱいになつてきた頃には既に夕方だつた。十分な量を確保できたので、そろそろ帰ろうかと考え始めていると、珍しいものを発見した。

「沙耶、いいもんあつたぞ」

俺が手に持つてるのは、黒くてやたらトゲトゲした海の幸である。

「やれつて、ウーへ」

「おひ、じこつをじーしてと」

俺がウーの殻を銃剣で割ると、オレンジ色の中身がたっぷり詰まつていた。指で少しだけすくつて、食つてみる。しづぽとに加えてうに独特的の濃厚な風味が口の中になつぽに広がつていく。

「それは持つて帰らないの?」

「残念ながらじこつ1個しか見つからなかつたんでな。じこで食つちまおひ」

おみやげはいっぱいあるし、これは労働報酬つてことで許してもらおう。俺はじこを指に乗せると沙耶の顔の前に持つていた。

「ほれ。新鮮だからうまごぞ」

「え……？」

『どういう反応をするか気になつた。いつもの沙耶なら『食べれる
わけないでしょ！？』とか言いながら顔を真っ赤にしそうだと思つ
ていたら、沙耶は予想外の行動に出た。

「はむ……ん、ちゅっ」

小さな唇で俺の指先に吸いついてきたのだ。まさかの直接食べる
という選択です。ウーはあつという間に吸いこまれて、後には温か
な沙耶の唾液で濡れた俺の指だけが残つていた。

「ホントにおいしいわね。びづいたのよ、固まつちゅって
「あー、いや……」

「ひづいう時ははどういう反応をしたらいいんだろ？上手い対応が
思いつかない自分が情けなくてしようがない。心臓の鼓動がやたら
と早くなっているのが分かる。しょうがねえだろ！ 彼女いない歴
＝年齢だぞ俺は！」

内心の動搖を隠しながら、俺はとりあえず残つたウーを一気食い
した。

「あつ……もうちゅつと食べたかったのに」

「悪いな。そろそろ帰らうぜ、みんな腹空かせて待つてるだろ！」

「そうね、戻りましょうか」

拠点である海の家へと戻つた俺たちは、早速飯の準備をする」と
にした。どうやら陸のほうには食いものがなかつたらしく、小室と
ケンジさんとが申し訳なさそうにしていた。

「『めん上坂、なんとか落ちた枯れ葉でたき火の用意はできたんだけど』

「はつはつは！ 心配するな、これを見よ！」

中身の大量に詰まつた網を突き出して見せる。空腹でちょっと元気がなさそうだったみんなの表情が一気に明るくなった。

「わあ～、おさかなだ！」

「ずいぶんと大量じゃないか」

「ただいま～」

「一タが帰つてきた。網いいっぱいの魚と、どうやって獲つたのかタタなんかもうつた。

「これだけあれば、豪華な食事になりそうね」「ああ、飯にしようぜー！」

小室たちの準備してくれていた枯れ葉にライターで火をつけて、魚を焼く。時刻はすっかり夜になつていて。

俺は一足先に乾いていたワイシャツをエプロン代わりに羽織つている。みんなでたき火を囲みながら、魚が焼けるのを待つ。

「お魚、まだかな～」

「もーちょい待つてくれよ。こうこうのはしつかり焼かないとな
「いい匂いねえ～」

辺りには、魚の焼ける香ばしい匂いが漂つっていた。今日は口クに何も食べていないからより待ち遠しく感じてしまう。静香姉えあたりは今にも食い付きそうな勢いだつた。

「」しても、よくひょうじいい枯れ葉なんてあつたもんだな
「ああ、森のまつにたくさんあつたからさ。ジークが見つけてきて
くれたんだ」

「そつか、お手柄だぞジーク」
「わんつー。」

ジークをわしゃわしゃ撫でながらさりとてると、俺は魚の匂
いに混じつて臭ぎなれない妙な匂いがするのを感じた。とはいへ、
まさか毒があるわけでもないだろ。俺は普通に魚を焼き続けた。

「変わった匂いだな……？」
「わー。ありす、眠くなつてきやつた」

遊び疲れちまつたんだろ。だつたら寝ちまつ前に最初に焼け
た魚はありすにあげようかね。

「むー……急に、田まーが……」
「何だかぐるぐるするわねー」

あらずだけじゃなく、みんなが田まこやふらつきなんかの異常を
訴え始めたのだ。一二どうやら俺もおかしことに気がついた。

「」、これはまさかつー？

匂いの正体に気付いた静香姉えが顔色を変えている。

「知つてゐるのか、静香姉え？！
「これ、危ない薬みたいな効果があるのよー。」
「おーおー、なんでそんな危ねえもんがこんな普通の島に生えてん
だよー？」

要するにヤクの類だ。あれ、それってすゞへマズいんじゃねえの？

「ど、とにかく煙を吸つちやダメー 早く！」から逃げないとお…

「…

静香姉えが叫ぶ。だが、気付くのがあまりにも遅すぎた。たき火のそばにいたメンバー全員が既に結構な量の煙を吸い込んでしまつてこる。

「うへ、ねむいよ♪」

「あゅうん」

ありすとジークがぱたりとその場にくずれ落つる。身体が小さい分早く効果が發揮されてしまつたんだろう。

「け、ケンジさんまあつすけやんを建物のまへー…」

「わかつた！」

小室の指示で、ケンジさんはふりつきながらも、ありすを抱えて海の家のまへに走つて行つた。そつか、あつちなり煙はきてないからまだマシか。

「だつたうといひとこから離れるが」

「ヒヤッハー！」

「一タがいきなり奇声を上げながら立ち上がる。まさか、煙の効果がもつ出でんのか！？」

「お、おこロータ。どう行くんだよッ。」

俺の制止も聞かず、わけのわからないことを叫びながら「一タは森のほうへと走り去つていつてしまつた。大丈夫かあいつ。

「なら、せめて残ってるメンツだけでも…」

京くん

「どうした静香姉え、動けるなら自分で移動してくれると助かるん
だが、

「身体が、熱いのぉ！」

囁くように、甘ったるい声で俺の名前を呼びながら、静香姉えは

俺にすりよってくる。その瞳はアルコールを飲んだ時のようにならんとした目つきだった。ぶつちやけると口。い。

「まさか静香姉え……」

マジかよ……既に手遅れだつてのか。他はどうだ?

「ほーんと、今日は暑いわねえ！。あ、脱いだら涼しくなるかなー」

やたら楽しそうに水着を脱ぐとしている宮本。しかし、この状況でもなければじっくり鑑賞させてもらいたいところだが、今はそんな暇はない。とりあえず手遅れなのがよく分かった。

「涼子、お前は？」

「え、どうしたか……」

冴子は若干苦しそうな表情だが、まだまともである。小屋もまだ動けるから大丈夫だ。あとは、沙耶か。

「沙耶、大丈夫か」

「う、うん。何とかね」

顔が赤いけど、返事ができるなら大丈夫か。ちょっと氣が引けるが、富本と静香姉妹は正氣になるまで放つておくしかない。俺は沙耶の手を引いて、この場から逃げ出やつとする。

「京也の手つて、こんなにおっせいんだ」

「ああ？ 今はそれビビンジヤ……」

沙耶が動かない。風邪でも引いたみたいにぼーっとしてゐ。しゃあない、荒療治だが許せよ。

「田え覚ませ、沙耶！」

女の顔をぶん殴るワケにもいかないので、尻の辺りを狙つて平手で打つた。乾いた音に続いて、沙耶がよつやく我に返る……かと思つたらやたらなんだか瞳がキラキラしていらっしゃる。心なしか頬もさつきより赤く染まつているような氣がした。

「あは、もつとぶつて！」

「おいイー？」

ダメだこいつ……早くなんとかしないと。とはいえビーしたらいい。マゾにつける薬なんかねえぞ。

「あ、君はそういう趣味があつたのか……」

「もう、京君ったらあー

「いやいや、俺にそんな趣味はねえよー」

冴子と静香姉妹は何やら興奮気味に身体をくねらせて、勘違いしている、様子だった。冴子もアウトか。

「……上坂、正気なのはもう俺とお前だけだ

「ああ、そろみてえだな」

「逃がさないわよ」

俺たちだけでも逃げようとした瞬間、宮本が立ちあがり獣じみた速度でこちらに向かつて飛びかかってきた。回避は間に合ひそうにない。追いつめられた俺が最後にとつた行動、それは。

「小室防壁いッ！」

「うえ？」

「あ、たかしいー」

そばにいた小室を盾にして飛びかかってきた宮本に突き出すこと。それだけだった。

「か、上坂あ？！」

「すまん、小室……お前の犠牲は忘れない」

「いや、犠牲にしたのお前……」

「たあかあしいー こんなの脱いじやいなよ」

「うわああああ！ れ、麗やめろ！？」

肉食動物と化した宮本に襲われている小室は、あつといつ間に最後の壁を破られた。まあ、もともと一枚しかなかつたしな。いや、ありすが気絶してくれていてむしろ助かつた。こんなシーンは子供

には見せられん。

小室をひん剥いた富本は、小室の下半身を見ながらぼそりと一言。

「…………」

「ぐああああああああああああシーっ。」

「小室…………」

富本…………男に一番言つちやいけないワードだぞそれ？ 言い訳させてもひつと多分小室も緊張してるとかそんな……あ、ダメだ、小室のやつ氣絶してら。

小室が意識を失つてしまつたことで興味を失つてしまつたのか、富本が再度俺にターゲットを変更してきた。状況は逆戻りどころか、むしろ悪化してゐる。そういうや、沙耶たちがいない。どこ行つたんだろうか。

「京也あ～」

振り返つた瞬間、沙耶にすごい勢いで抱きつかれた。砂浜に倒れる俺と沙耶。沙耶は人懐こい猫のようにじやれついてくる。

「えへへ～」

ああ畜生…………可愛いなあ！ これが素面だつたら最高だつたのにと余計なことを考えてしまつたのが運の尽きだつた。右腕を冴子に、左手を静香姉えに掴まれてしまつ。

「高城君ばかり…………するいぞ。私も可愛いがつて、ほしい」

「お姉ちゃんも仲間に入れて～」

みんなの力は強く、押し倒された状態では身動きがとれなかつた。

「ふふひ、もう逃げられないわよ」

「ハア……はあ……」

夜空に星の瞬く砂浜で、俺は美少女たちに囲まれている。女性特有の甘い匂い、身体に触れる柔らかな感触が頭を痺れさせ、正常な思考を俺から奪っていく。興奮しているのは煙のせいなのか、状況のせいなのか。もはや、全てがぐちゃぐちゃだ。

「ねえ、京也は私がキライ?」

「嫌いなわけ……ねえだろ?」

まるで馬に乗るよつに俺にまたがった沙耶が、泣きそつた瞳で俺を見つめながら聞いてくる。反則だろ、これは……。

「だつたら、いこみね」

沙耶の顔がゆっくりと近づいてくる。互いの息遣いをえ感じられる距離まで唇は近づいていき、そして。

「はつー?..」

田を見ますと、俺はショッピングモールの寝具売り場にいた。そつだ、ベッドを見つけてちょっとだけ休むつもりで、いつの間にか寝ちまつたのか。沙耶が馬乗りになんてなってないし、俺もちゃんと服を着ている。今までのは全部夢だった。

「な、なんて夢見てんだよ俺は

色々あつすぎて溜まつてんのかね……うわ、どんな顔して沙耶た

ちに会えぱいいんだよ。

「あ、アンタ……な、なんていふと口走つて……」

「え？」

田の前には沙耶が立っていた。何やら顔を赤くして、声を震わせている。どうやら俺がさつきまで見てた夢の寝言を聞いていらっしゃったようだ。

言訳をするヒマもなく、沙耶の脚が容赦なく俺を踏みつけた。腹部に走る痛み。ああ、間違ひなく現実だわ。」りや。

を受け続けるのであつた。

以上が、俺の見たちょっと変わった夢の結末である。

番外編「はーれむおんがくわいだい」（後書き）

お久しぶりです。狂犬です。

間隔がものすごく空いてしまい、申し訳ありません。書き始めてから半年も経つのに相変わらず下手ですが、読んで頂けて嬉しく思います。

今回は番外編です。沙耶を思い切り（R指定の範囲内におさまる程度に）デレさせてみましたが如何でしたでしょうか。

こんななんじや足りねえよもつとやれ、とか俺の沙耶はこんななんじやねえ！ など色々あるかと思いますが、これからもよろしくお願ひします。感想やメッセージなど頂けると嬉しいです。

次回からは2クール目になります。出来次第投稿しますのでどうぞお楽しみに。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1002v/>

学園黙示録 HIGHSCHOOL OF THE DEAD if ~イレギュラーの少年~
2011年12月21日19時54分発行